

英語

一 組織と制度の変遷

1 百年の変貌

英語教育は、高等商業学校附属外国語学校が一八九七（明治三十）年に設立されて以来、この百年間途絶えることなく、ほぼ一貫して本学の外国語教育のなかで重要な役割をになってきた。附属外国語学校発足時において、英語科は七学科の一つとして設置され、教官四名、新入生二六名で、一週二四時間の授業（英語のみ）を三か年にわたって行うことが「高等商業学校一覽 従明治三十年至明治三十一年」に記されている。まさに名のと通りの「外国語」学校であった。百年後の今日（一九九八年）、学校は四年制の学部に加えて、大学院（博士後期課程まで）を有する東京外国語大学となり、英語は、二六専攻語の一つ、一九名の専任教官と、一学年七〇名（三年次以降は八五名）の学生定員を擁するまでに拡大している。他方、英語の授業は、一・二年生についていえば一週一二時間と半減した。この前期の専攻語計二四時間は、卒業単位一二六の五分の一を占めるに過ぎない。本学は、単なる語学校から脱して、「外国の言語とそれを基底とする文化一般につき、理論と実際にわたって研究教授」（学則第一条）する大学へと大

きな変貌を遂げたのである（ここに挙げた数値は、注釈なしでは誤解を招きかねないが、詳細は本論に譲る）。

本編では以下、この百年の英語科の歴史をたどり、変化をあとづけるとともに、外国語学校としての変わらぬ性格（伝統形成）についても明らかにしたいと思う。ただし、その前に江戸期における英学の歴史を概観し、英学が発展を遂げるなかで、一八七三（明治六）年に東京外国語学校（いわゆる旧外語）が設立され、その英語科がわずか一年で廃止され、東京英語学校にいたる経緯を簡単に記しておく。

2 前 史

（1）蘭学から洋学へ

日本人が英語と接した公式の記録としては、関ヶ原の戦いの年（一六〇〇年）に土佐に漂着し、のちに徳川家康の外交顧問として重用されたイギリス人ウィリアム・アダムズ（日本名、三浦按針）の話がよく知られている。しかし、アダムズを介して始まったイギリスとの通商も、一六三〇年代から幕府が採ったいわゆる鎖国政策によって途絶え、以後、一八五三（嘉永六）年に米國艦隊司令長官ペリーが来航して開国を迫るまで、二百年以上にわたって、西洋諸国では唯一オランダだけが、長崎の出島での通商を許されることになった。したがって、江戸時代を通じて、日本が西洋の学術・文化を知るための外国語はもっぱらオランダ語であり、江戸時代の洋学といえば蘭学の謂いであった。

しかし、英語学習は、ペリーの来航を遡る半世紀前に開始されている。すなわち、一八〇八（文化五）年、イギリスの軍艦フェートン号が、オランダの国旗を掲げて長崎港に乱入し、薪水・食料を奪うという事件を起こし、これに慌てた幕府が、翌年長崎通詞に英語学習を命じたのがそれである。日本英学史では、通例これをもってわが国の英学

の発端としてゐる。この前後から、日本近海は、外国の商船・捕鯨船・艦船の出没によつて、にわかに慌ただしさを増す。それともなつて、外国人・外国船に関わる事件が各地で発生し、ペリーの来航にいたつて、外圧は最大の高まりを見せるのである。こうした事態に、幕府も本格的な外国研究および外交担当官・翻訳官の養成の必要を痛感し、一八五五（安政二）年に洋学所を開設した。翌年にはこれを蕃書調所と改称し、単に翻訳・調査を行うだけでなく、生徒を募集してオランダ語を教授することを決定。五七年一月開講の運びとなり、ここに初めて官立の外国語学校が誕生した。

外国語教育の観点からして、蕃書調所のその後の歴史で注目すべきは、開設わずか五年後の一八六〇（万延元）年に、外国語の正科がオランダ語から英語に代わつてゐることである。これは、しかし、フェートン号といひペリー艦隊といひ、鎖国日本を脅かした主たる国が、英語を母語とするイギリスとアメリカであつたこと、他方、十九世紀半ばにおいて、オランダがすでに世界の覇権争奪戦から完全に脱落し、その地位をイギリスに譲つていた事実を考えれば、至極当然の措置だつたといえよう。

この蘭学から英学への交替を身をもつて体験した一人に、福沢諭吉（一八三四—一九〇一）がゐる。福沢は一八五五（安政二）年、自らの蘭学に磨きをかけるべく大坂の緒方洪庵の塾に入門、たちまち頭角を現して塾頭にまでなつた。当時の横浜は、まだ開港したばかり。外国人があちこちに粗末な小屋を建てて店を出していた。そこで福沢は、彼らに向かつて得意のオランダ語で話しかけてみるのだが、お互い言葉が通じない。店の看板もビンの貼り紙の意味もわからない。英語だつたからである。今わが国は条約を結んで、世界に国を開こうとしてゐる。これからは「一切万事が英語」の時代になるはずだ。福沢はこう悟り、「死物狂いになつて」学んだ蘭学をきれいさっぱりと捨て、以

後英語の習得に専心する（『新訂 福翁自伝』岩波文庫、一九七八年、九九ページ参照）。そして「英学発心」の翌年（一八六〇年）、勝海舟・中浜万治郎らとともに咸臨丸に乗り組んで太平洋を横断し、アメリカの土を踏むのである。時代の行く末を読んだ見事な転身だった。

以上は、外交・国防といったいわば国家的要請から来た英学の起こりであるが、福沢の描く横浜の例にもあるとおり、主要な港には陸統と外国商人がやってくる。すなわち、西洋文明の波は開国とともに民間レベルでもどっと押し寄せたのである。しかも、「当時日本に滞在していた外国人の半数以上がイギリス人とアメリカ人でしめられて」いたため、「日出ずる国で」「は」英語がある程度まで公用語になりつつあった（メーチニコフ「東京外国語学校の思い出」『回想の明治維新——ロシア人革命家の手記』岩波文庫、一九八七年、二七三ページ）。したがって、幕末から明治初年にかけては、官吏ばかりでなく、民間人のあいだでも英語学習熱が空前の高まりを見せることになった。これに応えたのが、英学の私塾であり、官立・公立の学校だった。私塾としてよく知られているものに、東京だけでも、福沢の慶應義塾（創立一八六七〔慶應三〕年）、箕作秋坪の三又学舎（一八六八〔明治元〕年）、鳴門義民の鳴門塾（一八六九年）、尺振八の共立学舎（一八七〇年）、中村正直の同人社（一八七三年）等があり、多いときには、それぞれが数百人の塾生を抱えていた。そこでは、言葉としての英語だけでなく、英語の原書を使って、地理・歴史・経済・窮理（物理）などが教授された。また全国各地に約九〇校存在したという藩校でも、英語は主要な科目となっていた。英語の普及については、一八七二（明治五）年、文部省が中学校（上等、下等各三か年）の正課として英語教育を実施したことも忘れてはならない。かくして英学は、蘭学・国学を完全に押ししのけ、学問の主流を占めるにいたったのである。

(2) 東京外国語学校(旧外語) 英語学科

学級編成と時間割

一八七三(明治六)年十一月、官立の外国語学校として東京外国語学校が開設されるが、これは既設の学校の統廃合によってできたものであって、明治初年の英学熱の高まりの中で、無から新たな理念に基づいて作られたものではない。英語学科については、その淵源を蕃書調所に有する開成学校の語学生徒を移管してできたものである。このとき独・仏学科の生徒も同時に外国語学校に移っている(この経緯については、本書の「通史第一編」参照)。

英・仏・独語学科においては、生徒をまず上等・下等に二分し、それぞれを第一級から四級まで分ける。各級は六か月の課程とし、修業年限は四年とした。一週あたりの授業時間は、「外国語学校教則」によれば、「一日六時間即ち一週四日間二十四時ノ課業トス」(第三條)とある。ところが、実態はここに規定されたものとはかなり異なっていたようで、翌七四年三月発行の「東京外国語学校官員並生徒一覽」を見ると、時間割は、下等の第一級から第六級までが掲載されているだけで、上等の時間割は見あたらない。生徒の名前も上等については、第六級に一名の記載があるのみである。上下各六級あったとすれば、これは四年制ではなく、六年制を前提としているはずである。下等第一級から第四級までは各一クラス(生徒数はそれぞれ、二五、三〇、四四、三五名)、第五級は甲・乙の二クラス(それぞれ、四一、二九名)、第六級は甲・乙・丙・丁の四クラス編成となっている(それぞれ、三七、二九、二六、二四名で、英語専攻生総数三二一名)。詳細は「資料編」に譲り、以下には下等第一級と下等第六級丁の時間割のみを掲げておく。

英語学下等第一級 教諭 米人 ワイラル

	時	月	火	水	木	金	土
自八時 至九時	読方	地理	読方	地理	読方	地理	
自九時 至十時	文法	作文	文法	読方	文法	作文	
自十時 至十一時	書取	会話	書取	会話	書取	会話	
自十一時 至十二時	綴字	歴史	綴字	歴史	綴字	算術	
自一時半 至二時半	習字	算術	同	同	同	習字	
	体操	同	同	同	同	同	

それぞれの級の時間割から、各科目の一週あたりの時間数を計算してみると以下のようになっていることがわかる。

下等第一級

読方、四時間。文法・書取・綴字・会話・地理、各三時間。習字・作文・歴史、各二時間。算術、五時間。

下等第二級

読方・文法・書取・綴字・作文・会話・地理、各三時間。習字・歴史、各二時間。算術、五時間。

下等第三級・四級

読方・算術、各六時間。文法作文・会話・習字・綴字・書取・地理、各三時間。

英語学下等第六級丁 教諭 大石道直

	時	月	火	水	木	金	土
自八時 至九時	読方	同	同	同	同	同	
自九時 至十時	算術	同	同	同	同	同	
自十時 至十一時	会話	同	同	同	同	同	
自十一時 至十二時	綴字	同	同	同	同	同	
自一時半 至二時半	習字	同	同	同	同	同	
	体操	同	同	同	同	同	

下等第五級・六級

読方・会話・綴字・習字・算術、各六時間

先に挙げた時間割を見ればわかるように、授業は月曜から土曜まで毎日あり、午前中は八時から十二時までの四時間、午後は、一時半から二時半までの一時間行われ、「放課後」に毎日体操が行われていたことになる。第五・六級では算術六時間以外はすべてが語学で占められているが、算術だけは第一級においても五時間と重視されている。語学以外の科目としては、算術のほか、第四年級以上に地理三時間、第二年級以上に歴史二時間が加わるのみである。

では、右の時間割に基づいてどのような授業が行われていたのだろうか。さいわい太田雄三の『英語と日本人』（講談社学術文庫、一九九五年、八六―八七ページ）に、宮部金吾の『自叙伝』が引用されていて、それを説明してくれる（宮部は、一八七四年当時、英語学下等第六級丁組に在籍し、先の時間割にしたがって大石道直教諭のもとで授業を受けていた）。すなわち、「教育方針は全部英語の所謂正則主義で、教師は英米人が主となり、下級には邦人が加はり、最下級は邦人のみで担当した。……毎月若しくは二、三箇月毎に小試験が行はれ、その成績が優良なるものは抜擢進級せしむる制度であった」。

英語学科の分離独立

こうしてできた英語学科は、しかし、一八七四（明治七）年十二月には外国語学校から分離され、東京英語学校として独立するので、東京外国語学校英語学科は、わずか一年で歴史の幕を閉じてしまう。では、どうしてこのような事態にいたったのであろうか。その直接の原因は、文部省管轄の開成学校と外務省所管の語学所を、特に明確な外国語学校の理念もなく安易に併合したことに求められよう。この間の事情は、外国語学校教則が、冒頭の第一条におい

て「此学校ハ……二種ノ学校ト見做スヘシ甲ハ通弁ノミヲ志スモノヲ教授シ乙ハ通弁ヲ志スモノ及専門諸科ニ入ラント欲スルモノヲ教授ス」と規定していることから明らかで、最初から目的の異なる学校が併存していたのである。外国語学校では英語専攻生だけで、仏・独・清・魯語の生徒の総計を上回っていたが、これは明治初年の全国的規模での英語ブームの単なる反映ではない。当時の高等教育は、ほとんどすべてが英米人の教師によって、英語で書かれた教科書を使って行われていたため、「専門諸科ニ入ラン」とすれば英語を学ばないわけにはいかなかったのである。「専門学生徒」にとつて、英語は目的ではなく手段であつた。

英語科の生徒と教官をもとに外国語学校から独立した東京英語学校は、一八七五（明治八）年一月、日本人教諭五名、外国人教諭九人（イギリス人八、アメリカ人一）、下等第一級から同第六級までの生徒三三七人で授業を開始している。校長は、外国語学校校長の肥田昭作が兼任した。組織としては、やはり上等、下等に分かれ、前者は語学の専修者、後者はそのまま上等科に進む者、および東京開成学校に転学して専門科を修める者の予科と定めている。履修科目は、上で紹介した外国語学校のそれとほとんど変わらない。東京英語学校は、東京大学が設立された一八七七（明治十）年に東京大学予備門として改組され、第一高等中学校を経て、第一高等学校となつた。

『文部省第二年报』（一八七四年）は東京外国語学校について、その附録で、「英語学校分立以還既ニ本校生徒専門校ニ転進スル等ノ事情略絶タルニ似タリ是ニ於テカ初テ語学校ノ名実共ニ行ハルヘキ機ニ至レリ」と述べている（四一九ページ）。英語学科の分離以後、先に引用した教則第一条にいう「専門諸科ニ入ラント欲スル者」がほとんどいなくなり、ということ、「通弁（ノミ）ヲ志ス者」だけになって、文字どおりの語学校になった。よつて創設時の矛盾が解消した、というのであろう。ただし、ここでの「通弁」は、外国語をもつて身を立てる者の代表として使われており、翻訳官や語学教師をも含むはずである。『第二年报』の附録も、上の引用部分のすぐあとで、「夫本校ノ生

徒タルヤ徒ニ尋常通訳ニ供スルニアラズシテ他日國家ノ需ニ応シ大ニ有用ノ器トナルモノナレハナリ」といつている。このような見地からして、英語学科の一切を分離したことが、はたして妥当な措置であつたかどうか。これはぜひ究明しておくべき課題であらう。

なお、東京外国語学校における英語は、一八七八（明治十）年にいたつて、漢語学科の生徒の兼修科目として復活し、八五年以降は朝鮮語学科第四年にも兼修が義務づけられている。これは東京大学予備門雇の兼嘱教員（のちに御用掛を経て教諭となる）永井尚行が担当した。授業時間・教科書などについては、本書の個別史「中国語」を参照されたい。

3 高等商業学校附属外国語学校

冒頭で述べたとおり、一八九七（明治三十）年、高等商業学校の附属として外国語学校が誕生したとき、仏・独・露・西・清・韓の各語学科とともに英語学科も設置された。生徒は正科生と特別生に分け、前者の修業年限は三年、後者のそれは三年以下と定めている。開校初年度に英語の正科生として在籍していたのは二六名、特別生は四一名であつた。これは、他学科の生徒数が、正科・特別科それぞれ、仏（一三、四四）、独（一九、三七）、露（一五、二九）、西（六、一三）、清（九、二一）、韓（六、三）であつたことを考えると、正科では最大であるとはいへ、特に多いわけではない。

授業は英語のみで、地理・歴史等の科目は一切なし。三年間を通じて授業は一週二四時間であるが、その内容は学年によって多少異なっている。すなわち、第一学年においては、書取・会話・作文・訳解、第二学年になると書取に

代わって文法が加わり、三学年では、文法の代わりに修辭を学ぶ。これを二名の教授（すなわち神田乃武と浅田栄次）と一名の助教授（石川文吾）、一名の外国人教師（ロナールド・ブランリース・マッケロー [Ronald Brunless Mckerrow]）で教えた。ただし、神田は高等商業学校の教授であり、同時に附属外国語学校の主事をも兼務しており、また、助教授の石川文吾も高等商業学校の助教授（商業実践担当）としても前掲「高等商業学校一覽」に名を連ねているので、外国語学校の専任教官は、浅田とマッケローのみであった。

二年目の九八年になると、授業に「体操」一週三時間が加わり、英語の助教授として田中俊二郎が着任している。このほか、規則を改正し、清語・韓語の正科二年生以上の生徒に英語の兼修を認め、正科の三年生が経済学・国際法・教育学のうち一ないし二科目を履修できる措置をとっている。生徒は初年度の正科生二六名のうち、二年生に進級したものは一四名であった。約半数が脱落したわけで、進級がいかに困難であったかがわかるが、じつは進級しなかった、もしくはできなかった一二名のうち、七名の名前が、正科第一年級の名簿の中に見える。今日でいう留年生である。残りの五名は何らかの理由により退学したものであろう。附属学校開学二年目の英語の正科一年生の総数は二七で、いま述べたとおり内七名は留年生であるから、新入生は二〇ということになる。特別科は第二年級が一七名、一年級は三〇名であった。特別科二年級の生徒の中には、前年度の一年級の名簿にない名前もまじっているので、直接二年級に入れる慣行があったものと考えられる。

4 東京外国語学校

(1) 明治・大正期における制度の変遷

一八九九(明治三十二)年四月、外国語学校は高等商業学校から分離・独立し、東京外国語学校と改称された。校名変更と同時に、従来の正科・特別科を、それぞれ本科・別科と改めているが、修業年限(本科三年、別科二年)、および授業時間数(一週につき英語二四時間、体操三時間)はそのまま。校長には外国語学校主事だった神田乃武が任命され、教授陣では、神田・浅田・マッケローが留任。助教授の石川が退任して、新たに教授として村井知至が就任、ほかに講師として半田豊三郎の名が見える(当時「講師」として「学校一覧」に明記されているのは、今でいう非常勤講師である)。

同年七月、二年前に附属外国語学校特別科に入学した生徒が、所定の課程を終え、東京外国語学校別科を修了している。全学で合計三七名、うち英語科の修了生は一二名であった。翌一九〇〇年七月には、本科の第一回卒業式が挙行され、七学科全体で四一名、うち英語科では一〇名に証書が授与されている。このとき卒業生総代として英語で演説を行ったのが片山寛で、片山は、のちに母校に迎えられ、その教壇に立つことになる。

東京外国語学校は、一九四四(昭和十九)年に東京外事専門学校に改編されるまで四五年間存続したが、われわれはこの時期の学校を必要に応じて「新外語」と略記することにする。新外語における最大の制度改革は、一九二七(昭和二)年三月に、修業年限が三年から四年に延長されたことであろう。これは、昭和への改元直後のことであり、新外語の歴史を考えるにあたっては、これを境にして、前半の明治・大正期と、後半の昭和前期に分けるのが好都合

である。英語の授業時間数の変遷を調べてみると、旧外語、新外語の開学時における一週二四時間が最大であつて、以後は、専攻語の時間数が減少、それ以外の科目の授業時間が少しづつ増えて今日にいたつてゐることがわかる。すでに新外語の二年目、一九〇〇（明治三十三）年には、英語を一挙に六時間減らして一八とし、これを副科（独・仏）四時間と、国語・漢文二時間に置き換えるという大幅な変更が行われている。ただし、これもつかの間、一九〇四年には、副科の四時間を廃して、正科を二時間に戻し、この専攻語学週二二時間体制を基本的に一九一八（大正七）年度まで維持した。この間の授業科目の変更はごくわずかで、一九〇九年に「倫理」が一時追加され、これが翌年「修身」と名を改めたこと、また一三年に、二・三年生の専攻語が二〇時間に減り、それに代わつて「地理・歴史」が二・三年生に各二時間ずつ増設されたのが目につく程度である。

明治・大正期における英語の授業で、今日の情況と比較して注目すべきは、新設の学科における英語重視の傾向であろう。すなわち、一九一（明治四十四）年、蒙古、暹羅、馬來、ヒンドスタニー、タミルの五学科が増設されたが、蒙古を除く四学科では、一・三年生への専攻語の配当時間が、六・一四・一四に対して、英語は一六・六・六となつていて、一年次においては、実に専攻語の二・五倍強の時間を英語に割いている。英語重視は、一九一七（大正六）年以降になるとさらに著しさを増し、一年次では専攻語はなくなり、二二時間すべてを英語に当て、二年次になつて初めて専攻語が登場する。二・三年次における専攻語の時間数は、英語と同じ一週一〇である。三年間を通じて、専攻語の時間は英語の半分以下（正科二〇、英語四二）となつたわけである。当該地域におけるイギリスの影響力の大きさを考えても、いささか異常な時間配当だつたといわねばならない。しかし、これは、外語の卒業生は英語専攻でなくても抜群に英語ができる、との世間の評価を確立するのに大いに寄与したはずである。

三年制時代の新外語における最大の組織改革は、一九一九（大正八）年に、「学科」が「部」と改められ、それに

ともなつて各部に文科・貿易科・拓殖科が設けられて、翌年から各科別に生徒を募集し始めたことである。ただし、英語部には拓殖科は設置されていない。文科の生徒は、中等学校の英語教員を目指す「教育兼修生」と、大学進学ないし官吏を志望する「法律兼修生」とに分けられた。

文科と貿易科は、名称の区別とは裏腹に、授業内容上はほとんど差がなかった。すなわち、正科の英語の時間数は、一年次で二三、二年次で二二。三年次になつて初めて、文科一六に対して、貿易科が一四（「商用語」二時間を含む）と、二時間の差が生まれるが、違いはわずかこれだけである。正科の中身は、発音・読書・作文・会話・習字・文法・書取、および当該国情で、かつての地理・歴史が「当該国情」になつたほかはほとんど変わっていない。また、二年次からは第二外国語（仏語・独語）の履修が義務づけられ、一週二時間、読書・会話・作文を学ぶことが規定された。

英語科の入学定員は、創立以来約三〇名と決まっていたようである。各年毎の実数は『資料編』に譲るが、創立二年目の一八九八（明治三十一）年の一七人を除けば、一九一七（大正六）年まで、すべて二六から三五までの範囲に収まっている。ところが、一八年になるとこれが六四に倍増し、その後は、三七、三〇（内訳は、文科一四、貿易科一六。以下この順序で数値を挙げる）、六四（三〇、三四）、二五（一六、九）、四〇（二七、一三）、六六（四四、二二）と、二年おきに従来の定員の約二倍を合格させている。この間の事情を説明するものとしては、村上直次郎校長が一九一七（大正六）年六月二十三日に行われた英語教授法研究会の席で述べた次の談話が残っている。「近來、本校英語科の卒業生は従来の傾向と異つた傾向を有して來た。実業方面を志望するものが多くなつて、教員志望者が少なくなつて來たので、その方面の需要に應ずることが出来兼ねて居る、こんな有様では、何時か將來に於いて、英語科の生徒を二組分だけ入学を許可して、或る時期から、その生徒を、実業方面と教員方面と別々に修業させるのも一

法だと思っている……」〔英語科同窓会々報〕第一一〇号、三五ページ。すなわち、この措置は英語教員の確保が主たる目的だったことがわかる。そして、村上の構想どおり、翌一八年には定員倍増が実現し、翌々年には、その定員が文科と貿易科に分けられて、文科は英語教員養成部門として明確に位置づけられたのである。当初は、毎年六〇名を採る予定であったようであるが〔英語科同窓会々報〕第一七号、五ページ、上記の実績に見るとおり、結局二年ごとの実施に留まり、一九二七年、すなわち学校が四年制に移行した年を最後としてこの慣行は廃止された。翌二八年からは、定員三〇人体制に戻っている。なお四年制への移行とともに、文科は中等学校の教員をめざす者のための文学科と、大学進学者のための法律科に二分され、それぞれ別個に生徒を募集するようになった。以後、文学科、法律科、貿易科のそれぞれに、一〇、五、一五名内外を合格させている。

(2) 教授陣とその授業(1) — 浅田栄次の時代

新外語発足当時の英語科の教授陣は、校長兼務の神田乃武、附属時代からの浅田栄次教授、マツケロー外国教師、それに新たに加わった村井知至教授の四名である。

初代校長神田乃武(一八五七—一九二三)は、外山正一、井上十吉、斎藤秀三郎、津田梅子らとともに、明治の英学界に屹立する巨人であるが、こと外語に関してはさほど大きな足跡を残していないようである。在任わずか一年で校長を辞し、英・独留学の途に就いており、その後外語に戻ることはなかった。附属外国語学校主事の時代を含めても在籍期間は三年のみである。おそらく、神田の最大の功績は、附属外国語学校の発足にあたって、青山学院から浅田栄次を引き抜き、彼を教務主任に据えて、学校の管理・運営全般を一任したことであろう。われわれは、浅田こそ新外語の礎を築いた最大の功労者である、との立場に立つものである。

浅田栄次—その生涯

さて、草創期の英語科の柱石、浅田栄次（一八六五—一九一四）とはいかなる人物であったか。浅田は、山口県都濃郡徳山町（現徳山市）生まれ。工部大学校を経て、一八八七（明治二十）年帝国大学数学科に入学するものの、翌年退学し、神学研究のため米国に留学した。この決意の背景には、工部大学校在学中にキリスト教に関心をいただき、洗礼を受けた事実があった。米国ではシカゴ郊外のノースウエスタン大学神学部から九一年に神学士を授与され、ついでコロンビア大学大学院博言学科へ進学。翌九二年、開学したばかりのシカゴ大学に転学し、同大学初代学長で、著名なヘブライ学者、ハーパー（William Rainey Harper）の指導のもとで博士論文（The Hebrew Text of Zachariah 1-8, Compared with the Different Ancient Versions）を書き上げ、九三年に学位を取得した。これはシカゴ大学が授与した博士号第一号である。卒業と同時に帰国、同年秋から教授として青山学院の教壇に立ち、九七年に附

属外国語学校教授に迎えられている。

外国語学校への転任は、浅田の生涯にとって一大転機であった。この時以来浅田は、聖書研究と故国日本でのキリスト教の布教という米国からの帰国時にいっていた抱負を忘れたかのごとくに、英語教育の道に進進する（おりにふれ宗教的著述を行い、またキリスト教関連の集会に出席し、講演もしてはいるが）。上記の生没年から知られるように、浅田は四十九歳という働き盛りで亡くなった。外国語学校の図書室で読書



浅田栄次

中に脳溢血の発作を起こして人事不省となり、そのまま不帰の客となったのである。遺著として、『英和・和英 諺語辞典』（文会堂、一九一四年）がある。

今日われわれが浅田の業績を事細かに知ることができるのは、ひとえに、彼の妻、みか子が編纂し、一九一六（大正五）年に自費出版した『浅田栄次追懷録』のおかげである。これは、和文七二〇ページ、英文二二七ページからなる大冊で、その大部分を占めるのは知人による追悼・追懷であるが、ほかに、浅田の履歴、浅田自身の著述（論文・随想・書簡・日記・和歌・漢詩等）の一部、編者みか子が綴った「家庭における故人」、それと故人関連の写真が収められている。この『追懷録』は、外語関係者のあいだですらほとんど知られることなく、長らく埋もれたままになっていたが、最近十数年の浅田再評価のうねりのなかで、一九九六（平成八）年東京外語会有志の手によって復刻され、八〇年の歳月を経て多くの人々の目に触れることになった。この本の計り知れない価値を考えると、復刻に尽力した関係者の労は未永く記憶されるべきであろうと思う。本稿の浅田に関する記述も、ほぼすべてが、この『追懷録』に負うものである。

英語教師としての浅田

武士の剛直さと清教徒的厳格さを合わせもった浅田は、生徒にとってきわめて「怖い」教師であったようだ。のち（一九二二年）に母校から教授として迎えられ、戦後東京外国語大学の第二代学長になった岩崎民平は、「先生には何処となく狎れる事を許さぬ侵し難い或るものがあつたと云ふ事であります。……悪い事があると決して御見逃しになる事なく憚るところ無く御叱りでした。私は今でも怠けて充分に下読をしないで先生の時間に出て居た時の不安さをおぼす事が出来ます。それから或冬鐘が鳴った後尚ストーブの辺りで無駄話をしてゐて級全体で先生から御叱り

を蒙った事が御座いました」と書いているが（前掲「追懐録」四六九ページ）、教室での浅田の一面を彷彿とさせる描写である。これは、一人岩崎にとどまらず、多くの生徒の体験を代弁するものであっただろう。が、これはあくまでも浅田の一面であつて、在学中にしろ、卒業後にしろ、教室外で、学校生活上あるいは仕事上の相談や悩みを浅田のもとに持ち込んだものは、異口同音に浅田の「慈母のごとき」優しさと思ひやりを語つてやまない。また、浅田が周囲の人びとを飽きさせることのない座談の名手だったことを語る証言にも、われわれは事欠かない。おそらく岩崎は、在学中も卒業後も、ついに慈母としての浅田に接することなく終わつたのであろう。以後岩崎は、浅田についてはまったく口をつぐんでいる。筆者にはそれが、のちに浅田が外語関係者の間ですら忘れ去られる大きな原因（の少なくとも一つ）になつたのではないかと思われる。

開学したばかりの外国語学校の英語科主任としての浅田にとつて、最大の関心事は、生徒を鍛えることであると同時に、卒業生を社会のしかるべき地位につけることであつた。そのため彼は、生徒の就職先について、学校にしろ企業にしろ、あらゆる機会をとらえて情報収集を怠らなかつた。浅田は文部省の視学官としてしばしば地方に出かけているが、これは彼にとつて現地の学校や卒業生に関する情報を直接収集する絶好の機会であつた。こうしたおりに各地で開かれた彼の歓迎会では、卒業生の名前・現住所から就職先の内情まですべてを諳んじていて、居合わせた人びとを驚かせたという。学校では、浅田の没後の一九一九（大正八）年から、各語部に主任と主幹をおき、前者が教務の、後者が厚生補導・就職の責任を分担して負うことを学則（第九 細則）に定めたが、浅田は、着任以来一七年間、この主任と主幹の任務を一身に引き受けていたのである。浅田の死の前年、すなわち一九一三年に行われた創立十五周年の祝賀会（一二年に行われる予定が、天皇崩御のため一年延期された）のおり、英語科卒業生有志が贈つた浅田への感謝状には、「先生ト予等卒業生トハ和氣藹々トシテ恰モ一大家族タルガ如キ觀アル」との言葉が見える（前掲

「追懷録」(二四ページ)。片山寛もまた、追悼文のなかで、「英語科は卒業生と在學生を包含して一大家族で先生は其族長であつた」と述べている(同書三二二ページ)。「族長」とは、浅田の存在を見事に言い当てた言葉である。

浅田がどのような教科書を使って、どんな授業を行ったかについては、「追懷録」に、下山忠夫(大正二年卒)がかなり詳細に記している。まず、一年次ではベンジャミン・フランクリンの「自叙伝(Autobiography)」を、パラフレーズによつて読み進める授業が週四時間。生徒に読ませたあと、やさしい英語で言い換えを行わせ、不十分な箇所について質すとともに、教師が模範を示す。すべて英語で行うので、解釈と会話の練習が同時にできたという。Philip Gilbert Hamertonの*The Intellectual Life*がパラフレーズの教材になつた年もあつた。

週一時間の「講義」は、最初実用音声学として、発音の訓練を行い、次に、雄弁術に移り、浅田がEdmund BurkeやWarren Hastingsの演説を実際にやつてみせて、生徒を魅了した。雄弁術は、ノースウェスタン大学在学中に特別の関心をもつて訓練を積み、浅田がもつとも得意とした科目であり、別の年にはアメリカの雄弁家Daniel WebsterやPatrick Henryを取り上げて熱弁をふるつた。「講義」の時間には、ほかに手紙の書き方やエチケツトについても話したという。課外の読書としては、サウジーの「ネルソン伝(Life of Nelson)」が課され、学期ごとにその内容について試験があつた。

二年次は訳解が週三時間。教材は明治期にもつともよく使われた英文学アンソロジーであるスウィントンの「*Studies in English Literature*」。生徒の誤りを正し、注意を与えるだけで、難しいところのほかは訳さず先へ進んだ。ほかに、「作文」、「講義」、「スピーキング」が各一時間。作文は、時間内に生徒が書いたものに浅田が自宅得手を入れて翌週批評する方式。「講義」では文法を取り上げている。スピーキングの時間では、演説・暗誦・朗読等を一時間に四・五人宛順番にやらせた。課外の読書として与えられたのは、スコットの小説「アイバンホー(Ivan-

hoe)』だった。

三年では、「翻訳」が週三時間。前年に続いて教科書はスウィントン。ほかに *Daily Mail* 紙の海外版を読んだ。週一時間の「作文」は前年どおり。「スピーキング」は、即席の演説と討論。このほか、英語教員を志すもののために、一・二学期に英語教授法の講義があり、三学期には都下の主な中学校へ授業の参観に出かけた。課外読書はホーソンの『緋文字 (*The Scarlet Letter*)』。

浅田の同僚たち

浅田のよき補佐役は、年齢で四年先輩にあたる村井知至(一八六一—一九四四)であつた。授業では、主に作文と elocution (雄弁術) を担当している。大村喜吉によれば、村井は「要するに good speaker で、実社会に出て実用英語を駆使した外語卒業生に相当の影響を与えた」ということである(岩崎民平『岩崎民平文集』研究社、一九八五年、四八〇ページ)。

村井は、一八七九(明治十二年)、同志社に入学して新島襄の薫陶を受け、キリスト者となつた。八四年同志社を卒業。伝道に従事していたが八八年に渡米。アンドーヴァー神学校在学中に、浅田と面識をえたという。九二年(九三年という説もあり)に帰国。翌々年には、キリスト教青年会の主催する夏期学校の講師として、浅田とともに招かれている。このときの講師陣には、内村鑑三、植村正久らの名も見える。外国語学校独立の年に教授として招聘を受けたのは、こうした浅田との縁によるものだった。理由は明らかでないが、教授就任半年後の一九〇〇(明治三十三年)三月いったん辞職。翌年復帰して以後二〇年間生徒の指導に当たり、一九二〇(大正九)年に退職した。

村井の名を日本全国の英語学徒・英語教師のあいだに広めたのは、のちに来日する外国教師メドレーとの共著 *Eng.*



村井知至

Ish Prose Composition (一九一六年) や、これは *The New Art of English Composition* (泰文堂、一九五〇年) と改題され、二人の著者の死後も長らく多数の読者を獲得した英作文教科書の名著である。

創立時の教授陣の最後は、外国人教師としてイギリスから招聘されたマッケロー(一八七二—一九四〇)である。パブリックスクールの名門ハロー校から、ロンドン大学のキングズコレッジを経て、ケンブリッジ大学のトリニティコレッジを卒業した。同僚石川文吾の思い出には、見るからに若々しい「長身無髯で寡言のマッケロー氏」として登場する(「創立当時の外国語学校」、『外語同窓会誌』第七二号、一九四一年、二ページ)。それもそのはずで、一八九七年十月に来日したときには、まだ二十四歳であった。外語において英語の発音を担当したことは、その講義のノートをもとに片山寛との共著『英語発音学』(一九〇二年)が生まれたことから明らかであるが(本稿の「英語音声学」の項参照)、そのほかの授業担当や講義ぶりについては記録が残っていない。三年の契約が切れると、これを更新することなく帰国。ロンドン大学キングズコレッジの教授を務め、書誌学者・編集者として、とくに T. Nashé の諸作品の本文校訂によって後世に名を残している。

マッケローのあとを襲ったウィリアム・ジョージ・スミス (William George Smith) (一八九三—一九三五) も、*The Oxford Dictionary of English Proverbs* (一九三五年) の編者として広くその名を知られている。ただし、マッケロー



吉岡源一郎

と異なり、スミスは一九〇二（明治三十五）年から一九二二（大正十一）年まで（一九〇八年までは、専任の外国人講師、以後は「非常勤」講師）、二〇年もの長きにわたって外語で教えた。外語時代にすでに諺の研究に従事していたようで、スミスの名が出るときには、しばしば「諺の」が枕詞として使われている。彼の『英語諺辞典』は、その後改訂され今なお入手可能であるが、残念なことに現行の第三版（一九七〇年）からはスミスの名前が削られている。

スミスは、「お手許に英国から届いた『スペクテイター』その他の英文の刊行物を輪読させて、それにより判読力、発音などを試みられ、あとで論議をしたものである」（松村時次「思い出」、前掲『岩崎民平文集』四八一ページ）。ほかに、彼が etymology（語源学）を担当した記録も残っている。

教授陣では、早くも一九〇一（明治三十四）年に第二回の卒業生上條辰蔵が、一九〇二年には第三回卒業生の宮崎議平が、ともに助教授として、また第一回卒業生の片山寛が一九〇五年に教授として迎えられる。このうち片山については次節で取り上げることにして、ここでは、浅田・村井らとほぼ同世代で、経歴もよく似た吉岡源一郎（二八七〇―一九四二）にふれておく。吉岡は、村井と同じく同志社に学び、その後一八九〇年代末に渡米。浅田と同じ道をたどり、ノースウェスタン大学で学士号（一九〇二年）、シカゴ大学で博士号（一九〇七年）を取得している。ただし、専攻は両大学とも言語学であつ

た(学位論文の題名は 'A Semantic Study of the Verbs of Doing and Making in the Indo-European Languages である)。吉岡は一九〇七(明治四十)年帰国し、早稲田大学に迎えられたが、浅田栄次の懇請により一〇年に外語に移っている。一九三三(昭和八)年に停年退職したが、その後も講師として五年間教鞭を執った。

スミスのトレードマークが諺だったとすれば、吉岡のそれは fast reading である。安藤一郎(昭和三年卒)によれば、「家で五六十頁宛読んでき、その内容を各自が次々と受け継ぎながら、英語で話してゆく……この宿題は相当重荷に感じられる上、あたる順番も定つてゐないので……あまりよく準備してゐないときには、fast reading は世にも恐ろしい時間になるのだった」(『英語青年』一九四二年六月号)。こうして安藤たちのクラスは、「ロビンソン・クルーソー」、「アイヴァンホー」、「宝島」などを読んだ。ほかの学年では、クレイク夫人 (Mrs. Craik) の『紳士ハリファックス (John Halifax, Gentleman)』、スコットの『護符 (The Talsman)』も教科書として使つてゐる。

日本の大学の英語の授業で速読が注目されるようになったのは、戦後もせいぜいここ数十年のことで、細を穿つ訳読主義全盛の大正および昭和初期にそれを実践したのは吉岡の慧眼というべきである。大村喜吉によれば、これはノースウェスタン大学での吉岡の師ジョージ・カームのドイツ語教授法の模倣だという(前掲『岩崎民平文論集』、四八〇ページ)。そのほか吉岡は、ラテン語や語源も教えている。学位論文のテーマからして、これらは彼の「おはこ」だったのであろう。

(3) 教授陣とその授業(2)——大正から昭和十年代まで

浅田の死後、英語科は求心力を失い、「集団指導体制」に入つたように思われる。たしかに、浅田の同僚村井は一九二〇(大正九)年まで、また吉岡は一九三三(昭和八)年まで現職の教官として勤め、長老としての役割を果たし

ているが（とりわけ、吉岡が一七年から退職の年まで、教職に就いた卒業生を結集して英語教授法研究会を主宰した功績は大きい。これについては本稿の「英語教育学」の項参照）、学科運営は、次第に外語卒業第一世代の片山寛（第一回卒業生、在職一九〇五—一三八）と大橋栄三（第三回卒業生、同一九二一—四一）、および帝大英吉利文学科卒業の千葉勉（同一九一九—四四）、井手義行（同一九一七—四九）らに移っていった。一九二二（大正十一）年には、岩崎民平（大正二年卒、同一九二二—五五）と商業英語・英米事情担当の大岩元三郎（同一九二二—三八）も着任している。また、一九一九年から三二年まで学校長の地位にあつた長屋順耳の存在も忘れることはできない。長屋は、千葉・井手と同じく帝大英吉利文学科の出身で、長らく広島高師で英語の教授を務めていた。外国語学校長として、学校全体の発展に大きく寄与しただけでなく（旧来の学科が、それぞれ文科・貿易科・拓殖科に三分され、外語が四年制の専門学校となつたのは、長屋の在任中である）、英語の専門家として、外語の英語教育に多大の関心を寄せ、教員志望者の就職の斡旋にも尽力した。しかし、上記の教授の中には、かつての浅田のように学科運営を「牛耳る」存在はなかつた。もし、この時期の外語の英語科・英語部を（全面的にとはいわなくても）代表する人物がいたとすれば、それは、学科運営に直接関与しない外国人教師、オースティン・ウィリアム・メドレー（Austin William Medley [一八七五—一九四〇]。在職一九〇八—三八）ではなかつたかと思われる。メドレーについては、あとで詳しく論じることにして、まずは、この時期の日本人教師についてみておくことにしたい。

片山・大橋・千葉・井手

片山寛（一八七八—一九七八）については、すでに何回か言及した。また、彼の音声学上の業績については、本稿の「英語音声学」に詳しい。片山は一九〇〇（明治三十三年）年に外語を卒業し、東京高師と母校で講師を兼任したあ



片山 寛

などがそれである。しかし、浅田の死後、片山が主として分担した分野は、英語教育であったようで、著作目録を見ると、すべて英語教育の分野のものばかりである（本稿の「英語教育学」の項参照）。

片山は長らく英語部の主幹を務めたほか、図書課長・教務課長を歴任している。英語部同窓会会長の重責も長期間にわたって担った。彼が一九七七（昭和五十二）年十月に、満百歳の誕生日を目前に亡くなったとき、教え子の小川芳男は「英語の名工」と讃え、海江田進は「精確でじみに教える typical な「外語の」教授」とその性格づけをしている。（『英語青年』一九七八年五月号）

外語で片山の二年後輩にあたる大橋栄三（一八七九—一九六六）は、一九二二（大正十）年十二月に教授として迎えられた。主として英文学講読の授業を担当し、くだけた翻訳と洒落な人柄で生徒を魅了した。和文英訳も巧みだったという。大橋が使った教科書としては、プリーストリー『友達座』（John Boynton Priestley. *The Good*

と、一九〇五年に教授として迎えられた。以来三三年の長きにわたって、発音のみならず、文学作品も文法もと、あらゆる分野を幅広く教えた。それは、片山の使用した教科書のリストからも窺える。フランシス・ペーコン『随筆集』、ステイヴンソン『若き人々のために』（*Virginibus Puerisque*）『ゲーリー』『神話』（G. M. Gayley. *Classic Myths in English Literature and in Art*）『ロッドとジュリエット』『アニアンズ』『高等英文法』（C. T. Onions. *An Advanced English Syntax*）

Companions)、トマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』、ハーデー、ステイーヴンソンの諸作品が知られている。外語で二〇年間教鞭を執って、一九四一(昭和十六)年退官した(大橋の業績については、本稿「英米文学」の項で言及する)。

世界的音声学者として名高い千葉勉(一八八三—一九五九)は、東京帝国大学でジョン・ロレンスから英文学を学んだ。片山がマッケローのもとで書生をしていたように、千葉は学生時代に、ロレンス教授と同居していて、流暢な英語を操ったという。一九一九(大正八)年に教授として着任し、主として英文学の講読を担当。チャーサー、シェイクスピア、ミルトンなどを教材として取り上げている。また、英文学史も講じた。二九年に外語に音声学実験室が設置されると、音声学の研究に転じて数々の業績を上げたが(これについては、後段の「英語音声学」参照)、英文学の講読も一九四四年に退職するまで続けている。

井手義行(一八八九—一九七二)は、東京帝国大学文学部英吉利文学科の千葉の数年後輩にあたるが、外語には千葉より一足先、一九一七(大正六)年に着任した。授業では、ギッティング、ゴールズワージー、コンラッド、ハーデーなど、比較的新しい作家を好んで取り上げた。また自ら英文学のアンソロジー*The Treasury of English Literature*を編纂し、教科書として使ってもいる。戦中・戦後の外事専門学校時代に、校長事務取扱を経て、一九四五(昭和二十)年七月から四九年八月まで校長を務め、新制大学発足後は学長事務取扱も経験した。

メドレーの時代

筆者が、英語科・英語部の歴史における明治末期から第二次大戦直前までの時期を「メドレーの時代」と呼びたい誘惑にかられるのは、メドレーに関する多くの記録、とりわけ教え子によって、メドレー生誕百年にあたる一九七五



オースティン・ウィリアム・メドレー

(昭和五十)年に刊行された『メドレー先生を偲ぶ』(私家版)がわれわれの手に残されているからである。これは、「思い出のアルバム」、「メドレー先生の手紙」、「先生の生涯と業績」、教え子による「思い出集」、幼少の頃からメドレーの身近にいて、のちには彼の世話をするようになった森信子の筆になる「メドレー先生のご日常」、「年譜」、「あとがき」、「寄付者名簿」からなり、恩師について学生たちが綴った単なる思い出の寄せ集めとはまったく趣がちがう。これによってわれわれは、メドレーの授業ぶりよりもより、彼の風貌・筆跡から、綴った手紙の内容、家柄と生い立ち、その人間性と日常生活、さらには帰国に際しての盛大な送別会の次第にいたるまで、彼に関わるすべてを事細かに知ることができる。メドレーの死後直ちに企画しながら、さまざまな事情に妨げられて四〇年間もその志を遂げることのできなかつた関係者の執念のたまもので、その編集ぶり、一本の隅々にまで配慮が行き届いて間然するところがない。おそらくこれは、外語英語科の百年史において、『浅田栄次追懷録』とならぶ、もつとも重要な資料といつていいであろう。日本英語教育史にとつてもまた、第一級の史料たること疑いを入れない。

メドレーの授業ぶり

会話の話題は、気候・スポーツ・美術・服装・流行・食事・人の顔かたち等々とあらゆるものにわたり、ある時間にその一つを中心にして、それからそれへと水が流れるように発展した。服装の話のついでにチャールズのチョッキの一番下のボタンがはずれているのはどうしたわけか、スポンの裾が折りあげてあるのはどうしたのかなどの質問が出てくる。返事にまごついていると、それは「a poor foolish thing — fashion」というものだよと助け船が出てくる。しかめつら、あくび、くしゃみをしてみせて、今私は何をしたかどくる。顔の造作の話から、あごのないようにへこんでいるのが、runaway chinで一同面白い表現に大笑いすると、下あごの突き出ているのはハブスバーク王家の人々の特徴だと話は歴史的になったりする。まことに天衣無縫というほかなく、いつの間にか時間が来て残念なほどであった。

(前掲「メドレー先生を偲ぶ」、六七ページ)

「メドレー先生を偲ぶ」に収められた六〇余名の文章は、すべて恩師への感謝の念と懐旧の情に満ちていて、義理で綴られたものは一つとして見出しえないが、右の岩崎民平の文章は、メドレーを直接知らないわれわれにまで、その教室における姿を生き生きと蘇らせてくれて、とりわけ見事である。さすが、メドレーをして「He is one of my favourite boys.」と言わしめたという伝説の持ち主だけのことはある。だが、まったく同じ時期の恩師を語りながら、先に引用した岩崎の浅田栄次追悼文と比較して、こちらは何とのびのびしていることか。われわれは、これが同じ岩崎の文章かと、その違いに奇異の感をすら覚える。

メドレーは、会話の授業に先立って必ず書き取りを行った。これを採点して翌週返却するのである。「書取は決まって六題の短文。なかなか速くて聴取り難く、6「満点」を頂くと嬉しかった。始めは日常の事柄に関する colloquial Englishであったのが、識らぬ間に、詩や箴言や名句等の文学的なものに進んでいる」(岩田一男「昭和七年

卒」前掲書、二二一ページ)。また、自由英作文にメドレーが書き加えたコメントはきわめて懇切で、ときに生徒の作文そのものよりも長かったという。

彼のシェイクスピアの講義もまた、教え子に強い印象を残している。それは訓古の学とは無縁の、ひたすら舞台上でのシェイクスピアの面白さを伝えようとするものだった。再び岩田に登場してもらおうと、「ロメオとジュリエットの講義の時、ロメオが死んでゆくくだりに来て、ふと先生のお声が杜絶えた。どうされたのかと思って顔を上げると、眼をこすっていらっしやる。ややあって、いつもここへくると泣けるのだよ、と言われた」(前掲書、二二一ページ)。

訳読式の受験勉強だけしていて、日頃英米人と接する経験のないまま外語に入ってきた生徒にとって、メドレーの授業はけっして楽ではなかったはずである。が、メドレーは、「できる」生徒だけでなく、会話や聞き取りを苦手とする生徒の訓練に情熱を傾けた。彼は、すべての生徒一人ひとりに全人格をもって向き合うことによつて、「先生は自分に眼をかけて下さっている」との確信をもたせたのである。「答えやすいように誘導して下されたり、楽な質問にさつと切り変えたり、または例のとおり「ネヴァーマーイン」で、がっかりさせない。それぞれの力量に応じ、性格に即して指導された。一人一人に違った質問を難易長短織り交せて、ぐるぐる一時間何回となく当てるなんて神業である」(秋山平吾「昭和二年卒」前掲書、一八一ページ)。

教え子たちはメドレーをして a born teacher (天成の教師) だという。たしかに、上のわずかの引用を読んだだけでも、人はこの評言を素直に受け入れるだろう。しかし奇妙なことに、メドレーは大学教育も受けていないし、来日前に教職の経験があつたわけでもない。彼の履歴にはなぞに包まれた部分があるが(その生い立ちおよび家系、外語への招聘の経緯については、前掲書参照)、おそらく教師としての資質は、父親(英国教会の牧師だったともロンド

ン神学校の弁証学の教授だったともいわれる) から受け継いだのであろう。その上に来日後の外語での経験と努力があつて、第一級の教師となつたのだと筆者は見ている。それを裏書きするのは、メドレーの離日にあつて、同僚の外国人教師ホーンビーが綴つた「謝辞」の次のくだりである。「二年間というもの、彼は教授法について実験を行い、生徒の心理を理解しようと努めた。そして、その忍耐と努力は見事に花開いた。というのは、多年にわたつて、彼の授業には全国各地からの參觀者が引きも切らなかつたからである」(『英語部同窓会々報』第三五号、一九三八年、五ページ。原文は英文、邦訳は引用者)。

メドレーは、イギリス人の日常生活、イギリスの風物・制度・習慣などを巧みに織り込んだ教科書を自ら何冊も執筆した。その第一冊、*My English Diary* (三省堂、一九〇九年) は、「在留外人編著教科書中の白眉」と絶賛されている(『日本の英学一〇〇年』明治編、研究社出版、一九六八年、三七二ページ)。授業に臨んでは、新聞や雑誌から切り抜いた写真や挿し絵の膨大なコレクションから適当なものを選び、ときには巧みに黒板に絵を描いて、できるだけ具体的な説明を心がけたという。具体的ということでいえば、上の岩崎からの引用に見える「しかもつら、あくび、くしゃみをして見せ」るのも同じ手法である。授業中何回も指名して、つねに生徒の関心を教師に惹きつけておく教授法といい、彼の実践は、浅田栄次が日頃から説いていた「英語教師のこころえ」そのままである。したがつて、浅田にいわせれば、メドレーは教師の鑑といふべき存在であつたに違いない。しかし残念ながら、彼がメドレーをどう見ていたかについて、今のところ確たる証拠は見つかつていない。一方、メドレーは、「追懐録」に浅田への追悼文を残している。これは、主任としての英語科の運営にあつた浅田の情熱と謙虚な人柄、「英語に関する完璧な知識」を讀えたごく短いもので、浅田から特に大きな影響を受けたことを窺わせる文言は見あたらない。むしろ注目されるのは、浅田の(アメリカ流?) 合理主義を示唆する言葉が散見される点である。すなわち、短い文章に「効率」

(efficiency) が二回、「効率的」(efficient) が一回、「實際的」(practical) が二回使われている。ここからは、浅田を尊敬しながらも、他方で彼との気質の違いを感じていたメドレーの姿がほの見える。

(4) 昭和期の制度

四年制への移行―カリキュラムと教科書

一九二七(昭和二)年度から、修業年限が一年延長され、外語は四年制の専門学校となった(ここにいたる経緯については、「通史」参照)。これに先立って一九一九(大正八)年に行われた、各語部の文科・貿易科・拓殖科への再編成(ただし、上述のとおり、拓殖科は英語部には設置されなかった)は、校是を再検討し、単なる語学校ではない旨を学校の内外に明らかにする意図をもったものであった。しかし、すでに見たとおり、一・二年で正科たる英語の時間を若干増やし、三年次においては重点を副科に移行するという、全体の組み替えを行ったにすぎなかった。すなわち、一八年までの旧制度下では、一週につき、一年次に二二時間、二・三年次に二〇時間、合計六二時間だった(英語の時間が、新制度の文科では、一年次、二三、二年次、二二、三年次、一六、合計六一時間、貿易科は、三年次のみ異なり一四、合計五九時間となったわけである。つまり、三年間の正科の授業時間総数を文科について見る限り、再編成の前後で、差はわずか一時間にすぎない。

では四年制へ移行したのはどうなったか。次表に見るとおり、ここに初めて実質の変化をとまなう改革が実現したといえる(表のかっこ内は、三年制時代の時間数を示す)。

一 組織と制度の変遷

	一年	二年	三年	四年	合計
英語	二〇(二三)	一七(二三)	一七(二六)	一五	六九(六二)
文科	〇(〇)	二(二)	三(二)	三	八(四)
副科	一〇(九)	一一(九)	一〇(二六)	一二	四三(三四)
英語	二〇(二三)	一七(二三)	一五(二四)	一三	六五(五九)
貿易科	〇(〇)	二(二)	二(二)	二	六(四)
副科	一〇(九)	一一(二〇)	一三(二八)	一五	四九(三七)

文科と貿易科の違いは、英語の時間数にも現れてはいるが、より顕著には副科に見て取ることができよう。すなわち、一年次ですでに副科が全授業時間の三分の一、四年次になると半分にまで増加している(ただし、第二外国語を副科とみなしての話である。同じ外国語として正科の一部に数えると四割になる)。また、副科の内容も多岐にわたり、歴史・言語学・文学史・哲学・社会学は文科のみに開講されているのに対し、商業・商業実務・貿易事情は貿易科の科目で文科にはない、というふうな専攻に応じて特化していて、両科の違いは明らかである。共通科目としては、第二外国語のほか、修身・国語・経済・法律・教育学・体操が設けられている。かくして四年制への移行は、新外語始まって以来の大改革となったといえるであろう。

この大改革の内容をかいま見せてくれるものに、四年制完成時(一九三〇年)の使用教科書一覧がある(『英語部同窓会々報』第二七号、一九三〇年、四〇―四一ページ)。(教科書名ではなく、講義題目と思われるものもまじっている。それらはローマン体で表記した。)

英 第一冊

An Advanced English Syntax (Onions)
Robinson Crusoe (Defoe)
Culture and Life (Hokuseido)
Sketch Book (Irving)
British Short Stories
Children's Bible (Sherman & Kent)

Pronunciation of English (D. Jones)
Twice-Told Tales (Hawthorne)
My Adventures in England (Medley)
The First and the Last (Galsworthy)
English Echo Composition
The Vicar of Wakefield (Goldsmith)

第二冊

Classic Myths (Gayley)
Kenilworth (Scott)
A Tale of Two Cities (Dickens)
The Treasury of English Literature (共冊)
An Outline History of English Literature (Hudson)
Elementary History of England (C. Ramson)

Merchant of Venice
Julius Caesar
Our National Institutions (Buckland)
100 Best Poems
Literary Taste (Bennett)

第三冊

Economic Theory and Practice (Jones)
A Treasury of English Literature (Lounsbury)
History of the English Language

Paradise Lost
^r *Albert : Outline History of English Literature*
^r *Manual of English Composition* (十冊)

First Year Latin

Treasure Island (Stevenson)

[In] the Shadow of the Glen and Riders to the Sea (J. M. Synge)

Element of English Law (Geldart)

Galsworthy's Drama

Advanced Business Correspondence (大塚)

The Golden Treasury (Palgrave)

David Copperfield (Dickens)

History of English Literature (Brooke)

Vanity Fair (Thackeray)

The Merchant of Venice

A Grammar of Spoken English (H. E. Palmer)

How We are Governed (Marrion)

Essays of Elia (Lamb)

English Echo Composition

Romeo and Juliet

100 Best Poems

Othello

Foreign Trade Document (Jones)

第二回

Virginius Puerisque (Stevenson)

Selected Pieces, Prose and Poetry for Elocution

The Principles and Practice of Politics

Rhetoric (Lecture)

The First Book of Jurisprudence

Prologue and Other Tales (Chaucer)

Foreign Trade and Exchange

Autocrat of the Breakfast Table (Holmes)

Politics from The Times

A Treasury of English Literature

English Prosody (Lecture)

Steven's Mercantile Law

Detailed Critical Study of English

Industrial Revolution (Toynbee)

Literature (英文科本體講義)

King Lear

Bacon's Essays

ここには英文学の正統派の作品が目白押しにならないでいて壮観である。当時の外語の授業が、質量ともにいかに充実していたかをよく物語る資料といえよう。ときの校長長屋順耳が、外語が大学には昇格しなかったが、四年制になったことを「名を捨てて実を取った」といつて胸を張ったのは、その限りでは正しかった。しかし、名と実を二つながら獲得することはできなかったのだろうか。

教官の移動

前節で紹介した教官のうち、千葉勉と井手義行は、東京外国語学校に代わって一九四四年に設立される東京外事専門学校時代まで、引き続き教鞭を執ることになるが（ただし千葉の場合は、外国語学校最後の年の四四年三月に退職し、その後一年は非常勤講師であった）、片山寛と大橋栄三は、それぞれ一九三八（昭和十三）年と四一年に退職した。そして、その後任として小川芳男（昭和六年卒）と安藤一郎（昭和三年卒）が、三八年、四一年に助教として着任している。四二年には、梶木隆一（東大英文科、昭和八年卒）が教授として採用された。また、商業英語・英米事情を担当していた大岩元三郎が三九年三月に退職し、そのあとは大谷敏治（教授）が襲った。また、英語部の教官ではないが、校長として外語に改革をもたらし、英語部の卒業生が教職に就くにあたっても多大の力を尽した長屋順耳が三二年に退任し、後任として戸澤正保が着任した。戸澤は長屋と同じく東大英文科の出身で、シェイクスピア翻訳史に名を留めている。戸澤の在任期間は比較的短く、三八年にはその地位を独文科出身の石井忠純に譲った。長屋の在任期間と合わせて、外語が約二〇年間英文科出身で、英語教育に理解のある人物を校長として迎えることができたのは、英語部にとって幸いであつたといわねばならない。

安藤・小川・梶木・大谷の四人は、東京外事専門学校を経て、戦後の東京外国語大学にも一五―二〇年間在籍し、

その発展に寄与している。その点では、安藤と小川の恩師にあたる岩崎民平も同じであるが、ここでは、大正末期からすでに華々しい活躍をしていた岩崎の履歴と業績を簡単に紹介しておく。

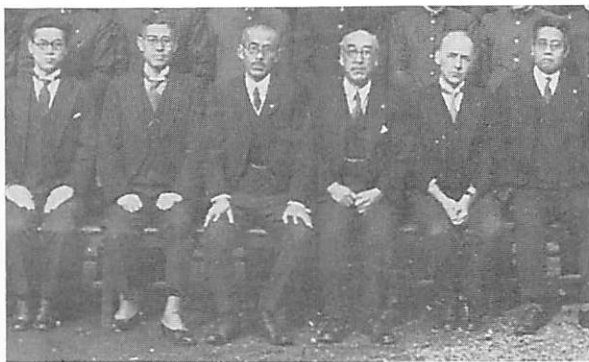
岩崎民平

岩崎民平（一八九二—一九七二）は、一九一三（大正二）年に外語を卒業し、東京府立第四中学校に六年間勤めたのち、東大英文科専科に進んだ（当時、専門学校からは直接本科に入ることはできなかった）。その直前に処女作『英語 発音と綴字』（研究社、一九一九年）を著している。岩崎の才能は、英語・英文学会の大御所市河三喜のつとに認めるところで、東大在学中に市河から任されて、ステイヴンソンの『宝島（*Treasure Island*）』の注釈本（研究社、一九二一年）の注釈部分の整理、および緒言の執筆をしている。続いて同じく市河による『英語発音辞典』（研究社、一九二三年）にも協力した。二二年、東大専科卒業時に編入試験を受け、本科生として卒業した。前述のとおり、同年外語に迎えられている。『宝島』の注釈がきっかけとなって、二〇年代には文学作品の注解を多数委嘱され、それぞれにすぐれた仕事を残した。三〇年代に入ると、岩崎の辞書の時代が始まる。すなわち、三二年に岡倉由三郎編『研究社英和大辞典』の改訂作業に編集主任として加わったのがそれである。この大辞典は三六年に出版された。中学校の教師として世に出た岩崎は、英語教育にも関心・造詣が深く、戦前から中等教育の英語教科書の編纂や、学校文法に関する参考書の執筆にもかかわらずいる。数は多くはないが、翻訳も手がけた。こうしてみると、岩崎の研究・教育活動は英語・英文学の幅広い分野にわたっていることがわかる。しかも、それぞれにおいて第一級の業績を残している（各分野における業績の詳細は、本稿後段の各論「英語教育学」、「英語学」、「英語音声学」、「英語辞書編集」、「英米文学」を参照されたい）。

岩崎について忘れてならないのは、彼のオーガナイザーないしリーダーとしての側面であろう。これはしかし、彼自らが率先して人を組織し、誘導したことを意味するわけではない。岩崎は一流の学者であったばかりでなく、有徳の士であった。彼は温厚な中にも一徹さを秘め、先輩の井手から Grand Baby の「あだ名」を授けられたことからわかるとおり、私的野心というものをもたなかった。それゆえ、その周囲には多くのすぐれた同輩・後輩が自ずと集まってきた。岩崎は彼らの力を結集し、自らの英語・英文学に関する多面的な才能を存分に発揮して、日本の英語辞典史に残る数多くの傑作を生み出したのである。彼はまた、学会を挙げての企画となった「英文法シリーズ」（一九五四―五五年）、「英語学ライブラリー」（一九五七年―）、「現代英語教育講座」（一九六四―六六年）（以上いずれも研究社出版）の監修者の一人として、自らも筆を執る（「ライブラリー」と「講座」のみ）とともに、同僚や弟子をこれに参画させて、彼らが世に出る手助けをしている。岩崎に関しては、彼の名を冠した「岩崎研究会」についてもふれておかなければならない。これは、五〇年代後半に岩崎の自宅で始まった外語卒業生の勉強会から始まったものであるが、今日では、外語関係者以外をも含む二百名近い会員を擁する大組織に発展している。会員の活動は英語学全般に及ぶが、とりわけ辞書編集や辞書学に関心をもつものが多い。一九七二年からは年刊の機関誌 *Lexicon* を発行し、近年は主に辞書学関連の論文を掲載して、世界の辞書学会へ向け日本における研究成果を発表している。われわれは、浅田栄次に次ぐ第二の「族長」を岩崎に見出したといえよう。

ホーンビーの着任とメドレーの帰国

昭和期の外国人教師の移動では、アルバート・シドニー・ホーンビー (Albert Sidney Hornby 一八九八―一九七八) の着任とメドレーの帰国が英語部の歴史にとってとりわけ重要な意味をもつ。一九三七 (昭和十二年) にメドレ



左から大谷、井手、大橋、千葉、ホーンビー、岩崎
(1939年度の卒業写真から)

一が帰国の意志を表明すると、英語部同窓会長を務めていた片山寛が、直ちに「メドレー先生謝恩計画」を立案し、記念品贈呈のための醸金および送別会の開催を呼びかけている。その結果、三八六名から総額一、五五八円の寄付金が集まり、同窓会は明けて三八年三月二十五日に丸の内中央亭本店にて送別会を開催。記念品として懐中時計ほかを恩師に贈った(『外語同窓会誌』第四〇号、一九三八年二月。同第四六号、同八月)。また、四日後の二十九日には、メドレーが関わった一六団体による合同の送別会が一橋講堂で行われ、感謝の式典に続いて、シェイクスピアの「ヘンリー八世」から三場が上演されている。

メドレーは、合同送別会のおり感謝状とともに贈られた金一封(千五百円)をそのまま外語に寄付した。学校ではこれをもとに「メドレー奨学資金」を設置し、三九年から、英語専攻生に限らず全校の生徒を対象に、英語による懸賞論文を募集して、優秀作品に「メドレー賞」を贈ることを決定した。規約によれば、一等一名、賞金金二〇円、二等・三等は各二名で、賞金は、それぞれ一〇円・五円である。実績としては、第一回に一等一名、二等三名の受賞が、第二回(四〇年)に、一等一名の受賞がそれぞれ『英語部同窓会々報』に記録されているが、以後は『同窓会々報』が残っていない(あるいは発行されなかった?)ので不明。半田一郎によれば、四四年に半田自身が受賞したのが、メドレー賞の最後ではなかったかという。資金千五百円で購入した戦時公債(この利子を賞金として使った)が、戦後紙屑同然になり、制度もそのまま消滅し

てしまったのだろうか。

独身だったメドレーは、帰国後、姉のもとに身を寄せて老いを養っていたが、一九四〇年五月に脳溢血のため亡くなった。享年六十四歳。

外語在職中に日本人のために編纂した英英辞典とその改訂版（本稿「英語辞書編集」の項を参照）によって、のに世界的に知られるようになったホーンビーは、一九二四（大正十三）年にイギリスから来日し、最初の一〇年間大分高等商業学校で教えていた。三四年に外語に転任。四一年十二月太平洋戦争勃発によって敵性外国人として強制収容され、翌年早々本国に送還されるまで、七年間外語の教壇に立った。外語在職期間は短かったが、この間に同僚の岩崎民平・小川芳男らと親交を結び、とりわけ先輩の岩崎からは学ぶところが多かったようである。小川は、外語の大部屋の教官室でホーンビーが「文法などの解らない点を岩崎先生に質問していた姿は、最も印象的でした」と語っている（『英語交遊録』三省堂、一九八三年、二九ページ）。戦後は、岩崎がホーンビーの辞書以外の主著といえる *A Guide to Patterns and Usage in English* (Oxford University Press, 一九五四年) の注釈版を刊行し（研究社、一九五六年）、のちに翻訳もして（『英語の型と正用法』研究社、一九六二年）、その提唱する「動詞型」を日本の英語教育界に広めるのに一役買った。また岩崎が編纂した学習英和辞典には、ホーンビーの辞典からの影響が色濃く出ている。

ホーンビーは第二次世界大戦後、ブリッティッシュユカウンシルの顧問となり、その機関誌 *English Language Learning* の編集長（のち編集委員）を務めて、世界の英語教育学会で指導的役割を果たした。一九六八（昭和四十三年）には自分の著書の印税をもとに「ホーンビー教育基金」を設立し、海外から英語教員をイギリスの大学に招いて研修の機会を与えるとともに、英語教育の研究に助成金を提供している。

(5) 英語科・英語部の性格

これまでわれわれは東京外国語学校英語科・英語部の歴史を、浅田時代とそれ以後に分けて見てきた。ここで、この二つの時代のあいだに、学科の性格と授業内容に大きな変化があったかどうかを少しく考察してみたい。ただしこれについては、カリキュラムの詳細な検討と、個々の教官が実際にどのような授業を教室で行っていたかの検証を経ない限り、軽々に結論めいたことを言うわけにいかない。したがって、以下の議論は、まだ憶測の域を出ないことを断っておく。

語学の専門学校

外国語学校の不変の性格といえ、一九二七（昭和二）年に四年制を獲得したとはいえ、大学にはついに昇格しなかったわけであるから、一貫して語学中心の専門学校であったということであろう。一九二五（大正十四）年に卒業した龍口直太郎は、「外国語学校という学校は、昔から文学にあまり縁のないところとされていた。私たちが学んでいた大正十年代の初めでもやはりそうで……もちろん修業年限三年の専門学校だったので語学をマスターするだけでも不十分なありさまだだったに違いない……おそらく学校の方針として文学研究をデイスカレッジしたというのではなからうが、私たち学生の立場から見ると、外語で文学などやるやつは『異端児』として考えられていたように感じられたことはたしかである」と語っているが（『千葉勉の仕事と思い出』私家版、一九六四年、八九ページ）、これは龍口のような文学青年にかぎらず、外語の学生一般が感じていた感想といっているであろう。

先に一九三〇年度に使用された教科書を挙げたが、そこにチョーサー、シェイクスピア、ミルトンから、十九世紀

の大作『デヴィッド・コパーフィールド』、『虚栄の市』まで、英文学の主流を成す作品群が目白押しに並んでいても、これは文学「研究」の対象というよりも、読解力養成のための素材であった。大正期に帝国大学英吉利文学科出身の千葉や井手が加わって、これはあとに述べるように授業内容の変化に少なからぬ影響を与えたはずであるが、彼らといえども英文学研究者である前に、まず英語の、あるいは語学の教師であった。それを裏書きするように、安藤一郎は、一九四〇（昭和十五）年秋、英語部主任の岩崎から、母校に来てほしいとの手紙を受け取ったとき、「自分が語学専攻でないので、果たして外語にふさわしいかどうか」という危懼を率直に申し上げた」と書いている（前掲『岩崎民平文集』四七四ページ。傍点は引用者）。

副科の増加と語学の時間

専攻語だけが教授されていた創設期から、一九一九（大正八）年の、文科・貿易科・拓殖科の設置にいたる過程においては、副科（人文・社会系の科目）が徐々に増加し、それが多少なりとも英語の時間を圧迫する結果を招いた。当然生徒の英語力の低下をも招いたのであろう。授業時間数の変化は先に見たとおりである。また、両者の「せめぎあい」の解決が三年制から四年制への移行によって図られたこともまた、すでに述べた。これによって創立当初の語学の時間を維持しつつ、副科の拡充も同時に達せられた。だが、英語の授業内容においては、この間に大きな質的变化が起きていたように思われる。すなわち教材が、小説・戯曲・詩など、文学作品に傾いていったことである。浅田の時代に小説が使われなかったというわけではない。明治期の外語で、『ロビンソン・クルーソー』、『宝島』、『アイヴアンホー』、『緋文字』等々の小説が使われたことはすでに見た。しかし、浅田は、文学作品は課外の読書として課し、教室では、フランクリンの『自叙伝』、ハマー-tonの『知的生活』など、主にノンフィクションを使用している。同

じ「自叙伝」をパラフレーズの手法で岩崎から学んだ椎木治男（昭和十九年卒）は、そこに浅田以来の伝統を見ているが（前掲「追懐録」復刻版の「あとがき」参照）、これは堅持された伝統というよりも、その名残りにすぎなかったのではあるまいか（この点については、すぐあとの岩崎の授業ぶりに関する記述参照）。

右に挙げた一九三〇（昭和五）年の教科書には、法律・経済・商業英語等、外語ならではの教材が見られる。が、これらは文科の法律研修生や貿易科の生徒のためのものであった。これに対して、教材の大半を占める英文学の諸作品は全科に共通の教材だったのである。推測の域を出ないが、おそらくこれらの文学作品は、当時高等師範や帝国大学の文学部で使用されていたものほとんど異なるところがなかったのではないかと思われる。文学「研究」のためでなく、英語の運用能力の養成にもつばら文学作品を使うのは、今日の考え方からするといささか奇異に感じられるが、それが大正・昭和期の英語教育の主流であつて、外語もそれに倣つたにすぎないのであろう。

変化したのは、教科書ばかりではない。教官の履歴の変化はさらに大きかつた。創立期の神田・浅田・村井はすべて、教職に就く前にかなり長期のアメリカ留学を経験している。ところが、そこにはだれ一人として英語・英文学の専攻者はいない。あとから加わつた吉岡も同様である。メドレーも何人かの著名な文人を出した家系に生まれたとはいえ、大学へは行かず、来日前は実業に従事していた。片山・上條・大橋等、外語の伝統を体した彼らの教え子が、母校に教師として戻つてはきたが、教授陣を構成したのは、外語出身者だけではなかつた。すでに見たとおり、東大でイギリス文学を学んだ千葉・井手が大正期に着任している。こうした変化は、先に述べた教科書の選択にも影響を及ぼしたに違いない。

授業内容や授業方法にも変化があつた。文学作品を読んでも、吉岡の場合は速読だつた。浅田や村井が得意とした elocution（雄弁術）、speech なども後退して、次第に文学作品を中心とする訳読が主流になつていったものと思わ

れる。文学史などの「講義もの」も多少増えたかもしれない。また、大正から昭和にかけての英文学界は、岩崎の仕事に代表されるように注釈の時代だった。「テキストを正確に読む」は、今日に続く英語科の伝統であるが、それはこの時期に確立されたと考えていいであろう。竹林滋（昭和二十三年卒）は、岩崎の講読の授業について、「一人一人学生に読ませて訳させ、発音の違っているところは直し、誤訳を指摘するという何の変哲もないもので……」と書いている（岩崎民平先生の思い出（一）「岩崎研究会 *Lexicon* 第二号、一九九一年、三九七ページ）。師のメドレーの授業のすばらしさを身をもって体験し、それをあれほど鮮やかに描写している岩崎にしては意外な授業ぶりである（もつとも竹林はここで岩崎の批判をしているわけではない）。だが、「メドレー先生を偲ぶ」を仔細に読んでみると、何人かの寄稿者が、メドレーの熱心な授業ぶりと比較して、他の教師への批判を所々で展開していることがわかる。たとえば、大正十三年卒の佐分利健は、「C先生は、教壇から『今日は何の頁からだったかね』と始める。つまり先生としての予習は全然しないわけ。……ちょうど我々の三年間は片山、岩崎両先生御不在の時期で、唯一の救いはメドレー先生の時間だった」と書いているし（二七一ページ）、昭和六年卒の甲斐静馬は、外語で教わった教師について、「その多くは単なる知識の切売り人にすぎず、……恩師の名に値する先生はメドレー先生だけである」と手厳しい。わずかこれだけの証言でメドレー以外の教師を断罪することはできないが、大正から昭和にかけての授業が、講義・講読型の、教師から生徒への一方通行のものに傾いていたことの傍証にはなるであろう。

5 東京外事専門学校

一九四四（昭和十九）年、太平洋戦争のさなかに、東京外国語学校は、文部省の通達により東京外事専門学校と名

を改め、三年制に逆戻りする。この外事専門学校は、翌年の敗戦を経て、四九年に東京外国語大学に引き継がれ、五年三月に廃止された。この間、英語部は、英米科と改称され、ドイツ科、フランス科、ロシア科、イタリヤ科とともに第二部を構成した。第一部には、東洋系の七科およびイスパニヤ科とポルトガル科が属している。英米科の定員は、従来と変わらず三〇で、一挙に倍増・三倍増した支那科の六〇、ロシア科の五五の後塵を拝することになった。後塵といえ、それまで英語科・英語部は、公式文書で学科名を列挙する場合は、常に最初におかれていたが、外事専門学校になってからは、最後尾に回された。四一年十二月の日米開戦以来、英語は敵性語とされ、英語関係者は数々の不幸を経験することになったが、これはそうした状況を象徴するものといえよう。

ところが、日本が戦争に敗れ、連合軍の占領下におかれると、政府も産業界も、何事につけても英語で米軍に伺いを立てなければならなくなり、全国津々浦々に米兵の姿が見かけられるようになった。そしてここに、明治初年にもまさる英語ブームが国民的規模で起こったのだった。英米科の定員は、敗戦後の一九四六（昭和二十一年五月）年になったが（学内の資料による。文部省学校教育局専門教育課の「官公市立専門学校一覧」〔昭和二十一年五月〕では、三〇のまま）、この年、一、八三六人の志願者が殺到し、入学試験の倍率は三〇倍を超えた。戦中から戦後にまたがる外事専門学校の五年間は、まさに激動の時代だった。

教官の移動とカリキュラム

外事専門学校発足時の専任教師は、井手、岩崎、梶木、安藤、小川、大谷の六名。上述のとおり、千葉は退職して、非常勤講師として残っていた。井手は、終戦直前の一九四五年六月から約一か月間、校長事務取扱を任せられ、続いて校長に任命されて、四九年八月までその地位にあった。四〇年に着任した宮村は、外事専門学校に変わった四四年

四月に退職している。戦後は、四六年に佐々木達が教授として、四七年に半田一郎が専任講師として着任している。

専攻語の授業時間数を見ると、第二部に所属する諸科では、一年、二年、三年で、それぞれ、年間、七〇〇、七三三、五六五と表記されている。これらの数値は三五の倍数ゆえ、年間三五週の授業を前提として計算されたものである。一週間に直せば、二〇、二一、一九で、三年間の合計は六〇となり、英語の時間数に関する限り、三年制時代の外国語学校とほとんど変わらない。第二外国語の規定は見あたらない。専攻語以外の科目は、「外事」と大括りされ、年間七〇、一七五、二一〇となっている。内訳は、一年が地理のみ七〇、二年では、歴史七〇と民族及文化一〇五、三年では、歴史・民族及文化・産業各七〇とされた。「外事」専門学校としては何とも貧弱である。

だが、以上の規定はあくまでも建前であって、学則は、外国語学校の末期から、すでに守られなくなっていた。戦局が悪化して、戦場や軍需工場に生徒を動員しなければならなかったからである。その経緯については、本書第一部の「通史」に詳しいのでそちらに譲る。

外事専門学校と名称が変わっても、英語の授業内容そのものは変わっていない。井手編『英文学名作選』（井手）、シェイクスピア（千葉）、ディケンズ（安藤）、ギリシャ神話と聖書（宮村）、ダニエル・ジョーンズ『英語音声学』（*The Pronunciation of English*）（岩崎）、「チップス先生」さようなら（*Good-bye, Mr. Chips!*）（梶木）などはすべて、外国語学校において使われていたいわば定番教科書である。大谷は商業通信文を担当。多少目新しいものとしては、アガサ・クリステイ（安藤）とワーズワース（堀大司。非常勤講師で、大正十三年卒）がある（以上の講義内容は、昭和二十年卒の半田一郎の直話による）。

受難と矜持

戦争末期の外国「外語カ」の授業は英語が週二二時間（うち外国人教師の授業が一〇時間）、教練が九時間という極めて変則的なものだった。……英米との戦争が始まった直後から、電車のなかで英字新聞を読んでいると引つたかれるという話も聞いていた。私も……英語の本を買いに行つた帰り、飯田橋の交番で不審尋問され、英語などやめて朝鮮語を勉強しろ、と説教されたことがあつた。……

九月の授業からシェークスピアの講読が始まり、私はたちまちその魅力にとりつかれた。非国民の私は教練にも出ず、空襲警報が出ると窓を黒いカーテンで密閉して自宅で深夜までシェークスピアを読みふけた。

軍事教練に最初の一時間しか出席しなかつたので私は落第した。陸軍からの命令だといわれた。このころには配属将校を介して軍が国立学校の学事にまで介入していたのである。……

後で聞いた話であるが、戦争中首都……には特に自由主義的だとして軍部ににらまれていた学校が三校あつた。東大……と美術学校（現在の東京芸大の美術学部）と外語であつた。そのせいか、配属将校というのはいは少佐かせいぜいが中佐であつたが、外語に來た将校は筋金入りの大佐であつた。……

それでもシェークスピアへの未練が断ち切れず、焼け残つたポケット版の *Julius Caesar* を「奉公袋」という、身の回りの物を入れる袋に入れて七月半ばに入営した。……入営の夜、ひとりひとりが調書を書かされた。「尊敬する人物」という欄があつた。回りの者は西郷隆盛とか楠木正成とか二宮尊徳とか書いていたが、私はそんなものでは面白くないので、オットー・イエスパーセンと書いた。……

（竹林滋「私の戦争中の英語」岩崎研究会 *L'Esion* 第二六号、一九九六年、一七八、一七九ページ。第四段落のみ、竹林・前掲隨筆「岩崎民平先生の思い出（一）」三九一ページ）

ホーンビーが太平洋戦争勃発と同時に敵性外国人として収容され、やがて本国へ送還されたことはすでに述べた。しかし、上の竹林の思い出にあるとおり、英米との戦争中にも学校には外国人教師がいた。ピーター・ブラムウェ

ル・クラーク (Peter Bramwell Clark) とサミュエル・ジョゼフ・ラング (Samuel Joseph Lang) の二人である。クラークはインド系イギリス人、一方ラングはニュージーランド生まれのイギリス人で、ともに敵性外国人ではあったが、親日的で、しかも配偶者が日本人ということで、学校側が政府と交渉して特別に許可してもらったのだという (小川芳男「私はこうして英語を学んだ」TBS・ブリタニカ、一九七九年、一二六ページ)。

ラングはもともと牧師をしていた温厚な人物で、一九六七年まで二五年にわたって外語で教えた。当時中野に住んでいたが、外出は学校との往復に限られ、しかも必ず当局の尾行がついた。それに加えて、隣組の人たちからも白眼視されるのでかなわない、とつねづね同僚にもらしていた。

授業中に「英国は勝つ」と言つて竹林に感銘を与えたのがクラークで、彼が「そのとき使つた『We'll muddle through.』(なんとかやり抜くさ) という言葉は今でも耳に残っている」(竹林・前掲随筆「私の戦争中の英語」一七八ページ)。また、ホーンビーが中心となつて編纂し、彼が強制送還された直後に(四二年四月) 日本で刊行された画期的学習辞書 *Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (開拓社) の dictator をひびくと次のように定義されている (大村喜吉の指摘による)。“one who dictates; one who has absolute authority to govern (e.g. Stalin, Mussolini, Hitler)。”「指令する人、絶対的支配権を有する者(たとえば、スターリン、ムッソリーニ、ヒットラー)」。戦時下の日本で発行された英語辞典のなかで、「独裁者」の例として、日本の同盟国の元首の名を挙げているのである。ホーンビーはまた、帰国にさいして別れの挨拶に来た人びとに向かつて、「そのうち戦勝国民の一人として日本を訪れますと、最後まで誇らしげに日本を去つた」(小川・前掲書、一二五ページ)。

6 東京外国語大学（1）——一九九四年まで

（1） 制度の変遷

一九四九（昭和二十四）年五月三十一日に東京外国語大学が、東京外事専門学校を包括して設置された。戦後の教育改革によって、専門学校から大学へ昇格したのである。修学年限は四年。単一学部たる外国語学部のもとに一二の学科が設けられ、英語専攻部門は英米学科と命名された。定員は、ロシア・中国両学科とともに最大の六〇である。英米学科の六〇は、翌五〇年に七〇に増員され、以後今日まで変わっていない（九七年から始まった三年次編入については後述）。英語は一貫して全学科中最大の学生数を擁してきたわけである。

また、英語専攻語部門の名称は、学則をたどってみると、発足時の英米学科が一九五一（昭和二十六）年度に第一部（英語専攻）と変更されて、これが六〇年度まで続いている。六一年度から三年間だけは英米科の名称が現れ、六四年度以降は英米語学科が使われてきた。しかし、これら定員や学科名の変更は、必ずしも大学の制度全体の変革を反映したものとはいえず、特に重要であるとは思われない。というのは、新制大学になってからの制度とカリキュラムの大枠は、一九九四年に一大改革が行われて、翌九五年から実施されるまでの四五年間、基本的には変わっていないからである。したがって、以下で新制大学になってからの制度史を考えるにさいしては、四九年度から九四年度までを一つの期間として扱うことにする。

専門学校から大学へ—研究機関としての性格

専門学校から新制大学になって、学校はどう変わったのであろうか。制度上の、したがって学校の性格を考える上で一つの變化は、戦前、外国語学校時代に専攻語科目以外の学科目の総称として使われていた「副科」なる名称が使われなくなり、一般教養科目・専修科目・一般語学科目・体育科目の名称に取って代わられたことであろう。校名には「外国語」が残っているが、もはや外国語の「専門」学校ではなく、学則第一条に謳うとおり、「外国の言語とそれを基底とする文化一般につき、理論と実際にわたり研究教授」する「大学」となった以上、これらの科目を語学の「副えもの」扱ひすることが不適切となったのは当然である。

より根本的な變化は、大学が教育機関であると同時に研究機関でなければならぬとの認識から生まれたように思われる。教官については、教育者であるばかりでなく、研究者であることが要請された。もちろん戦前の外国語学校の教官が研究者でなくてよかった、ということではない。彼らが「学者」として研究成果を著書・論文の形で学外に発表していたことは事実である。が、新制大学になって、それが制度の上に明確に反映されることになった。教官について言えば、講師・助教授・教授それぞれについて改めて資格が規定され、再審査が行われた。その結果、岩崎・佐々木両外事専門学校教授は、外国語大学でも教授のままだったが、大谷・小川・梶木・安藤の四教授は、助教授に降格された。また、いわゆる講座制が敷かれ、英米学科には、英米語学・英米文学・英米事情の三講座が設けられて、専任教官はこのいずれかの講座に所属することになった。

研究者であることを要求されたのは教官ばかりではない。学生もまた、専門的学問の方法論を修得して卒業することが期待された。四年の修学期間は、前期二年、後期二年に分けられ、前期では専攻語学・一般語学・一般教養・体育といった科目を学ぶ。ここでの重点は「学び習う」ことである。これに対して、後期になると、学生は、語学・文

学専修課程ないし国際関係専修課程に所屬し、それぞれの課程について定められた専攻語科目と専修科目とを所定の単位数修めるものとされた(語学・文学専修と国際関係専修の別は、第一回生が三年に進級した一九五一年から学則に現れる)。そして四年間の勉学の集大成として、卒業論文の執筆が課されている。すなわち、後期二年の主眼は「学問」ないし「研究」であるといえよう。

卒業論文の重視は、新制大学の第一回生が一九五三(昭和二十八)年三月に卒業したとき、大学の「学報」五号(一九五三年七月)が「卒業論文題目」の欄を設け、卒論の全執筆者名と題目名を掲載していることから窺える。この五二年度に第一部で卒業論文ゼミナールを担当したのは、岩崎・佐々木・梶木の三名であった。卒論題目は、五三年度および五四年度分が、それぞれ翌年七月発行の「学報」に掲載されている。われわれはそれによって、のちに英米語学科教授となった志村正雄が「ウイリアム・フォークナーについて」(五二年度)、河野一郎が「イマジズム及びその後」(五三年度)、また小浪充が「アメリカの対外経済政策(国際貿易の地域化とアメリカ対外投資に関する一考察)」(五四年度)の題名で卒論を執筆したことを知る事ができる。しかし、論文題目の「学報」への掲載は五四年度分かぎりで打ち切りとなる。翌五五年度から、卒論は必修ではなくなり、専修科目・専攻語科目の八単位をもって、これに振り替えることが認められている(同年の学生便覧に「執筆することが望ましい」との文言が初めて使われた)。卒論に与えられた単位は、大学設立時の四九年の規定では一〇となっていたが、五一年の学則で八に変更され、以後今日にいたるまで、卒論に与えられる単位は八で変わっていない。ただし、卒論を書くためには卒論ゼミナール(四単位)が必修である。

提出された卒論は、すべて附属図書館に収められ、一般に公開する決まりであったが、七〇年代に入ってからであるのか、蔵書の収納スペースがないという理由から、図書館が保管し公開する制度は廃止された。

卒業に必要な単位の変遷（一九四九—一九九四）

卒業に必要な主要科目の単位数を一覧表にすれば次のとおりである。

	前期専攻語学科目		後期専攻語学科目		後期専修科目		
	一年	二年	前期事情	語文	国際関係	語文	国際関係
一九四九	一二	—	—	—	—	—	—
一九五一	一六	—	—	四〇	三二	二〇	三三
一九六五	一四	—	—	四〇	三二	二四	三三
一九七六	一二	—	—	四〇	三二	二四	三三
一九七七	一二	—	四	三六	二八	二〇	二八

右の表を見るにあたって一つ注意すべき点は、前期事情および後期の科目については、単位の計算が前期専攻と異なっていることである。すなわち、前期専攻では時間割の一コマ（すなわち二時間）を二単位と数えるのに対して、それ以外では二倍の四単位とみなす。（四九年と五〇年の学則では、前期専攻語学も一コマを四単位と計算している。上の表では、これを二単位として換算した。また、七七年に後期専攻語学科目の必修単位数が、両コースとも四単位減になっているのは、「英語演習」八単位が四単位になったためである。ただしこれは、それまで一コマ四単位と数えていた「英語演習」を演習本来の二単位に改めた結果であって、実際の授業時間数は減少していない〔山本唯雄氏の指摘による〕。さて、この表に見られるのは、単位数漸減の傾向である。それは専攻語科目に限らず、専修科目についてもいえる。では、専攻語の英語の授業時間数を計算して、戦前の外国語学校のそれと比較してみよう。過渡期の傾向を示す四九年は例外として除き、第一期生が初めて後期生となった五一年についてみると、上記の単位の計算

方法によれば、後期の四〇、三二単位はそれぞれ、時間数では二〇、一六時間となるので、語学文学専修課程に進んだものは、四年間で五〇時間、国際関係専修課程の学生は四六時間の英語を学習したわけである。七七年以降四年までは、これがそれぞれ、四六、四二時間となったことになる。四年制時代の外国語学校文科の六九、貿易科の六一には遠く及ばない。これを授業時間数でなく、単位数で計算すれば、最大だった五一年で、語文コースが七〇、国際関係コースが六二となつて、戦前の文科、貿易科のレベルとほぼ同数になる。ここにも専門学校と大学の違いを見てよいのかもしれない。すなわち、大学にあつては、後期二年の授業の重みを前期二年の授業の、あるいは専門学校の授業の二倍と数えているのである。しかし、これは教官がそのように授業を行い、学生がそれに応えて初めて実効を見ることであつて、さもないれば学力の低下は避けがたい。果たして意図したとおりの結果が得られたのだろうか。

(2) 教授陣とその講義(1)——一九四九年度から一九六〇年代半ばまで

教官の異動

教授陣とその授業内容について考える場合は、制度の考察とは別の時代区分を立てるのが妥当と思われる。すなわち、戦前に大学教育を受け、外事専門学校時代から教壇に立つていた教官、および彼らと同世代の教官があいついで退職し、代わつて戦後に教育を受けた若い世代が着任する一九六〇年代半ばまでをもつて一区切りとするのである。

上述のとおり、新制大学発足時の布陣は、岩崎・佐々木・大谷・梶木・小川・安藤・半田の七名であったが、一九五一(昭和二十六)年に小川が教職課程に移っている(この理由については本稿「英語教育学」の項参照)。五二年の「講座別教官表」では、大谷も専修科目に配置されている(担当は経済英語)。前年の「教官表」が残っていないので断定はできないが、おそらく大谷は小川と同じく五一年に移籍したものと思われる。というのはこの年、英語の

専任教官として、乾亮一（助教）と小野協一（講師）の二人が同時に着任しているからである。翌五二年には海江田進（助教）が着任し、専任教官八名の体制が確立した。すぐあとで見るとおり、小川も大谷も引き続き英語専攻生のための授業も担当している。したがって英語の授業科目は、新任教官を迎えて著しい充実を見たわけである。

一九五五（昭和三十）年三月に岩崎が停年退職し、外語での三三年におよんだ講義に終止符を打った。入れ替わってアメリカ文学の大橋健三郎（助教）が着任している。岩崎はしかし、この年十二月に第二代学長に選出されたため再び外語に戻り、以後二期六年学長職を務めて、六一年十二月に退官した。岩崎のあとを襲って第三代学長に就任したのは、教務補導部長として岩崎を補佐した小川である。小川は六七年に三選を果たすが、翌年大学紛争が起こり、全学封鎖・大衆団交等の困難に直面し、六九年四月、封鎖が解かれて紛争が一応の解決を見た時点で、任期を待たずに退職した。

やや先走りすぎたが、小川が学長の職にあつた六〇年代は、新旧教官の交代期で、戦中戦後に着任した世代があいついで退職し、若い世代にあとを譲っている。まず、六二年に大谷が停年を待たずに退職。大橋が東大文学部に転任となり、替わって西田實（助教）が着任しアメリカ文学を担当した。また同じ年、河野一郎が英米科の専任講師となっており、留学生課程には、齋藤次郎が英語の講師として迎えられている。六六年に佐々木が停年退職。翌六七年には、戦時中から外国人講師を務めてきたラングも退職する。その一方で、同年は英語関連の教官の新任ラッシュを見た。すなわち、英米語学科には小浪充（助教）、ステイーヴン・ナイジェル・ウィリアムズ (Stephen Nigel Williams、外国人講師) が、人文科学研究室に音声学の竹林滋（助教）、社会科学研究室に経済英語の築田長世（助教）、留学生課程の言語学に松田徳一郎（講師）が着任した。築田は大谷同様、専修科目と英米語学科の授業（英米事情）を兼任した。

以上八名の新任教官のうち、東大文学部大学院卒業の西田と、国際基督教大学大学院卒のウィリアムズを除く六名が外語卒である。年長者から数えれば、竹林（昭和二十三年卒）、築田（同二十五年卒）、河野（同二十六年、二十九年卒）、齋藤（同二十六年卒）、小浪（同三十年卒）、松田（同三十二年卒）の順となる。このうち齋藤はフランス語の卒業。竹林と小浪は、外語を卒業後東大の大学院に進んだ。また、松田は東大大学院を中退後、アメリカのインディアナ大学へ留学し、言語学で Ph. D. を取得した。外語の英語関係の教官では、創立期の浅田・吉岡以来の Ph. D. 取得者である。

講義内容（一）——一九五二年度の講義題目

新制大学になって授業内容がどう変わったのを見るために、まず第一回生が四年生に進級した一九五二（昭和二十七年）年の『講義題目』から後期専攻語学科目とその担当教官を見てみることにしたい（残念ながら『講義題目』は、長らく前期専攻語の授業内容については、まったく掲載していない）。以下では、教科書名が『講義題目』に明記されている場合には氏名に続けて示すことにする。

英文法研究（佐々木）	O. Jespersen. <i>Essentials of English Grammar.</i>
英語学の諸問題（乾）	
英語文体論演習（佐々木）	E. M. Forster. <i>A Passage to India.</i>
二十世紀英文学（安藤）	
英文学講読（岩崎）	Shakespeare. <i>Richard III.</i>
英文学演習（梶木）	J. Galsworthy. <i>Forsyte Saga.</i>

米文学講読(龍口)
英米事情演習(岩崎)

英作文演習(グリッグス)

卒業論文演習(岩崎・佐々木・梶木)

英語教育法(小川)

上の講義題目一覧を見てすぐ目に留まるは、佐々木の「文体論」、安藤の「二十世紀英文学」、龍口直太郎(非常勤講師)の「米文学」といった講義であろう。文体論を講ずることは、専門学校の時代にはまず考えられなかったと思われる。他方、アメリカ文学や二十世紀のイギリス小説は、たしかに戦前にも教科書として使用されてはいる。ただし、これらもかつては、独立した講義題目として取り立てて掲げられることはなかったはずである。それに、龍口と安藤がいま論じようとしているのは、第二次大戦直前の新しい作品である。われわれはここに、専門学校とははつきり異なる新制「大学」としての外語を見ることができるといえる。

これに対して、岩崎がシェイクスピアと英米事情を二つながら担当しているのは、すでに紹介したとおり、岩崎が「語学・音声学のみならず文学にも長じていたオールラウンドな学者だったことを示す事実であるが、同時に外国語学校時代の教師の面影を伝えるものでもあるだろう。というのは、千葉が音声学と英文学を同時に教えたのは例外であったにしても、戦前の外語では、チョーサー、ミルトン、シェイクスピアは、担当者を固定せず、文学系の教官が輪番制で教えたというし、これが語学系の教官になると、担当科目の幅はさらに広がって、文法、英語教育はもちろん、文学作品もごくふつうに取り上げた。たとえば、小川は随筆・小説に加えて、シェイクスピアやテニス(長詩 *Enoch Arden*)も教えている。(シェイクスピアは現在にいたるまで一貫して講読の授業があるが、ミルトンはほと

んど取り上げられなくなった。戦前との比較で目につく変化である。チョーサーは、中英語「かつての」「中世英語」の代表的作品として、英語史との関連で、戦後も断続的に読まれている。

教官が、自分の専門にとらわれずさまざまなジャンルの教科書を使用するこの「伝統」は、新制大学になってからも主として前期学生の授業のなかに連綿と引き継がれたものと思われるが、上述のとおり一・二年生については講義題目が残っていないので立証することは難しい。これが後期の専門科目に窺えるのは、いま述べた岩崎のほか、小川と海江田の場合であろう（二人は外語の同級生である）。岩崎は五三年にも英米事情と英文学講読（教科書はシェイクスピア）を、五四年には、英文学におけるエッセイと英語音声学を担当している。小川は英語教育法を講じるかわら、第一部ではパブリックスピーキングを復活させた。また、海江田は、主として一・二年生の授業および一般語学科目を担当したようであるが、後期学生には英作文およびパブリックスピーキングのほか、シェイクスピアの *Rich and Poor* も教えている（五九年度）。

しかし、こうした古き伝統を残しながらも、後期の専門科目についてみる限り、個々の教官が自分の専門分野を明確にし、それとの関連で講義を開く体制が次第に確立していった。すなわち、佐々木は、英文法の原理論・文体論・英詩の文法、乾は、記述英文法と英語史、安藤は、英詩・英文学史、のちにシェイクスピア、梶木は英国小説をその専門領域とした。五二年度の一覧には名前が出ていないが、小野協一は、エリザベス朝演劇を中心とした講読を行っている。アメリカ文学は、大学発足以来五四年まで専任教官不在の状態が続き、非常勤講師の龍口に任されていたが、五五年に大橋が専任の助教授として着任し、ようやく充実を見ることになった。半田一郎は、六〇年に「アメリカ英語概説」の担当者として後期専門科目の一覧に登場し、以後英語学を扱っている。

こうしてみると、もともと問題が大きかった分野は英米事情ということになろう。英米事情講座は、大学設立当初

から英米語学、英米文学と並ぶ三講座の一つであったはずであるが、本来が語学の岩崎と専修科目所属の大谷、この二人のいわば「出講」でまかなわれていたからである。

講義内容(2)——一九六七年度の講義題目

ここで、先に挙げた講義題目から一五年後、今論じている時期のほぼ最後にあたる六七年度の講義題目を列挙して、両者を比較してみよう。

英米語学

英語演習(石井) T・S・エリオットの詩論、演劇論講読

英語演習(スタンレー・H・グリッグス)

英語史(乾) 英語の特性(O. Jespersen. *Growth and Structure of the English Language*)

英語学概論(半田) 現代英語概論(R. Quirk. *The Use of English*)

英語学特殊研究(松田) 英文法研究(J. Sledd. *A Short Introduction to English Grammar*)

英文学

英文学(安藤) 現代のイギリス文学

英文学概論(安藤) シェイクスピアの「オセロ」

英文学特殊研究(小野) ベン・ジョンソン講読(Ben Jonson. *Volpone*)

英文学特殊研究(河野) 比較日英文学研究(H. G. Henderson. *An Introduction to Haiku*)

英文学特殊研究(野島) T・S・エリオットの批評(T. S. Eliot. *The Modern Mind and Other Essays in Criticism*)

英文学特殊研究(梶木) Melville 講読

米文学概論(志村) アメリカ小説史(N. H. Pearson. *American Literature*)

米文学概論 (ピーター・マン)

英米事情

英米史 (松浦) イングランド・ピューリタニズムの歴史的研究

英米事情概説 (小浪) アメリカ社会経済論 (E. A. J. Johnson and Herman E. Krooss. *The Origins and Development of the American Economy*)

英米事情概説 (築田) アメリカの対外政策 (F. R. Dulles. *America's Rise to World Power*. W. A. Williams. *The Tragedy of American Diplomacy*)

卒業論文演習 (安藤、梶木、乾、小野、半田、河野、小浪)

英語教育法 (海江田)

ここに示した担当教官のうち、石井正之助、スタンレー・H・グリッグス (Stanley H. Griggs)、志村正雄、野島秀勝、松浦高嶺は、非常勤講師。志村は四年後の七一年に専任教官 (助教授) として迎えられることになる。築田は社会科学研究室からの、松田は留学生課程からの「出講」である。ピーター・マン (Peter Man) は、六三年に着任した外国人教師。

一五年前と比べてみると、開講科目の充実は一目瞭然である。単に数だけとってみても、九から一六へとほぼ倍増した。これは非常勤講師・兼任教官に負うところが大きい。卒業論文演習も、三から七へと二倍以上の増加である。かつては特定の教官に限っていた卒論の指導を、のちには専任教官すべてが担当する、と方針が改められたことがわかる。ちなみに、この間の一学年の学生定員は六〇から七〇へと一〇名増加したにすぎない。講義内容も多岐にわたり、かなり専門化していることがわかる。難解なT・S・エリオットの批評を二人の教官が取り上げている。英米事情についても、「事情」という外事専門学校的な名称よりも、大学が標榜してきた「地域研究」にふさわしいタイト

ルが並ぶことになった。ただし、アメリカ関連の専任教官が二人いて、イギリス関連が非常勤講師に任されている不均衡の解消は、松村赴（助教授）の着任（七三年四月）まで待たなければならぬ。

(3) 教授陣とその講義(2) — 一九六〇年代半ばから一九九四年度まで

教官の移動

六〇年代前半から始まった新旧教官の交代は、後半にも引き続き行われ、小川が学長を辞任した一九六九（昭和四十四）年に、乾が停年を待たずに辞職した。翌七〇年に安藤、七一年に海江田、一年おいて七三年に梶木と、停年退職が相次ぎ、戦前の外国語学校で教鞭を執った教官、または東京外国語学校を卒業して母校に戻った教官はすべて姿を消した。これらの教官と入れ替わりに、英語学の高橋潔（七〇年、助手）、アメリカ文学の志村正雄（七一年、助教授）、イギリス史の松村赴（七三年、助教授）、英語学の東信行（七三年、助教授）が着任している。アメリカ文学講座は、西田と志村の二人がようやく揃ったが、西田は七九年に停年退職し、同年佐藤良明（助手）がその席を埋めた。外国人教師では、同じ七九年の年度半ばに客員教授のトマス・エミール・ベック（Thomas Emil Beck）が着任し、以後ウイリアムズとともに、主として学生の英語の運用能力の向上に努めて今日にいたっている。

八〇年代以降に辞職ないし退職した教官は、八四年の小野、八七年の半田、九〇年の佐藤、九一年の築田・河野・高橋（潔）、九二年の志村・松村、九五年の小浪、九八年の東である。このうち、小野・半田・築田・志村・松村・小浪・東は停年退職。河野・高橋・佐藤は他大学へ転出のための辞職（河野の場合には停年までわずか一年を残しての）であった。これらの教官に替わって着任したのは、イギリス文学のジャン・ペーカー・ゴードン（Jan Baker Gordon）（八四年、教授）、英語学の斎藤弘子（八八年、助手）、イギリス文学の鈴木聡（九一年、助教授）、アメリ

カ文学の荒このみ（九二年、教授）、加藤雄二（九二年、助手）、アメリカ事情のベンジャミン・グレッグ（Benjamin Gregg）（助教授、九二年）、イギリス事情の佐藤和哉（九三年、助手）、および学部改革後の金井光太郎（九七年、教授）と浦田和幸（九八年、助教授）である（ゴードンとグレッグは、いわゆる客員教員ではなく、外国人教員任用法に基づいて採用された国家公務員待遇の教官）。以上の新任教官うち、グレッグは在職二年で辞職し（九四年）、替わって佐々木孝弘（九五年、助教授）が着任した。

講義内容（1）——一九八二年度の講義題目

では前節にならって、今度はさらに一五年後の一九八二（昭和五十七）年度の講義題目を見てみよう。

英米語学

英語演習（河野） 応用英作文演習

英語演習（志村） ピンチオンを読む（T. Pynchon. *The Crying of Lot 49*）

英語演習（東） 意味論入門

英語演習（ベック） U. S. Society as Reflected in Magazine Articles

英語演習（ウィリアムズ） England : Its Language and Culture

英語演習（秦） 意味とは何か（G. Leech. *Semantics*）

英語演習（木村） 中期英語演習（G. Chaucer. *Troilus and Criseyde*）

英語演習（伊形） シェイクスピア講読（*King Lear*）

英語史（高橋〔潔〕） 英語史原典講読

英語学概論（半田） Bilingualism の立場から

英語学特殊研究 (松田) 生成文法の歴史 (F. J. Newmeyer. *Linguistic Theory in America*)
 英文学

英文学史 (小野) イギリス文学史 (G. C. Thornley. *An Outline of English Literature*)

英文学概論 (フイーガン) English Poetry

英文学特殊研究 (河野) 現代イギリス短篇小説研究

英文学特殊研究 (富山) 大衆文学論

米文学

米文学史 (志村) 十九世紀から現代まで

米文学概論 (武藤) アメリカ文学概論

米文学特殊研究 (杉浦) Norman Mailerとアメリカ文学

米文学特殊研究 (ガーディナー) Introduction to Canadian Literature

英米事情

英米史 (松村) イギリス史

英米事情概説 (小浪) 現代アメリカ政治・経済論

英米事情概説 (築田) アメリカの宗教と社会——ピューリタニズムから現代まで

英米事情特殊研究 (松村) 十八世紀イギリス庶民生活史

卒業論文演習 (半田、東、高橋「潔」、小野、河野、志村、小浪、築田、松村)

英語教育学

講義 (若林)

演習 (若林)

卒業論文演習 (若林)

英語科教育法（若林、森住）

以上の授業の担当教官のうち非常勤講師は、秦宏一、木村建夫、伊形洋、ジェームズ・エドワード・フィーガン、富山大佳夫、武藤脩二、杉浦銀策、チャールズ・ウエイン・ガーディナー、森住衛の各教官。松田は一般語学科目からの兼任。築田は七一年に、専修科目から英米語学科に移籍している。

開講科目数は六七年度からさらに増えて二三を数える。これは英米語学のもとに分類されている英語演習の増加（二から八へ）によるところが大きい。外国人講師による授業数も一から四に増えている。これも大きな改善といえる。しかも、その一つはカナダ文学であり、メニューの拡大にも貢献している。また、イギリス史の専門家松村が専任スタッフに加わって、事情講座においてもようやく英米のバランスがとれた。卒業論文演習は助手の佐藤（良明）を除く九名全員が開講している。しかしこれらは、主として量的変化であって、開講科目の内容については特に大きな変化は見られない。いずれにしても、英米語学科の学生は、きわめて充実したカリキュラムのもとに勉強ができるようになったといえよう。

（4） 一般語学科目

第二外国語としての英語は、すでに述べたとおり、旧外語の時代、まず一八七八（明治十）年に漢語学科の、また八五年以降は朝鮮語学科の生徒の「兼修科目」として設けられ、新外語においても、附属外国語学校設立の二年目（一八九八年）に、やはり清語・韓語の生徒に兼修を認めた。必修科目としての英語は、分離独立を果した翌々年

の一九〇一（明治三十四）年に、「副科語学」の名のもとに設置されている。戦後新制大学になってからは、初年度の一九四九（昭和二十四）年のみ「第二外国語」が使われているが、翌五〇年からは、「一般語学」と呼ばれるようになり、一九八六（昭和六十一）年からは「外国語科目」、さらに九五年度の改革以後は「副専攻語科目」の名称が用いられている。この授業は、新外語以来、専攻語の英語の教官が兼務し、専任教官は、新制大学になってからも長いあいだ存在しなかった。が、一九七四（昭和四十九）年末に第一教授会（外国語学部教授会）と第二教授会（特設日本語学教授会）が統合されたとき、後者に所屬していた齋藤次郎が一般語学へ移籍している。齋藤と松田は、一般語学の英語のみならず、英米語学科以外の学生が英語の教員免許を取得するために履修しなければならない、いわゆる教職英語のカリキュラムも、同時に任されることになった。

当時の一般語学の授業体制は、専攻語のそれのように整備されていなかった。一年生の授業は語科ごとのクラス分けが行われ、受講者の人数は固定されていたが、二年生以上のクラスは選択制を採っており、一般教育の授業同様、希望者をだれでも受け入れていたため、一五〇名を超える巨大なクラスが存在した。一年生のクラスも、各語科の相次ぐ定員増で肥大化していた。スペイン語（六二年まではイスパニヤ語）は五七年に、フランス語は六五年に、それぞれ、四〇名から六〇名への定員増を実現し、独・露・中も六六年から、やはり四〇名の定員が六〇名となった（スペイン語はその後、七九年にさらに一〇名の定員増を見て今日の七〇名になっている）。現実にはこれに再受講生（落第生）が加わるのである。この人数では本来の語学の授業が成立しないことは明白であったが、これをそれぞれ二分割して小クラスを実現することは、非常勤講師予算の制約があり困難だった。これら一般語学の授業に加えて、上に述べた教職英語の授業があり、一般語学部門が担った開講コマの総数は八〇に上った。したがって、授業の大半

を非常勤講師に頼っており、英米語学科からの応援を計算に入れても、専任教官による授業充足率は、二割強にすぎない。こうした状況下で、齋藤と松田に課せられた任務は、専任教官の増員とクラスサイズの平準化を図ることであった。

専任教官の増は、語学科における学生増にもなつて一般教育部門に教官定員が配置されたおりに、これを一般英語で採用することを要求して徐々に実現していった。すなわち、八〇年に高橋作太郎（助教）、八二年に朝尾幸次郎（講師）、八六年にステファニー・フランシス・ライアン（Stephanie Frances Ryan、講師）、八八年に根岸雅史（助手）と、比較的短期間に四名の増員を見た。このうち、ライアンは外国人教員任用法の成立によつて、外国籍のものが国家公務員として大学教員になることが可能になったのを受けて採用された。一般語学においてもネイティブスピーカーの専任教師の必要が高まっていたためである。しかし、残念なことにライアンはわずか一年務めただけで、八七年にイギリスへ帰国。その後任として、翌年野村恵造（講師）が採用された。一般語学科目のネイティブスピーカーの専任教師は、九一年に停年退職した齋藤の後任としてリチャード・スミス（Richard Smith、講師）が着任するまで不在であった。

一般英語の定員は、八八年に六名に達してからは増えることなく、九五年の学部改革を迎えることになった。以下、前に述べた以外の教官の移動を記しておけば、八五年に松田が日本語学科の言語学講座に移籍することになり、この後任として八七年に馬場彰（助教）が採用された。馬場はその後、九二年に英米語学科へ移籍し、宗宮喜代子（助教）がそのあとに就任した。同じ九二年には、朝尾が他大学へ転出し、替わつて九三年に宮井捷二（教授）が着任した。翌九四年には根岸が教育学に移籍し（同年退職した若林俊輔の後任）、その後任として九五年に吉富朝子（講師）が採用されている。九五年は学部改革元年にあたり、吉富は他の一般英語担当教官五名（宮井、高橋「作」、宗

宮、野村、スミス）とともに、言語・情報講座の所属となった。

一般語学科目の長年の懸案であったクラスサイズの平準化については、八〇年代後半から積極的に取り組み、一年生の場合、同一専攻語の学生だけでクラスを編成する原則を崩すことで、一クラスの定員を五〇名の規模にまで縮小した。二年生以上の選択クラスにあつては、先着順の登録、抽選による登録などの試みが失敗に終わったあと、朝尾が開発したコンピュータープログラムを採用することによってかなりの前進を見た。このプログラムは今日もお使われている。

八〇年以降カリキュラムそのものに加えられた主たる改善を挙げれば、学生からの希望が多いネイティブスピーカーによる会話クラスを増設したこと、帰国子女など特に英語力に秀でた学生が目立つようになった事態を考慮して、上級クラスを設置したこと（ここにもネイティブスピーカーを配した）、留学生で英語をほとんど学習しないまま入学したもののために特別クラスを設けたこと（これは専任教官が担当している）、などである。

学部改革後、外国語科目は副専攻語と改称された。主専攻語に準ずる運用能力の修得を目指す、との意味が込められた命名であったはずであるが、必修単位数は旧来と同じ八で、変わっていない。内容については、一年生に聴解と読解のクラスの履習を義務づけるといふ改革を実施した。聴解については、事前に統一試験を行いクラス分けを行っている。また、九七年からは上級クラスをさらに増やした。

7 東京外国語大学（2）——一九九五年以後

再三述べてきたとおり、一九九五（平成七）年にいたって、大学は創立以来最大の学部改革を断行した。全貌の説

明は通史に譲るが、組織面についていえば、教官と学生の所属組織を分離し、教官は、英米語学科・一般語学科目の別なく、その専門分野にしたがって、「言語・情報」、「総合文化」、「地域・国際」の三つの「講座」のいずれかに属することになった。一方、旧来の語学科をいくつかまとめて「課程」とし、これを学生の所属組織とした。旧英米語学科と旧ドイツ語学科は、欧米第一課程として改編され、そこに英語専攻生とドイツ語専攻生が所属している。ただし、入学定員は、専攻語別に定めており、英語七〇、ドイツ語六〇に変更はない。したがって、学生に関していえば、「語学科」は実質的には改革後も存続しているといえる。

従来からの「語学・文学専修」と「国際関係専修」の二コースは、教官の組織である講座に対応した「言語・情報」、「総合文化」、「地域・国際」の三コースに改められた。コースの選択は三年次に進級したさいに行うが、四年間を前期（教養）と後期（専門）に截然と分離する考え方をやめ、専門科目を前倒しするとともに、教養的な科目を三・四年生になっても取れるよう、規制を大幅に緩和した。さらに、学生の自主的な研究は、卒業単位の削減（一四〇から一二六へと一四単位減）と二単位分の「自由科目」の設定によっても保証されている。卒業単位の削減を可能にしたのは、旧来の「一般教育科目」三六単位が、「総合科目」一二単位に置き換えられたことである。さらに大きな変革で、今後の卒業生のタイプ、ひいては大学全体の性格そのものの決定的に変えかねないと思われるのは、従来の後期専攻語科目と専修科目の区別をなくし、専修専門科目に一本化したことであろう。その結果、従来は国際関係専修課程の学生でも、三・四年次において二八単位は必修だった専攻語の授業が、改革後は、新たに設けられた「表現演習科目」二コマ（四単位）のみとなった。すなわち専攻語に関しては、三年・四年で各一コマ取れば卒業単位を充足できるのである。これは、言語教育の大幅な後退とみなされようが、逆から見れば、かつての専修科目に相当するものを一切取らず、語学ないし文学の授業で専修専門科目の単位をすべて充当することができるようになったこと

を意味し、つまりは、学生の自主性に委ねられた部分が大幅に増したということである。今回の改革によって、外語は、新制大学になったときよりも、また一段と大きな実験に乗り出したといえよう。

英語専攻においては、一九九七年にもう一つ改革が行われた。欧米第一課程として合計二〇名の三年次編入生を入学させる制度の導入である。英・独の合格者の比率は二対一を目安としているが、実績としては、九七年に英語で一五名、ドイツ語で五名、翌九八年には英語一六名、ドイツ語四名を受け入れた。出願資格は、「短大卒業見込み以上」ということだけであり、試験に合格すれば、それまでの大学・短大における専攻分野・履修単位にかかわらず三年次に編入させ、前期二年の主専攻科目の履修を完全に免除するという思い切った措置が取られている。こうした優遇措置が注目され、とりわけ二年目の九八年には、現役の大学生のみならず、社会人からも多数の出願があった。学生の多様化に向けて一歩が踏み出されたわけである。

8 学校運営への貢献

英語教官には、高等商業学校附属外国語学校時代に学校主事を務め、東京外国語学校となってから初代校長に就任した神田乃武を初めとして、学校・大学の要職に就き、その管理運営に貢献した者もかなりの数に上る。彼らについての記録をここに留めておきたい。神田が主事を命ぜられたのは、一八九七（明治三十）年八月のことで、九九年四月に外国語学校が独立すると校長心得、ついで同じ四月に校長になっている。時代は下って、一九一九（大正八）年、学科の名称が部に改められ、各部に文科・貿易科・拓殖科が設けられるという改革が行われたが、このとき生徒・教務・庶務・図書・会計の五課長が新たに設けられた。英語教官では、吉岡源一郎が図書課長になって、一九三三（昭

和八)年まで、一四年にわたってその地位にあった。図書課長は、三四年から三七年までの三年間片山寛が務め、この責めを果たした片山は、引き続き翌三八年まで一年間、教務課長に任ぜられている。その後いくつかの要職を経験したのは井手義行で、まず一九四〇(昭和十五)年度に図書課長、翌四一年度に教務課長となった。さらに井手は、東京外事専門学校時代の四五年六月、校長事務取扱、同年七月から四九年八月まで校長を歴任、四九年五月からは、外事専門学校長と、新設の東京外国語大学長事務取扱を八月まで兼務した。

外事専門学校の庶務課長を一九四四(昭和十九)年五月から翌年十一月まで務めた岩崎民平は、四九年七月から翌五〇年十一月まで東京外国語大学の補導部長を任され、さらに停年退職後の五五年十二月に、初代学長澤田節蔵の後を襲い、第二代学長に就任している。教授会メンバーの選挙によって選出された最初の学長である。岩崎は澤田の手がけた改革を軌道に乗せるべく、二期六年間全力を傾注した。岩崎の学長在任中、教務補導部長として腕を振るったのが小川芳男で(教務補導部長はのちに、学生部長と名称が変わった)、小川は、岩崎が一九六一(昭和三十六)年に任期満了で学長を退任するさい、第三代の学長に選出され、六五年に再選、六七年に三選を果たし、さまざまな懸案問題を解決した。しかし、六六年秋に学寮問題をきっかけとして学園紛争が起こり、これが全国規模の大学紛争の嵐のなかで激化し、事態は全学封鎖に至ってしまう。小川は六九年三月、学内に機動隊を導入して封鎖を解除。翌四月、任期を待たずに辞職した。小川の二期目と三期目にそれぞれ一月ほど学長代行を務めたのは、同僚の安藤一郎であった。学園紛争が始まったのは折悪しく安藤が二回目の代行を務めていたときで、これは安藤が健康を損なう直接の原因になったようである。

安藤はそれ以前に附属図書館長を務めた。六三(昭和三十八)年から六五年までの二年間である。この職務は、その後梶木隆一が七二年から七四年まで、小野協一が八二年から八四年まで、竹林滋が八四年から八六年まで務めた。

竹林は、図書館長としての任期中の八五年秋に次期学長候補者に選出されたが、健康上の理由でこれを辞退している。その後、九一（平成四）年に、英語教育学の若林俊輔が学生部長に選ばれ、原卓也学長を補佐して精力的に学内改革を推進、九三年にこれを一般語学科目の高橋作太郎に引き継いだ。九五年まで学生部長を務めた高橋は、九八年に附属図書館長に選出され、現在その任務を遂行中である。

これまで何名かの英語教官を務めた要職でもう一つ忘れてならないのは、一九七〇（昭和四十五）年府中市に設立された附属日本語学校の校長職である。もっとも古くは、半田一郎が七六年から八〇年まで四年間にわたってこの重責を果たし、その後河野一郎が八六年から八八年まで、河野のあとを受けて齋藤次郎が九〇年まで、その職務を全うした。学校は一九九二年にいたって改組され、留学生日本語教育センターとなるが、その第二代センター長を松田徳一郎が九四年から九六年まで務めている。

以上がいわゆる管理職に就いた英語関連の教官であるが、ここでぜひ書き添えておきたいのは、英語教官ないしは彼らの遺族による学校・大学への寄付行為である。目下大学には、寄付によって成り立っている基金が二種類あって、一つは「岩崎民平基金」、もう一つは「東京外国語大学スカラシップ資金」と名づけられている。前者は、元学長岩崎民平の遺族が一九八五（昭和六十）年以降、数回にわたって寄付した総額五、八〇〇万円を元本とし、後者は、岩崎家以外からの複数の寄付を合計した二、七一八万円を元本とする。スカラシップ資金のうち、約半分は、やはり英語関係者からのものである。すなわち、音声学の竹林滋が一九八九（平成元）年に寄付した一千万円と、元学長小川芳男の妻寿美子が九〇年に寄付した三百万円がそれで、合計一、三〇〇万円に達する。われわれはすでに、戦前に外国人教師メドレーが帰国のおりに寄付した一、五〇〇円でメドレー奨学金が設置されたこと、および、これは外語への寄付ではないが、やはり戦前外国人教師を務めたホーンビーが、戦後、自分の著書の印税を英語教育のために還元

すべく、ホーンビー教育基金を設立したことに就いて述べた。メドレーは岩崎の師でありのちの同僚、ホーンビーはメドレーと岩崎の同僚、小川はメドレーと岩崎の弟子にして、のちに岩崎の同僚、竹林は岩崎の弟子で小川とは同僚であった。彼らの寄付行為相互のあいだに直接の因果関係があつたかなかつたかはともかく、彼らがある価値観を共有していたことは間違いないであろう。

二 研究と教育

1 英語教育学

(1) 専門学校の時代

教師養成機関としての英語科・英語部

英語教師の養成は、一八九七（明治三十）年に高等商業学校の附属として外国語学校が設立されたときに復活した英語科の主たる使命であつた。一九〇六年五月刊の『校友会雑誌』に掲載された無名氏による論文「松籟」が引用している「語学校設立趣意書」にも、「露清韓伊西語科は主として我が国外交通商殖民の実務に当るべき人士を養ふこととし英語学科は我國の普通教育及実業教育の任に当るべき語学教員を養成し兼て外交官翻訳官商館会社の役員を素地を作るべく、仏語科は……」（二一七ページ）とあるとおりで、教員養成は英語科に課せられた特別の任務であつたといえる。一八八〇年代後半から世紀の変わり目にかけては、中学校の設立が急増し、それにもなつて英語教員の需要も大いに高まつたが、大学や高等師範学校だけではこれに応じきれなかつた。東京外国語学校とほぼ時を同じ

くして、一九〇〇年に設立された女子英学塾（津田塾大学の前身）の創立者津田梅子が開学式の挨拶で、「英学塾の目的はいろいろありますけれど、将来英語教師の免許状を得ようと望む人々のために、確かな指導を与へたいといふのが、少なくとも塾の目的の一つであります」と（日本語で）述べているのも（大庭みな子『津田梅子』朝日新聞社、一九九〇年、二二〇ページ）、当時の英語教師不足を反映したものといえよう。

期待されたその任務を外語の英語科がよく果たしたことは、卒業生の進路を調べてみると明らかである。すなわち、一九〇〇年に第一回の卒業生を送り出したとき、英語科の卒業生一〇名のうち七名が教職に就いている。卒業時に就職先が未定だった三名のうち二名もその後教師になった。翌年の第二回卒業生は一名で、うち七名が教師、実業界に出たもの三名、未定一名。第三回卒業生は全部で一九名、うち教師一三名、実業界三名、その他三名となっている。まさに教員養成学科の観があるが、教員の不足は深刻であつたらしく、第三回の卒業生が出た一九〇二（明治三十）年に、文部省は外国語学校のなかに第五臨時教員養成所なるものを設置して、英語教員の速成に乗り出している。広島に高等師範学校が設立されて教員養成を始めたのも同じ年である。

臨時教員養成所は、「第一二」を冠したものが一九二六（大正十五）年にふたたび外語に設置されているので、ここでその概要を記しておこう。養成所は、『文部省第三十年報』（一九〇三年）に、「師範学校、中学校及高等女学校教員タルヘキ者ヲ速成スル目的ヲ以テ本年度ノ始ヨリ特別ニ開設セラレタルモノトス養成所ノ数ハ第一乃至第五ノ五箇ニシテ……」（六八ページ）とあるように、一九〇三年全国五か所に設置され、それに一から五までの番号を付したものである。そのうち英語教員の養成を課せられたのは、第三高等学校内の第四臨時教員養成所と、わが東京外国語学校の第五臨時教員養成所の二つであった。修業年限は二年で、生徒の募集は〇二年と〇四年の二回のみ。第二回の卒業生が出た〇六年に閉鎖された。外国語学校の養成所では、それぞれ、二六名、二五名の卒業生を送り出してい

る。一九二六年に再度開設されることになった養成所は、修業年限が三年となり、全国で一四か所を数える。英語科がおかれたのは、東京高等師範（第一）、鹿児島高等師範（第二）、大阪外国語学校（第五）、東京外国語学校（第一二）、小樽高等商業学校（第一四）の五校であった。一九二九（昭和四）年から三二二二にかけての三年間に、外語では、それぞれ、二五、二七、二三名の英語教員有資格者を養成している。ただし、おりからの経済不況で卒業生の就職状況は思わしくなく、三一年三月をもって養成所はすべて閉鎖された。

附属機関の臨時教員養成所に多少の紙幅を費やしたのは、外語の英語科（一九一九「大正八」年以降は「英語部」となるが、以下では誤解のない限り「英語科」でこれを代表させる）を文部省がどう見ていたのかをよく物語るものと考えたからにほかならない。このほかにも、文部省が外語の英語科に英語教員養成機関としての役割を期待していたことは、一九一九年に行われた同省主催の英語教員のための夏季講習会が、外語に全面的に委託された事実によっても裏付けられよう。「英語科同窓会々報」第一五号（一九一九年）は、「文部省に於て七月下旬夏期講習会（英語）を開催せられたるが講師は全部母校職員にして会員百三十名の中母校卒業生二十七名なりき」と報じ（四ページ）、「一隅生」なる参加者の受講記を載せている（三七—三九ページ）。それによれば、講習期間は八日間。講師（担当科目をカッコに入れて示す）は、村井（アミエル「英訳」の東洋思想）、吉岡（修辭学、速読法）、片山（発音、和文英訳）、千葉（英国の歴史及び国情）、井手（詩文）、上條（応用英文法）、スミス（英語の諺）で、メドレーの名は見えないが、当時の専任教官（上條だけは、高等師範教授を兼任していた）が総出で事に当たったことがわかる。

この夏期講習は、翌二〇年、翌二一年も、ほぼ同じ規模で行われている。ただし、どのような理由によるものか、その後は『同窓会々報』から同講習会の記事が途絶えてしまい、第二九号（一九三二年）になってようやくこの記事が復活する。この年は、七月二十五日から八月五日まで十日間にわたって行われた。参加者は「全国中等学校英語科

教師で総員三百二十数名の盛況」(二ページ)だったという。このあと三五年に講習会が行われた記事はあるが(第三二号、一〇ページ)、その前後については、記録が残っていないため、実施されたか否かは、残念ながらわからない。時局の悪化を考えれば、三六年か三七年に打ち切られたとしても不思議ではないであろう。

以上で、外国語学校の英語科が世の期待においても実態においても長らく教員養成機関であったことは明らかになったと思われるが、こうした性格は、大正時代の中頃までにはかなり変化していたようである。すでに一度引用したが、一九一七(大正六)年発行の『英語科同窓会々報』第一一号に載った村上直次郎校長の談話、「近来、本校英語科の卒業生は従来への傾向と異つた傾向を有して来た。実業方面を志望するものが多くなつて、教員志望者が少なくなつて来たので、その方面の需要に應ずることが出来兼て居る」(三五ページ)は、それをはっきりと物語っている。とはいえ、戦前の外語において英語科は教職志望者が多いことで際立っていた。一九三九年度の『東京外国語学校一覽』に、同年五月に調査した「本科」[別科に対する本科のこと]卒業生職業別調」なる卒業生の進路に関する統計数値が出ているが(四八〇―四八一ページ)、それによれば、一九〇〇年の第一回卒業生から一九三九年までに、英語科は一、〇三七名の卒業生を送り出している。そこから死亡および帰趨不明のもの二三四名を除くと、残りは七九四名。そのうち、教職に就いたものは三八三名で、「帰趨の明らかなもの」の四八パーセント、すなわち二人に一人が教員になっていることがわかる(教員三八三名の内訳は、中学校一八六、実業学校八五、大学・高等専門学校五七、高等女学校二六、その他二九である)。これに対して、実業が二四七名(三二パーセント)、公務員八〇名(一〇パーセント)、自営三一名(四パーセント)、その他五三名(七パーセント)となっている。英語科に次いで教員になった者の数が多いのは独語科であるが、その率は、不明者を除く卒業生総数の一五パーセントにすぎない。戦前の外語では、英語科はきわめて特異な存在であつたといえよう。比較のため戦後の状況をいえば、新制大学第一回生に当たる

一九五三（昭和二十八）年の英語の卒業生三二名のうち、教職に就いたのは四名（『学報』第四号）、翌五四年は四名のうち六名であった（『学報』第八号）。統計が完備している一九六八年度から九七年度までの三〇年間についてみると、卒業生総数一、八八二名のうち、教職に就いたものは一九一名で、一割にすぎない。ただし、進学者の数がこれを上回って、二三一一名あり、このうちの多くは最終的に教員になったと考えられるので、これを先の一九一名に加えると四二二名となる（これらの数値は、「大学案内」等に公表された各年度の統計数値を筆者の側で合算した）。したがって教職に就いたものは、卒業生全体の約二割と考えてよいであろう。英語科の性格は、進学者を考慮しても、やはり戦前とは大きく様変わりしたわけである。

こうして、実質は教員養成所だった戦前の外語（の英語科）であるが、高等師範とまったく対等の扱いを受けていたわけではなかった。一九三一（昭和六）年に卒業し、県立高田高等女学校に赴任した小川芳男は、「高師の卒業生は、卒業と同時に教員免許状がもらえるが、教員養成校ではない外語は、教員志望者は卒業と同時に文部省に申請し、免許状をもらうことになっていた」と書いている（『私はこうして英語を学んだ』（TBS・ブリタニカ、一九七九年、八九ページ）。小川は、同時に着任した広島高師出身者の給与が九〇円だったのに、校長から八〇円で我慢してくれといわれて納得せず、談判のすえ、免許状がおりたら九〇円に上げるといふ約束を取りつけている。

英語教授法の開発

高等商業学校附属外国語学校の第一回入学生が三年生（最上級生）になった一九〇〇（明治三十三年）年に、経済学・国際法・教育学の三科目が新たに兼修科目として開設された。このうちの教育学は、教員になるための授業で、今日でいう教科教育法に相当する。英語科ではこれを浅田栄次が担当した。浅田は既述のとおり、シカゴ大学で聖書

学を修め、同大学から最初の博士号を授与されるという栄誉を担ったが、米国から帰国したのち、とりわけ外国語学校設立と同時に教務主任を任されてからは英語教育に専心し、『小学校用文部省英語読本』三巻、*Asada's English Readers* 五巻、*Asada's Practical Readers* 五巻などを編纂するかたわら、高等学校大学予科入学者選抜試験委員、教員検定委員会臨時委員（「臨時」とはいつても、一九〇二年以降一二年まで毎年委嘱されている）、文官高等試験臨時委員（一九〇六一四）、中等学校における英語教授法調査委員、文部省視学委員などの要職を務め、わが国英語教育界の権威者としての地位を確立した。浅田は英語教授法に関するまとまった著書は残していないので、彼の教授法に関する考え方は、『英語読本』の緒言やいくつかのエッセイから推測するほかないが、主眼は、音声訓練を徹底し、英文の解釈にあたっては、文法訳読主義をやめて、パラフレイズによるべし、とするものであった（浅田自身の授業ぶりは、本稿の「一 組織と制度の変遷」、4 東京外国語学校、(2) 教授陣とその授業(1)」の項でかなり詳しく紹介したので参照されたい）。

浅田が一九一四（大正三）年に四十九歳という働き盛りでなくなったあと、英語教授法の担当は吉岡源一郎に引き継がれた。主任の突然の死にとまどいを隠せなかった吉岡だったが、翌年村上校長の努力で近くの錦城中学校が教育実習校の場を提供してくれることが決まると、教授法研究のため、自ら志願して同中学校で授業を担当し、これを一〇余年にわたって続けている。また、一七年には、東京およびその周辺で英語教育にたずさわっている外語出身者を集めて「英語教授法研究会」を組織して会長を引き受け、同年六月二三日に第一回の会合を開いている。当初幹事は木下芳雄と松本肇（ともに明治三十七年卒）が務めたが、のち松本の後任として岩崎民平（大正二年卒）が推挙された（『英語部同窓会々報』【第二七号、一九三〇年、三四ページ】に掲載されている吉岡の回顧「英語教授「法」研究会について」を参照）。こうして始まった会は、毎年一回開催され（規約では年二回開くことになっていた）、能力

別クラス編成、発音の指導、辞書使用法、米国における教授法など、会員からの研究報告をめぐって、毎回活発な議論が展開された。学校からは校長（当初村上直次郎、のち長屋順耳）はじめほとんどの専任教官が参加している。

ところが一九二一（大正十）年の第五回を境に、研究会の記事は「同窓会々報」から消えてしまう。その裏には、「然し何分にも本会は立派に組織立って居るものでなく、会合毎に顔触れもかはり、或る時は単に懇親の会となつて居りました」という事情があつたようである（前掲吉岡の「回顧」、三ページ）。そして一九三〇（昭和五）年にいたり、「本会を今少しく組織立つたものにして真に英語教授研究会にしたいといふ意見も出で」（同三ページ）、会の再建が決定され、その第一回会合が翌三一年二月に開かれたのだつた。この席で吉岡は、「今日迄高等師範学校では已に種々教授法の研究をして来て居り、現在我国で普通に見るところの教授法は直接間接に高師の研究によつて出来て居るものである様に考へられます。我等も若し何か我等の善い特色を織込みたる教授法を見出すことが出来ますれば、それは我国の英語教育に必ず多大な貢献をすることゝ信じます」といつているが（『英語部同窓会々報』第二八号、一九三一年、四ページ）、高師の教授法に對置しうる外語独自の教授法の開発は、外語関係者の共通の願ひであつたにちがいない。ところが、新研究会も翌年七月の第四回会合をもつて、「同窓会々報」からは消息不明の存在になつてしまふ。すなわち、前述の文部省主催の夏期講習会と同様の運命をたどつたのである。

復活第一回目の会合のおり、校長の長屋順耳（東京帝大英吉利文学科出身で、広島高師の教授を務めた）は、自分がこれまでに出会つた英語教師について、「東京高師の人はそのタイプがあつて、ちやんと一定して居た。文学士は何処となく修養を積んで居るところがあるやうに見へた。外語出身の人は、全体に英語の力はあるやうに見へたが、教授法は下手であると思つた。又中等学校校長などの話を聞くと、外語出身の中には突飛な人、又は全体の平和を破るといふやうな人が割合に多かつたやうである」との感想をもらしているが（前掲誌、五ページ）、これは、以後長ら

く学外者の固定観念ステレオタイプを代表するとともに、学内者にとっては強迫観念オンセッショナルになったように筆者には思われる。どうか。

教授法研究会の会長は最後まで吉岡が務めたが、英語教授法の授業は、いつのころからか片山寛が担当するようになり、のちには大橋栄三も加わった(前掲吉岡の「回顧」、三ページ)。片山は弱冠二十五歳で恩師マッケローとの共著『英語音声学』を著しているが(本稿「英語音声学」の項参照)、生涯を通じての主たる関心は英語教育にあったようである。一九二二(大正元)年に、「ナショナル第四読本研究(上巻)」(熊本謙二郎・喜安進太郎編、研究社)に寄稿したのを皮切りに、文部省検定教科書 *Katayama's First English Grammar*, *Katayama's Advanced English Grammar* (研究社、一九一六年)、『*The Herald Readers* (泰文堂、一九三〇年)や学生用の副読本を書いている。教授法そのものの研究としては、『我国に於ける英語教授法の沿革』(研究社、一九三五年)が知られている。片山は一九三八(昭和十三)年、大橋は四一年にそれぞれ停年退職した。

外語の英語教育学を語るにさいしては、岩崎民平の名も忘れることは出来ない。岩崎は外国語学校に教授として着任する以前、中学校の教師を六年間務めて現場経験を積んでおり、上記の英語教授法研究会の主要なメンバーでもあった(のちに同研究会の幹事を任されたのは既述のとおり)。片山同様、若くして英語音声学に関する著書を公刊し注目されたが(「英語音声学」の項参照)、やがて文学作品の注釈や辞書編纂に関心を移し、そのかたわら中学校用の教科書を編集している。至文堂から出版された *A New English Grammar* (一九二五年)、『*New English Composition* (一九三〇年)、『*Concise English Grammar* (一九三八年)がそれである。また『英文法の教授と問題』(研究社、一九三六年)も、英語教育の分野での業績と考えるべきであろう。

「教育学」は、一九四四年に東京外国語学校を改組して設立された東京外事専門学校でも開設されているが、はた

して戦中・戦後の混乱期に、学則に規定されたとおりの授業（三年次に年間七〇時間）が行われたであろうか。この点については調査が出来なかった。

(2) 新制大学以後

敗戦後にわかに起こった英語ブームのなかで、対外的にもっとも華々しい活躍をした英語教官は小川芳男（一九〇八—一九〇、昭和六年卒）であった。小川は、新潟の高田高等女学校で四年半、米沢の高等工業学校で二年半、合計七年にわたる英語教育の現場を経験し、一九三八（昭和十三）年に片山寛の後任として母校に迎えられている。四六年、NHKからラジオの基礎英語講座の講師を依頼され、これを五二年まで務めて（四七年度だけは、恩師岩崎民平が小川の「代講」をした）、一躍全国に名を知られるようになった。また、戦後まもなく新しい文部省検定教科書の作成に取りかかり、*The Gate to the World*（中学校用、一九四七年）と *The World through English*（高等学校用、一九四八年）の編集責任者となっている。それと、四六年に日本英文学会の大会が東京で開かれ、英語教育に関する分科会が設けられたさい、その責任者として研究発表をするなど、若手の英語教育の専門家として自他共に許す存在となっていた。したがって、外語が新制大学になり、英語教育法の講座を設ける必要が生じたとき（新制大学では、教育職員免許法に基づく専門科目の単位を修得すれば、だれもが中学校・高等学校の教員になれる道が開かれたのである）、この担当者として小川に白羽の矢が立てられたのは、ごく自然の成り行きだった。小川は、新制第一回入学者が四年生になった一九五二（昭和二十七年）年に正式に教職課程に移り、ここで英語教員のための「特殊講義」を開いている。ただし、彼は第一部（英語専攻）との関係をその後も保持し、一九六一年に第三代学長に就任するまで、一・二年生の専攻語の授業のみならず、後期専攻語科目の「パブリックスピーキング」なども担当した。

小川の著作は膨大な数に上り、その分野も辞典・事典、教科書、学習参考書、一般向け実用書から、児童書および英語教育学の専門書の翻訳、随筆まで多岐にわたっている（その全貌は「ただし一九七七年までの」、日本英語教育史の貴重な証言というべき前掲の回顧録「私はこうして英語を学んだ」の巻末に詳しい）。英語教授法の分野でも、「英語の教え方——研究と演習」（目黒書店、一九五〇年）、「教室における発音指導法」（研究社出版、一九五九年）、「英語教授法展望」（共著、研究社出版、一九六二年）、「英語教育法」（国土社、一九六三年）、「これからの英語教育」（国土社、一九六五年）ほか多数が知られている。また忘れてならないのは、外語での教え子を結集して編纂した「英語教授法辞典」（三省堂、一九六四年）で、これは十九世紀以来の外国語教授法の術語のみならず、戦後日本の英語学会・英語教育学会を席卷したアメリカ構造言語学の術語も多数収録し、かつ内外の英語教育学者の履歴と業績も詳しく解説したユニークな参考図書である。八二年の改訂版では、初版の協力者がそれまでの一八年間にそれぞれ一家をなして、師とともに共同編集者として名を連ねている。すなわち、小島義郎（昭和二十三年卒）、齋藤次郎（フランス語、同二十六年卒）、若林俊輔（同三十年卒）、安田一郎（同十九年卒）、横山一郎（同三十年卒）らである。（なお、小川の英語辞典関連の業績については、本稿各論の「英語辞書編集」を参照。）

小川は外語をやめたあとも、幅広い人脈、円満で気さくな人柄、世話好きな性格ゆえに、各種団体や学会の長を依頼されて引き受けている。このうち、語学教育研究所の理事長、日本英語検定協会（いわゆる「英検」の実施団体）会長、JACETの名で知られる大学英語教育学会の会長、これら三つの職は、外語における小川の同僚梶木隆一が引き継いだ。

小川が学長に就任したあと教科教育法を任されたのは、第一部（のち英米科、英米語学科）の海江田進で、海江田は、六二年から停年退職する七二年まで一〇年間この地位にあった。海江田も小川同様、教職課程と英米科の授業

(後期課程では「和文英訳」および「パブリック・スピーキング」など)を「かけもち」している。海江田の退職後の七二年から八〇年まで、教科教育法は、非常勤講師の山家保(昭和十一年卒)と安田一郎(前出)の手に委ねられた。

英語教育法が専任教官の手に戻ったのは、若林俊輔が教授として東京学芸大学から外語に転任になった一九八〇(昭和五十五)年四月である。これは外語の英語教育学の歴史において画期的な出来事であった。というのは、このとき若林が就任したのは、共通講座の教育学であって、若林は単に教科教育法だけでなく、演習と卒業論文演習をも担当したからである(小川と海江田は、在職中ついに卒業論文指導をすることはなかった)。「英語教育学」、「英語教育学演習」、「英語教育学卒業論文演習」がそれらの正確な名称である。これによって外語の英語教育は英米(語学)科の「出店」の状態から独立するとともに、学問研究の対象として正式に認知されたのであった。

若林は、英語教育学者の常としての中学・高校の検定教科書編集に長年関わっているほか、文字論、英語教師論、教育の現場から見た英文法論、英語辞典などの分野で数多くの著作をものしている。英語教育界の論客としても知られ、とりわけ外語着任直後の八〇年代初頭に、公立中学校の英語の時間が一週三時間に減ったおりには、数人の同志と反対する会を結成し、国会へ請願に出向き、全国を行脚して講演するなど、ペンばかりでなく、さまざまな手段を使って運動を展開した。また、二年半で敢えなく終刊とはなったが、同じ時期に、月刊の『英語教育ジャーナル』を三省堂から発刊し、編集主幹として論陣を張った。

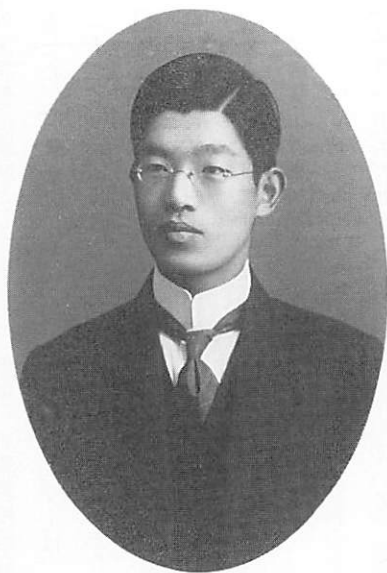
教育学の講座は、若林が一九九四(平成六)年に退職すると、根岸雅史(当時講師、翌九五年から助教授)が一般語学科目から学内移籍して引き継いだ。根岸は九五年の学部改革以後、言語・情報講座(人間環境系列)に所属している。

2 英語学

(1) 戦前

本学における英語学の研究と教育を語る場合に最初に取り上げなければならないのは、片山寛であろう。片山は、音声学において名を残しているが（後段の「英語音声学」の項参照）、英文法についても造詣が深かった。一九〇四年に刊行された C. T. Onions の *An Advanced English Syntax* は、わが国の英文法研究者たちに多大な影響を与えた本であるが、彼は英語科の授業でこれを何度もテキストに取り上げている。『英語青年』（一九七八年五月号）の追悼記事の中で、弟子の小川芳男は「先生の講義から先生は *tags* に委しいと感じた」と述べているし、海江田進も「片山先生の英文法に関する知識は、きわめて精密なものであったと思う」と述べているところから判断すると、片山のような学識は、教え子の細江逸記（明治三十九年卒）の思考形成に影響を与えたであろう。

その細江に厳格な学問の方法論を教え、深甚の影響を与えたのは、片山よりもむしろ初代英語科主任の浅田栄次であったと思われる（浅田の経歴と人物については、「東京外国語学校」の項ですでに述べたのでここでは繰り返さない）。細江は、本学卒業後、石川県立第一中学校・大阪府立北野中学校教諭、大阪高等商業学校助教を経て、一九一五—一六年東京外国語学校講師を務め、さらに東京府立第一中学校教諭を経て、一九一九年から大阪高等商業学校（後の大阪商科大学）教授として一九四四年の停年退職まで在職した。東京府立第一中学校教諭時代に、東京帝国大学文学部の市河三喜助教授と「対格つき不定詞」構文をめぐる論争したことは大変有名である。その間、『英文法汎論』（文会堂、一九一七年）、『動詞時制の研究』（泰文堂、一九三二年）、『動詞叙法の研究』（泰文堂、一九三三



細江逸記

年)、『ヂョーヂ・エリオットの作品に用ひられたる英国中部方言の研究』(学位論文、泰文堂、一九三五年)など優れた研究書を次々に上梓していった。わが国の本格的な英語学研究は、市河三喜の『英文法研究』(研究社、一九一二年)をもって始まるとされるが、これは英語に見られる各種の興味深い語法を、いろいろな用例に基づいて歴史的・心理的要因にも言及しながら記述したものであつて、英文法の組織的記述にはなつていなかった。これに対して、細江の『英文法汎論』は、本格的な英語統語論を構築する目的で書かれたものであり、明晰な論述と広範な用例収集などの点でも画期的な著作と言えよう。また、『動詞時制の研究』と『動詞叙法の研究』においては、 *tense* を時の区別を表わすものというよりはむしろ *mood* 表現の表われと見る著者独自の文法哲学が披瀝されていて、この分野の基本文献として今日まで読み継がれてきている。もし細江が東京外国語学校一筋に研究者・教育者としての全生涯を全うしていたならば、その後の本学の英語学研究は、さらにめざましい発展を遂げていたのではなからうか。

岩崎民平については、すでに述べる機会があつたので、ここでは彼が東大での恩師市河三喜の『英語学辞典』(研究社、一九四〇年)に「文法」項目の執筆者として加わつたこと、および、戦後になつて、大塚高信・中島文雄とともに「英文法シリーズ」や「英語学ライブラリー」を編集して、英語学研究の隆盛に貢献したことだけを記すに留める。

ロンドン大学の講師を務めていた Harold E. Palmer は、一九二二年に文部省の

外国語教授顧問として来日し、翌年、英語教授研究所を創設して所長となって、わが国の英語教育改善に多大な貢献をした。Oral Methodの提唱者だったパーマーは、*A Grammar of Spoken English* (Hefter, 一九二四年) というユニークな英文法書を出しているが、用例をすべて音声記号で記し、強勢・音調まで表示するなど、徹底して音声学的観点から英語の口語文法を記述したものである。この本は、戦後になっても、本学の英文法の授業のテキストとして使用されたこともある。彼は東京外国語学校でもしばしば教鞭を執ったが、一九三六年帰国することになり、その際にあとを託したのがアルバート・シドニー・ホーンビー (Albert Sidney Hornby) である。ホーンビーは、外国人英語学習者を対象とした初の英英辞典を編纂したことで知られているが (詳しくは「英語辞書編集」の項参照)、他方でパーマーの発案を受け継いで動詞型という概念を確立し、*A Guide to Patterns and Usage* (Oxford University Press, 一九五四年) という名著を残している。英語の文構造を捉える方法として、従来のアニオンズ流の五文型は多少目が粗いという欠点が見られたが、ホーンビーは、直接的語・間接目的語などの機能面と、不定詞句・節・分詞などの構造面をうまく組み合わせた二五動詞型という斬新な枠組みを提案した。以上のことからよく分かるように、ホーンビーの応用英語学者としての発想の豊かさは、実に際立っていた。

(2) 戦 後

昭和の前半期には、片山寛、千葉勉、岩崎民平、メドレー、ホーンビーらの教えを受けて、小稲義男 (昭和二年卒、辞書編纂)、沢崎九二三 (同二年卒、英文法)、山田和男 (同二年卒、和英辞典編纂・英作文法)、小栗敬三 (同二年卒、英語音声学)、皆川三郎 (同三年卒、英学史・英語教育)、小川芳男 (同六年卒、英語教育)、海江田進 (同六年卒、英語教育)、岩田一男 (同七年卒、ベストセラー『英語に強くなる本』の著者)、大村喜吉 (同十三年卒、英学



佐々木達

史)、山川喜久男(同十五年卒、英語史研究)、安倍勇(同十六年卒、実験音声学)、小西友七(同十六年卒、辞書編纂・語法研究・黒人英語研究)、半田一郎(同二十年卒、文法理論・北欧諸語研究)など、豊富な人材が輩出するようになるが、英語学の各分野における彼らの本格的な活躍は戦後になってからである。

一九四九(昭和二十四)年に本学は新制の東京外国語大学として再スタートを切るが、その直前の一九四八年に幾人かの俊秀が卒業する。すなわち、竹林滋、伊藤富士磨、小島義郎、上田稔である。そのうち、竹林は一九六六年から一九八九年まで本学で教鞭を執り、音声学の分野を中心に本学の言語研究を飛躍的に発展させた(詳しくは、「英語音声学」の項を参照のこと)。また、伊藤は辞書編纂において、上田は英語史・比較言語学の分野で、小島は辞書学・辞書編纂・英文法・意味論など多方面で目覚ましい業績を上げている。

戦前の言わば搖籃期の英語学研究を、戦後になって質・量ともに大きく変革させる契機となったのは、一九四六年に東京外事専門学校教授として着任し、以後一九六六年に停年退職するまで英語学を講じた佐々木達(一九〇四―八六)である。佐々木は、個人的理由からいろいろ回り道をしたために、一九三〇年に東京帝国大学英吉利文学科を卒業しているが、年齢的には中野好夫や大塚高信と同期である。佐々木は、市河三喜の後をうけて東京帝国大学英語学教授に就任した中島文雄とは、気質・学問の両面において異なっていた。佐々木は、若い頃から一貫して詩歌の言語に対して強い関心を抱いており、そのことは卒業論文の

On the Language of Robert Bridges' Poetry に表われているばかりでなく、その後の『英詩のことば』（語学出版社、一九四九年）、『近代英詩の表現』（研究社出版、一九五五年）などにも十分に伺える。『近代英詩の表現』は「文法」と「文体」の二部から成るが、第一部では英語の詩歌から自在に実例を引きつつ品詞別に言語特徴を捉え、第二部では聯の構造・聯の集合と配列という観点から今日の詩学研究を先取りするような斬新な分析を行っている。

佐々木は、伝統的な英語学の研究においても抜きん出ている。すなわち、恩師の市河が『英語学辞典』を編集するに際しては、実質的に編集の要としての役割を務め、「英語史・固有名」の項目をすべて執筆している。とくにこの固有名の部分と、『語学試論集』（研究社出版、一九五〇年）に載せた言語学者評伝は、後に弟子の木原研三との共編として刊行された『英語学人名辞典』（研究社、一九九五年）の基盤を成すにいたる実に優れたものだった。このような英語学史・言語学史的著作は、佐々木がいかに広範に文献渉猟を行っていたかの証左であろう。『語学試論集』に集められた諸論文は、すべて『英文学研究』や『英語青年』などに寄稿した専門的論文であるが、いずれにおいても佐々木の言語感覚は群を抜いており、刺激的な卓見に満ちていた。佐々木の主要論文は、新たに書き下ろした論文も加えて、退職の年に『言語の諸相』（三省堂、一九六六年）として、五百ページを超える大冊に纏められて刊行された。この本の巻末には、東京外国語大学での「私の語学遍歴」と題した最終講義が再録されていて、不世出の英語学者佐々木達の生の声を聴くことができる。

佐々木の薫陶を受けて、その後本学からは多彩な英語学者が輩出するようになった。たとえば、中尾啓介（昭和三十年卒、辞書学・辞書編纂）、小川繁司（同年卒、辞書学・辞書編纂）、横山一郎（同年卒、構造言語学・辞書編纂）、岡部匠一（同年卒、近代英語研究）、堀内克明（同三十一年卒、現代英語研究・辞書編纂）、松田徳一郎（同三十二年卒、生成文法理論・辞書編纂）、東信行（同三十三年卒、英語史・英文法・辞書学・辞書編纂）、渡邊末耶子（同三十

四年卒、英語音声学・辞書編纂)、宮川幸久(同年卒、英文法・辞書編纂)、山岸和夫(同年卒、英文法・辞書編纂)、光延明洋(同三十五年卒、言語人類学・認知言語学)、宮井捷二(同三十六年卒、社会言語学・辞書学・辞書編纂)、諏訪部仁(同三十七年卒、S・ジョンソン研究・辞書編纂)、山中桂一(同三十八年卒、R・ヤーコブソン研究・詩学・記号論)、秦宏一(同三十九年卒、英語史・比較言語学・北欧諸語研究)、木村建夫(同四十年卒、英語史・辞書編纂)など、英語学のあらゆる領域にわたっている。

佐々木達とほぼ時期を同じくして本学で英語学を講じていたのは、乾亮一(在職一九五一―一九六九年)と半田一郎(同一九五六―一八七年)である。乾は一九三五年に東京帝国大学英吉利文学科を卒業した市河門下生の一人であり、英語史・英文法・比較語学などを専門にしていた。文部省から刊行された「国語の表現に及ぼした英語の影響」(一九五八年)は、今で言うところの対照言語学の先駆的研究である。また、「英文法シリーズ」(研究社出版)の中の「分詞・動名詞」(一九五五年)、「英語学ライブラリー」(研究社出版)の中のストッフェル著「強意語と緩和語」(東信行・木村建夫との共訳述、一九七一年)、『*The Kenkyusha Dictionary of Current Idiomatic English*」(共編、研究社、一九六四年)などが代表的な著作であるが、いずれにも乾の優れた言語感覚が生きている。ただ、現役の学生生活の後半にいたって健康を崩し、停年退職の前に本学を辞したのはまことに残念であった。

半田一郎は、戦後多年にわたって本学の英語学教育の中枢を担ってきたが、とくにイエスペルセン著 *The Philosophy of Grammar* の邦訳(「文法の原理」、岩波書店、一九五八年)を刊行するという偉業を成し遂げた。この本は、イエスペルセンが自己の文法理論の全体像を詳述した歴史的著作だが、ヨーロッパの様々な言語から多彩な用例が引用されており、きわめて難解な研究書であった。それが、この名訳によつて、実に明快に理解できるようになったのである。今日なお、イエスペルセンの言語研究を再評価する人々が絶えないことを鑑みるにつけ、もしこの方面の研

究がさらに推進されていたら、これも本学における英語学研究の大きな特徴となっていたことであろう。

佐々木や乾の教えを受けて、その後の本学の英語学研究を支えたのは、松田徳一郎と東信行である。松田は本学で学んだ後、東京大学大学院を経て、若くしてアメリカに渡り、インディアナ大学で構造主義言語学と変形生成文法について研鑽を重ねて、一九六四年に変形生成文法の枠組みに基づいて古英語統語論を扱った研究 *A Transfer-national Analysis of the Old English Pastoral Care* によって博士号を取得した。帰国後の一九六六年に本学に着任し、以後一九九六年の停年退職まで一貫して文法理論の研究・教育に邁進した。佐々木はいわゆる新言語学には手染めなかったようだが、松田によってやっと本学にも、アメリカ流の言語理論研究の種子がまかれることになったのである。松田の初期の教え子の中で、現在、馬場彰（昭和四十三年卒）が生成統語論を、宗宮喜代子（同四十五年卒）が意味論を本学で講じている。東信行は、本学で佐々木・乾の教えを受けた後、東京大学大学院では中島文雄の教えを受ける僥倖に恵まれ、英語史研究者としてスタートしたが、若い時から言語形式と意味の相関関係に深い関心を寄せ、徐々に記述英文法・日英語比較研究・辞書学など多方面へ研究を広げていった。戦後の英米語学科の講義要項を見ると、周期的に乾・半田などがアメリカ英語概説の授業を行っていることがわかるが、この伝統は東にも受け継がれており、「アメリカ英語概説」（竹林滋・高橋潔・高橋作太郎と共著、大修館書店、一九八八年）として結実している。松田と東は辞書編集においても多大の業績を上げているが、これについては本稿の「英語辞書編集」を参照されたい。

本学における過去百年間の英語学研究を通観してわかることは、英語学のほとんどすべての領域にわたって、多彩な人材が多種多様な研究・教育を行ってきたということだろう。とくに、音声学・音韻論、記述英文法、文法理論、英語史、文体論、英語教育、辞書学、辞書編纂などの分野における蓄積はかなり大きい。しかし、これらに安住する

ことは許されない。各分野の継承者を養成するばかりではなく、従来の研究に多少とも欠けていたと思われる一般理論的探求と、もっと先端的な領域の開拓に乗り出す必要があるのではなからうか。

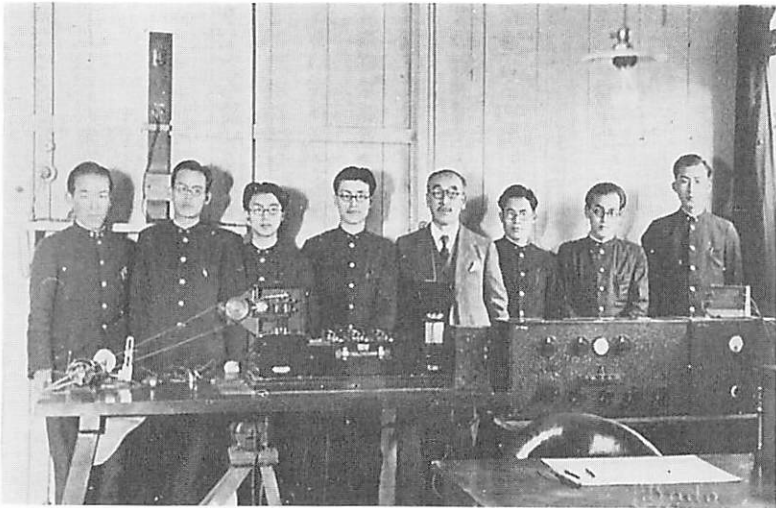
3 英語音声学

(1) 戦前

東京外国語大学からは世界にも通用する音声学者が何人か出ている。ここでは、主に英語科を中心に外語における音声学の研究と教育について簡単にその歴史をたどってみる。

音声学は、十九世紀後半になってヨーロッパ、とりわけドイツや英国において機械を使った分析が盛んとなり、科学的な学問の仲間入りをした。英国ではヘンリー・スウィートが活躍していた時代であるが、この有名な音声学者の名前は日本でも知られ、その音声学書を底本として附属外国語学校英語学科のマッケロー（在職一八九七—一九〇〇年）と、その外語での教え子であり英語科第一回目の卒業生でもある片山寛（明治三十三年卒）が共著の『英語発音学』（上田屋書店、一九〇二年）を出版している。これは、日本における初の学問的な英語音声学の入門書となった。片山はこの本が出版されたのと同じ年に英語学科の講師となり、一九〇五（明治三十八）年に教授となって一九三八（昭和十三年）年に退職するまで東京外国語学校で教えた。

当時、音声および音声学の教育が週にどの程度、どのような内容で行われていたかについては不明なことが多いが、現存する資料で見ると、一九二九（昭和四）年、つまり東京外国語学校の修業年数が三年から四年に移行して二年目の学則では、文科、貿易科、殖産科のいずれの科でも第一学年の外国語の授業の中で「発音」が教えられ、これ



千葉勉を囲んで（音声学実験室にて、1930年頃）

とは別に文科第三学年の選択科目の一つに言語学の科目として「声^{ソウ}音^{オン}学^{ガク}」が挙げられている。

片山が着任して一四年後、外語の英語学科はまた一人の音声学者を迎えることになる。千葉勉（東京帝国大学英吉利文学科、明治四十年卒）である。千葉は、東大講師、英国留学を経て一九一六（大正五）年に講師、三年後からは教授として外語で教鞭を執るようになった。東大では英文科で学んだ千葉は、外語に来てからも初めは十八世紀の英文学を講じていたようだが、のちに興味と研究の対象が音声学に移った。千葉の、主に実験的手法を用いた音声学研究の分野での業績は、今でも内外の音声学の論文や文献で引用されるほどである。じつは、千葉は東京外語初の音声学実験室の責任者の立場を任されることになり、それ以降この実験室の設備を利用しての研究で功績を上げたのである。

「東京外国語学校仮校舎建物配置図」を見ると、一九二七（昭和二）年までは「附属室」となっていたおおよそ四八平方メートルの部屋が、二年後の二九年の配置図からは「音声学実験室」と名を変えている。学則の、修得すべき単位の表に「音

学」が挙げられるようになったのと時を同じくしている。この竹平町キャンパスの皇居外濠の土手に接した東南の隅の、物置を改造した実験室こそが、東京外語の初めての音声学実験室である。これは、その直前に大阪外語に実験室が認められたのを受けて東京も文部省に申請して予算が下りたもので、当時の長屋順耳校長は初め片山寛にこの新しい実験室の運営を依頼した。ところが片山はこれを辞退、代わりに千葉を推薦したといういきさつがあったようだ。(佐藤良雄氏「フランス語部、大正十三年卒」による。氏は外語と東大を卒業した後、一九三八年より七年間にわたって千葉が責任者を務める音声学実験室での仕事を手伝った。当時のことに詳しく、この度の原稿執筆にあたっては大変お世話になった。)

千葉は一九三一(昭和六)年には日本語の五つの母音を実験室のオシログラフを使って分析、ダニエル・ジョーンズ(Daniel Jones)の基本母音と比較した論文を発表し、同年ジュネーブで開かれた国際言語学者会議で報告したところ、国際的に認められることとなり、翌年には国際言語学者会議の常任委員に推薦された。さらに三五年、千葉は *A Study of Accent: Research into its nature and scope in the light of experimental phonetics* という本を英語で書いて富山房から出しているが、その序文で次のように書いている。

The present study is based on experimental research in speech-sound made in the phonetic laboratory of the Tokyo School of Foreign Languages, which was designed and established by the author under the auspices of the school.
(これは東京外国語学校の援助の元、筆者によって設計され創設された音声学実験室で行われた、言語音についての実験結果をまとめた研究である。)

この著書で千葉が扱ったのはアクセントとイントネーションであるが、対象となったのは英語のほかドイツ語、フ

ランス語、日本語、中国語、朝鮮語、ヒンドスタニー語、ロシア語、モンゴル語の九言語で、いずれも当時の東京外国語学校に設置されていた語科の言語である。分析には主にオシログラフが用いられたようである。千葉は文学部の出身であったわけだが、音声学実験室には時給で雇用された事務官のほかに、東京帝国大学から理学士が実験助手として入った。千葉はその後梶山正登と共著で *The Vowel, its Nature and Structure* (開成館 一九四一年) をやはり英語で著したが、これは世界的に高い評価を得た。共著者の梶山は、音声学実験室に東大から派遣された技官で、物理学士であった(のちに武蔵工業大学の教授となっている)。

このように音声学実験室は有効に使われたのだが、第二次世界大戦中は一九四四(昭和十九)年、西ヶ原新校舎への移転、次の年には校舎の焼失という苦難にあり、この間器材は土手の横穴に入れられて焼失は免れたとのことであるが、同年に千葉が退職して音声学実験室は開店休業の状態に追い込まれた。

(2) 戦 後

戦後、千葉が退職し実験室は使用されなくなっても、第一部(英米圏)での音声面の授業は専任の岩崎民平(大正二年卒)、小川芳男(昭和六年卒)、非常勤講師の安倍勇(昭和十六卒)などによって続けられた。

岩崎民平は、外語では片山に音声学を学んでいる(岩崎は、マッケロー・片山共著『英語発音学』によって非常に刺激を受け開眼させられた、とマッケローの死去に当たって『英語青年』一九四〇年三月号で書いている)。岩崎は母校卒業後中学の教員を経て東大へ進学、一九二二(大正十一)年に東京外国語学校英語部の講師として着任した。東大進学前の一九年には早くも『英語 発音と綴字』(研究社)を出しているが、このあと東大での恩師、市河三喜の『英語発音辞典』(研究社、一九三三年)を実質的に執筆した。岩崎は、英和辞典編纂の分野で多大な功績を遺し

たが、同時に辞典における発音表記では、それまで使われていた複雑なウェブスター式表音法の代わりに国際音標文字を採用してその普及に努め、また英語の発音を表わすのに日本語のカタカナを使うという方法を批判した。戦後はアメリカ英語の発音を辞典で記述する必要があるが出てきたが、英音と米音とを効率よく表わす独自の簡約式表記法を考案採用し、これは現在でも多くの辞典で使われている。恩師片山、そして千葉が退職したあと、この岩崎が外事専門学校の英米科の、そして東京外国語大学に昇格後は第一部の音声教育に力を注いだ。岩崎民平は、一九五五（昭和二十）年から六年間、第二代学長を務めた。

岩崎のあと、第三代学長となった小川芳男（在職、一九三八―一九六九）は英語教育での功績が大きいが、講義や著書を通して発音の教育にも力を注いだ。また、非常勤講師としてではあるが、一九四一（昭和十六）年英語部卒業の安倍勇もまた母校で英語の音声に関する講義を受け持ち、研究面では主にイントネーションに関する論文で世界的に通用する業績を上げた。

このように、外語での音声に関する教育と研究は絶えることなく続けられたが、音声学実験室は一九四九年東京外国語大学に昇格後も、責任者の退職と戦争によって閉鎖されたままになっていた。しかし、当時を知っている教官の間からは、言語の研究に欠くことのできない音声学の講座を再び開設すべきであるという声が強くなり、大学院が新設された一九六六（昭和四十一）年、国立大学では初めて音声学講座が新設され、二人の教官が着任した。一般音声学の竹林滋（在職一九六六―一九八九年）と、実験音声学の吉沢典男（在職一九六六―一九八八年）である。新しい音声学講座は語科に属するものではなく人文科学系列の講座であったが、竹林は外語の卒業生（昭和二十三年）でもあり、英語音声学が専門であったので、全学を対象とした「音声学概論」の講義とゼミ、「比較音声学」、大学院での音韻論の講義のほか、英米語学科二年生全員に対して英語音声学入門の授業も担当した。竹林は、一九九六年にはそれまでの

研究の集大成である大著『英語音声学』（研究社）を著した。同書は中級以上の英語音声学書としてはわが国においてほとんど唯一の存在である。竹林の恩師は岩崎民平であるが、岩崎の仕事を引き継いで竹林もまた辞書編纂の仕事でも有名である（詳しくは「英語辞書編集」の項参照）。

吉沢典男の専門は国語学であったが、医学博士でもあり、国立国語研究所、千葉大学を経て着任した外語大では実験音声学研究室を開き、主に機械類を使った音声分析と生理音声学の講義、ゼミを受け持った。言語障害のある患者の発声訓練なども専門とし、臨床音声学の仕事も続けていた。

一九八八（昭和六十三）年、吉沢は在職のまま病死、実験音声学研究室にはその後益子幸江（フランス語学科、昭和五十四年卒）が後任として着任、八九年に竹林が停年退職した後の一般音声学の講座は中川裕（ロシア語学科、昭和五十九年卒）が引き継ぎ、現在に至っている。また、八八年には竹林の教え子である斎藤弘子（昭和五十七年卒）が英米語学科に着任、それまで竹林が受け持っていた英米語学科生必修の音声学の授業を引き継いだ。

以上、外語における音声学という観点から見えてきたが、このほかにも外語で教育を受けて他大学で音声学の研究・教育に携わっている者も数多い。赤松力（昭和三十一年卒）は、英国リーズ大学で音声学を講じて活躍している。

4 英語辞書編集

明治期

英和辞典の原点は、実質的には、一八六二（文久二）年に出版された堀達之助編『英和对訳袖珍辞書』（洋書調所）とされる（竹林滋「英和辞典」、竹林滋・千野栄一・東信行編『世界の辞書』研究社、一九九二年、五〇五ページ）。

本学の大学案内によれば、この辞書を発刊した洋書調所から開成所、開成学校を経て、東京外国語学校が一八七三（明治六）年に、いったんは開校された。当時、洋学摂取のために英和对訳辞書のようなものは、絶対に必要であったが、それが本学の遠い前身の洋書調所で作られたということは、本学は、いわば生まれる前から、時代の要請であった西洋文明を取り入れようとする運動の一翼を担っていたのである。そしてそのことが、その後の外語を中心とする辞書作りの大きな発展、さらには諸外国との関係の発展のきっかけの一つとなったと言っても過言ではない。外語関係者で、辞書編集者としてもっとも早く名前が登場するのは、神田乃武ではないかと思われる。神田は一九〇九（明治四十二）年に『英和双解熟語大辞典』（有朋堂）を南日恒太郎と共著で出版し、続いて、一一年に『模範英和辞典』（三省堂）、一九二二（大正十一）年に『袖珍コンサイス英和辞典』（三省堂）を、いずれも金沢久と共著で出版した（月刊『言語』第一三巻、第一号、一九八四年、二〇三ページ）。しかし、『英語学人名辞典』（佐々木達・木原研三編、研究社、一九九五年）は、「神田は辞書にも編者としてしばしば名をつらねているが、彼が実際に関与したかは疑わしい」と述べ（二七〇ページ）、また、早川勇は、『英和双解熟語大辞典』について、「勝俣銓吉郎が実質上の著者」としている（『初期英和辞典の編纂法』中部日本教育文化会、一九九七年、一九七ページ）。さらに、神田は『和英袖珍新字彙』（三省堂）をイーストレーキ（F. Warrington Eastlake）と共著で出版したが、その初版は一九一一年に出た（早川勇『日本英語辞書年表』岡崎学園国際短期大学人間環境研究所、一九九八年、三九ページ）。

次に早い時期に、辞書編集者として名をつらねているのは、片山寛（明治三十三年卒）と上條辰蔵（同三十四年卒）である。片山と上條は一九〇六（明治三十九）年、『英語難句難語辞典』（参文舎、文海堂、積文社）を松浦与三松と共編で出版した（早川・前掲『編纂法』、一九五ページ）。さらに、同年以来、本学の外国人教師であったメドレーは一九一四（大正三）年、『袖珍和英辞典』（有朋堂）を入江祝衛と共編で出版した（吉沢典男『袖珍辞典』、月刊

『言語』第一四卷、第四号、一九八五年、一五九ページ。

岩崎民平・佐々木達・小川芳男―第一世代の辞書編集者

本学の関係者が英語の辞書編集・執筆に、本格的にかかわるようになる最大の契機は、岩崎民平（大正二年卒）が『新英和大辞典』（研究社）の編集に参画し、しかも、この辞書をほぼ現行のような完成された形にするのに重要な役割を果たしたことであった。岩崎は、岡倉由三郎の依頼により『新英和大辞典』（一九二七年）改訂の編集主任になり、一九三六（昭和十一年）年に第二版が刊行されたあとも、引き続き、この辞書の共同主幹として第三版、第四版の編集に尽力、内容の向上に多大の貢献をした。次に、岩崎は四一年に『簡約英和辞典』（研究社）を編者として刊行し、辞書作成の権威者としての地位を確立した。この辞書には、教え子の上本佐一（大正十五年卒）、沢崎九二三（昭和二年卒）が執筆者として協力した。この辞書はその後、大幅な改訂・増補が行われ、五六（昭和三十一年）年に『新簡約英和辞典』として出版された。岩崎は四七年に『ポケット英和辞典』（研究社）を、さらに六六年には小稲義男（昭和二年卒）との共編による『研究社新英和中辞典』を刊行した。後者はいわゆる学習英和辞書のブームをもたらした。岩崎がこれらの辞書の編集に活躍するにつれて彼に直接教えを受けた外語出身者が、だんだんと岩崎の辞書の執筆・編集に参画するようになってきた。『研究社新英和大辞典』第三版（一九五三年）では、荒巻鉄雄（大正十二年卒）、小稲義男、守屋獅郎（ともに昭和二年卒）、沢崎九二三、岩田一男（ともに同七年卒）、山川喜久男（同十五年卒）、半田一郎（同二十年卒）が岩崎のもとで執筆作業に加わり、第四版（一九六〇年）では上記に加えて、上本佐一、山下雅巳（ともに同十七年卒）、水庭進（同十九年卒）、竹林滋（同二十三年卒）が執筆者として参画した。岩崎に続いて、英米科と辞書編集とのかかわりを深めたのは佐々木達である。佐々木は外語における英語学を学問

として確立させたと云えるが、佐々木は、そしておそらく岩崎も、英語学の講義の中で辞書編集に言及することはほとんどなかった。前掲『英語学人名辞典』は、「佐々木と辞書編集との関係は、戦後三省堂から『コンサイス英和辞典』の全面的改訂を依頼されてからである。宮田幸一、羽柴正市、木原研三の協力で始めたこの仕事は難航を極め、協力者も大幅に増員して昭和二十六年に完成した。多くの協力者による『グローバル英和辞典』（昭「和」五八年）にも佐々木の寄与が大きい」と述べている（四〇五ページ）。『新コンサイス英和辞典』の第二版は一九八五（昭和六〇）年に出版され、佐々木の教え子である山岸和夫、宮川幸久（ともに昭和三十四年卒）などが執筆協力した。佐々木が初めて手がげた画期的な学習辞書『グローバル英和辞典』（三省堂、一九八三年）には、教え子・卒業生としては芦川長三郎（昭和二十二年卒）、山岸和夫、宮川幸久、宮井捷二（同三十六年卒）、津谷武徳（同三十九年卒）、佐藤尚孝（同四十五年卒）が編集・執筆に加わった。佐々木の辞書作りに協力した教え子としては、ほかに、渡辺勝馬（昭和三十三年卒）、渡邊末耶子（同三十四年卒）がある。

岩崎の教え子であった小川芳男（昭和六年卒）は英語教育の専門家として、数多くの辞書にかかわった。たとえば一九七五（昭和五十）年に小川が監修した『英和中辞典』（旺文社）が出版された。小川の辞書編集に協力した多くの卒業生の中には、桃沢力（昭和十六年卒）、稲見芳勝（同二十二年卒）、齋藤次郎（フランス語、同二十六年卒）、堀内克明（同三十一年卒）、柏原信幸（同四十年卒）等がいる。

岩崎、佐々木、小川とだいたい同じ時期に外語の教授であった人の中で、辞書編集にかかわったのは、乾亮一と梶木隆一である。乾は岩崎の辞書編集の重要な協力者であり、梶木は『小学館ランダムハウス英和大辞典』（一九七三年）の編集委員会の委員として、この辞書の企画に大きく貢献した。編集委員としては、ほかに、小栗敬三（昭和二年卒）、小西友七（同十六年卒）、堀内克明の名前がみられる。なお、この小学館の大型辞書の第二版は一九九三年に

刊行され、その編集主幹陣に小西、堀内が参画し、執筆・校閲者には松村好浩（昭和三十一年卒）、渡邊末耶子、山岸和夫、山中桂一（同三十八年卒）、馬場彰（同四十三年卒）など一〇名近くの卒業生の名がみられる。

第二世代の辞書編集者

同窓会の百年史の「辞書編纂・辞書学と外語」を担当している中尾啓介（昭和三十年卒）は「辞書編纂の面で外語関係者が岩崎、佐々木、小川を軸に活躍した時期を第一世代とすれば、第二世代はその多くが第一世代、岩崎、佐々木、小川の直接の教え子である。あるいは第一世代と第二世代の差は、岩崎民平を共通の土台としたうえで、佐々木達の前と後との世代と言える」と述べている。

第一世代の三人の教授の教え子、つまり第二世代が四つぐらいのグループを形成して、それぞれの出版社から英和辞書、和英辞書などを出版するという形で外語の辞書編集活動は連続と続いていくことになる。もちろん、このグループ分けの輪郭はそれほど明確ではなく、グループ間の人的交流も見られる。

第二世代の最大のグループは岩崎民平の学問・辞書編集についての考え方を受け継ぐ、岩崎研究会のメンバーを中核とするグループである。一九八〇（昭和五十五年）年、このグループが中心となり『新英和大辞典』第五版（研究社）が出版された。この日本を代表する大型辞書には、編集主幹の小稲義男をはじめとして、編集者に山川喜久男、小西友七、竹林滋、編集協力者としては小川繁司（昭和三十年卒）、東信行（同三十三年卒）、渡邊末耶子、その他、執筆者として十数名の卒業生が参加した。

現在、岩崎研究会の会長、副会長である竹林滋、小島義郎（昭和二十三年卒）が中心となったグループが、七、八年間の苦勞の末、一九七二（昭和四十七）年本格的な学習英和辞書『研究社ユニオン英和辞典』の発刊に漕ぎ着けた。

現在、この辞書は、編者に東信行を加え『ライトハウス英和辞典』第三版（研究社、一九九六年）、『カレッジライトハウス英和辞典』（研究社、一九九五年）として学習英和辞書界のリーダー的存在となっている。また、岩崎の辞書作りのしめくくりとでも言うべき『新英和辞典』第六版は一九九四年に出版されたが、編者として竹林滋のほかに小川繁司が加わり、渡邊末耶子、諏訪部仁（昭和三十七年卒）、市川康男（大学院、同四十七年修了）など十数名の外語出身者が執筆に協力した。岩崎の流れを汲むほかの主な辞書としては、一九八四年刊行の『リーダーズ英和辞典』（研究社）がある。この辞書は、松田徳一郎（昭和三十二年卒）が中心となり、横山一郎（同三十年卒）、東信行が編集に、高橋作太郎（同四十年卒）が編集協力に参画し、執筆者には木村建夫（同四十年卒）、岡村祐輔（大学院、同四十六年修了）ほかの卒業生が加わった。同じく松田徳一郎の監修による百科事典的な補遺として、『リーダーズ・プラス』が一九九四年に出版され、高橋（作）、木村、馬場が編集陣に加わった。

第二世代のもう一つのグループは佐々木達の流れを汲むグループで、佐々木の東大での教え子木原研三、外語での教え子芦川長三郎等が中心となっていくつかの英和辞書の編集が続けられて来ている。たとえば、一九九四年刊行の『新グローバル英和辞典』（三省堂）、一九九六年刊行の『ニューセンチュリー英和辞典』（三省堂）である。また、このグループによるものではないが、同じく三省堂より一九九七年に刊行された、若林俊輔（昭和三十年卒）編『ヴィスタ英和辞典』は、発音表記で、原音に近い「カナ発音」と従来の発音記号を併用するなどの特色でユニークな学習英和辞書として注目されていることも付け加えねばならない。

特記すべきもう一つのグループは小西友七を中心とし、小西の教え子などで形成される、関西のいくつかの大学を本拠とするグループである。小西はすでに触れた辞書の編集に加えて、『ジーニアス英和辞典』改訂版（大修館書店、一九九六年）に代表されるジーニアス・シリーズの編集主幹、『ニューセンチュリー和英辞典』（三省堂、一九九一

年)の編集主幹、「プログレッシブ英和中辞典」(小学館、一九八〇年)などの共編者として超人的とも言える活躍をしている。また、小西は「ラーナーズプログレッシブ英和辞典」(小学館、一九九二年)を堀内克明らとの共編で出版した。堀内克明も、英和・和英辞典、英語情報辞典、俗語辞典、イディオム辞典などを編集し精力的な活躍をしている。

これまでに和英辞典についても触れたが、従来の和英辞典は一九七四(昭和四十九)年に刊行された、山田和男(昭和二年卒)ほかが監修し、寛太郎(大正十五年卒)が編集協力した「新和英大辞典」(研究社)やその前身の大型の和英辞典に代表された。すなわち、学習者用のユーザーフレンドリーな和英辞書は存在しなかった。ところが、学習者用英和辞書の出現とともに、当然のことながら、学習者用和英辞書への需要は高まって来た。前述の同窓会の百年史で中尾啓介は次のように述べている。

和英の制作は達意の英文の書き手の名人芸として敬し遠ざけられてきた。「新クラウン和英辞典」(三省堂、一九六一)の編者山田和男、「新コンサイス和英辞典」(三省堂、一九七五)の編集協力者伊藤富士麿(昭和二十二年卒)などはこのタイプを代表する。これに対して、小島義郎は日英語対照論、意味論、語用論などに基礎をおいた画期的な発表用和英辞書「ライトハウス和英辞典」(研究社)を一九八四年、世に出した。この和英辞典の出現は社会一般の従来の和英辞書の認識を覆えし、和英辞書についての新たな需要を掘り起こすことに成功し、和英辞書制作・出版は、この辞書を機にそれ以降の流れを一変した。これはその後の「カレッジライトハウス和英辞典」(一九九五)とあわせて一〇名を超える同窓生がその執筆・編集にあたっている。なお、山田の「新クラウン和英辞典」は猪狩博(同二十二年卒)、竹前文夫(同三十五年卒)によって改訂されている。

なお、「カレッジライトハウス和英辞典」の編者は小島義郎、竹林滋、中尾啓介で、編集・執筆には小川繁司、宗

宮喜代子（昭和四十五年卒）、朝尾幸次郎（同四十六年卒）、増田秀夫（大学院、同五十年修了）等が協力した。

特殊辞典

英和・和英辞書以外にも、外語関係者による辞書編集は多くみられるが、数があまりにも多いのでとも列挙できない。ここで、手元にあるものをいくつか挙げてみる。たとえば、東信行・諏訪部仁訳編『研究社・ロングマン・ディオム英和辞典』（一九八九年）ならびに『研究社・ロングマン・句動詞英和辞典』（一九九四年）は単なる訳書ではなく、「日本語版では原著の特性を充実させるとともに、日本人使用者に役立つ情報を新たに盛ることにした」（日本語版まえがき）辞書である。この辞書には多くの卒業生が協力した。『BBI英和連語活用辞典』（丸善、一九九三年）には、馬場彰、小倉敏博（昭和四十八年卒）が訳編者として名をつらねている。さらに、『岩波新英和辞典』（一九八七年）では東信行、諏訪部仁、馬場彰が編集に、その他数名の卒業生が執筆に、協力した。なお、それぞれの専門分野からの辞書編集への貢献もさまざまみられるが、ここではすべてに触れる余裕はない。たとえば、語源関係では秦宏一（昭和三十九年卒）、木村建夫、山本文明（同四十五年卒）、音声学関係では竹林滋、渡邊末耶子、清水あつ子（昭和四十五年卒）、斎藤弘子（同五十七年卒）等がいろいろな辞書の編集に協力している。

一九三四（昭和九）年から四一年まで本学の外国人教師であったアルバート・シドニー・ホーンビー（Albert Sidney Hornby）は、やはり本学の外国人講師であったハロルド・E・パーマー（Harold E. Palmer）発案の動詞型を整理発展させ、世界で初めての外国人学習者用の英英辞典 *An Idiomatic and Syntactic English Dictionary*（開拓社）を他の二人の著者と共編で、一九四二年に刊行した。この辞書はその後、何回も改訂・改名され、一九九五年に刊行された *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* 第五版（Oxford University Press）に引

き継がれている。なお、パーマーは一九二九（昭和四）年発行の竹原常太編「スタンダード英和辞典」（大修館）に発音担当として名をたらねている（早川・前掲「年表」、七一ページ）。

辞書学の興隆

ところで、辞書編集は既に第三・第四世代に重心が移りつつあって、一部は岩崎研究会の若手の会員がその役割を担っているのが現状である。ここ数年の間に、辞書学は、国内的にも国際的にも、非常に盛んになり、主として英語関係の辞書編集にかかわっている人が辞書学の分野で論文を発表したり、学会や研究会で研究発表をすることが多くなった。そのような学問的な動向を反映したような形で、一九九五（平成七）年度から本学で「辞書学」という授業題目の講義が宮井捷二によって始められた。この講義は旧カリキュラムでは、英米科以外の学生も受講できる英語学特殊研究科目として、新カリキュラムでは、言語・情報コースの専修専門科目・欧米第一課程（英語・ドイツ語専攻）地域専門科目として開設されている。

この辞書学の入門的な講義は、lexical semantics の理論などを応用して、語義論、辞書の歴史・種類・構成、二言語辞書、学習辞書などについて、辞書編集の具体例にも触れながら、論じられている。なお、この講義のことは北米辞書学会の機関誌 *Dictionaries*（一九九七年、七九ページ）で詳しく紹介された。このようにして、「辞書学」は今や、本学の研究・教育体制の中で定着したと言える。

付表 英語関係者が編集などに関与した主な英和・和英辞典の一覧

この一覧表には原則として初版のみを載せた。ただし、編集者、執筆者、その他に変更があつた場合は第二版以降

も含めたが、数が多いこともあって、正確でない部分があるかもしれない。なお、ホーンビーほか編の英英辞典もこの表に載せた。

二 研究と教育

- 一八九一年 『和英袖珍新字彙』(三省堂)(イーストレーキ、神田乃武共著)
- 一九〇二年 『新訳英和辞典』(三省堂)(神田乃武ほか編)
- 一九〇六年 『英語難句難語辞典』(参文舎、文海堂、積文社)(片山寛、上條辰蔵ほか編)
- 一九〇九年 『英和双解熟語大辞典』(有朋堂)(神田乃武、南日恒太郎共編)
- 一九一一年 『模範英和辞典』(三省堂)(神田乃武ほか編)
- 一九一四年 『袖珍和英辞典』(有朋堂)(A・W・メドレー、入江祝衛共編)
- 一九一六年 大増補『模範英和辞典』(三省堂)(神田乃武ほか編)
- 一九一七年 『袖珍英和辞典』(三省堂)(神田乃武、金沢久共編)
- 一九一九年 『袖珍和英辞典』(三省堂)(神田乃武、石川林四郎共編)
- 一九二二年 『袖珍コンサイス英和辞典』(三省堂)(神田乃武、金沢久共編)
- 一九二五年 『例解 中学英和新辞典』(三省堂)(吉岡源一郎編)
- 一九三六年 『研究社新英和大辞典』第二版(研究社)(編集主任 岩崎民平)
- 一九四一年 『簡約英和辞典』(研究社)(編集主任 岩崎民平)
- 一九四二年 *An Idiomatic and Syntactic English Dictionary* (開拓社)(A・S・ホーンビーほか編)
- 一九四七年 『ポケット英和辞典』(研究社)(編集主任 岩崎民平)

- 一九五三年 「研究社新英和大辞典」第三版（研究社）（岩崎民平ほか編集）
- 一九五六年 「新簡約英和辞典」（研究社）（編集主任 岩崎民平）
- 一九六〇年 「研究社新英和大辞典」第四版（研究社）（岩崎民平ほか編集）
- 一九六一年 「新クラウン和英辞典」（三省堂）（山田和男編集）
- 一九六七年 「研究社新英和中辞典」（研究社）（岩崎民平、小稻義男共編）
- 一九七二年 「研究社ユニオン英和辞典」（研究社）（竹林滋、小島義郎共編）
- 「アンカー英和辞典」（学習研究社）（小西友七ほか編集）
- 一九七三年 「現代英和辞典」（研究社）（岩崎民平監修）
- 一九七四年 「新和英大辞典」第四版（研究社）（山田和男ほか監修）
- 一九七五年 「新コンサイス英和辞典」（三省堂）（編集 佐々木達）
- 「英和中辞典」（旺文社）（小川芳男監修）
- 「アメリカ俗語辞典」（研究社出版）（堀内克明訳編）
- 一九八〇年 「新英和大辞典」第五版（研究社）（小稻義男ほか編集）
- 「プログレッシブ英和中辞典」（小学館）（編集主幹 小西友七ほか）
- 「グローバル英和辞典」（三省堂）（佐々木達ほか編集）
- 「リーダーズ英和辞典」（研究社）（松田徳一郎監修）
- 「ライトハウス英和辞典」（研究社）（竹林滋、小島義郎共編）
- 「ライトハウス和英辞典」（研究社）（小島義郎、竹林滋共編）

- 一九八五年 【新コンサイス英和辞典】第二版（三省堂）（佐々木達ほか編集）
- 一九八七年 【ニューセンチュリー英和辞典】（三省堂）（佐々木達ほか編集）
- 一九八八年 【ジーニアス英和辞典】（大修館）（編集主幹 小西友七）
- 【ニュー・アンカー英和辞典】（学習研究社）（小西友七ほか編集）
- 一九九〇年 【ライトハウス英和辞典】第二版（研究社）（竹林滋、小島義郎共編）
- 【ライトハウス和英辞典】第二版（研究社）（小島義郎、竹林滋共編）
- 一九九一年 【ニューセンチュリー英和辞典】第二版（三省堂）（芦川長三郎ほか編集）
- 【ニューセンチュリー和英辞典】（三省堂）（編集主幹 小西友七）
- 【ニューサンライズ英和辞典】（旺文社）（小川芳男監修）
- 一九九二年 【ハイトップ英和辞典】（旺文社）（小川芳男監修）
- 【ハイトップ和英辞典】（旺文社）（小川芳男監修）
- 【ラーナーズ プログレッシブ英和辞典】（小学館）（小西友七ほか編集）
- 一九九四年 【新グローバル英和辞典】（三省堂）（芦川長三郎ほか編集）
- 【リーダーズ・プラス】（研究社）（松田徳一郎監修）
- 【小学館ランダムハウス英和大辞典】第二版（小学館）（編集主幹小西友七、堀内克明ほか）
- 【グリーンライトハウス英和辞典】（研究社）（竹林滋、小島義郎共編）
- 【カレッジ・ライトハウス英和辞典】（研究社）（竹林滋、小島義郎、東信行共編）
- 【カレッジ・ライトハウス和英辞典】（研究社）（小島義郎、竹林滋、中尾啓介共編）
- 一九九五年

『新クラウン和英辞典』第六版（三省堂）（山田和男ほか編集）

一九九六年 『ニューセンチュリー英和辞典』第三版（三省堂）（芦川長三郎ほか編集）

『ニューセンチュリー和英辞典』第二版（三省堂）（編集主幹 小西友七）

『ライトハウス英和辞典』第三版（研究社）（竹林滋、小島義郎、東信行共編）

『ライトハウス和英辞典』第三版（研究社）（小島義郎、竹林滋、中尾啓介共編）

一九九七年 『ヴィスタ英和辞典』（三省堂）（若林俊輔編）

5 英米文学

（1）戦前

戦前の外語は、学術研究を旨とする大学ではなく、一九二七（昭和二）年に四年制への「昇格」を遂げはしたものの、一貫して語学の専門学校であったため、英米文学の研究とは縁が薄かった。この点については、龍口直太郎（大正十四年卒）や安藤一郎（昭和三年卒）の言を引いてすでに述べたところである（4 東京外国語学校（5）英語科・英語部の性格」参照）。また、草創期の教授陣のなかに、文学研究を専門とするものはいない（マツケローは、のちの経歴からすると、あるいは文学の専門家であったかもしれないが、彼が外国語学校在任中に、音声学のほか文学作品を教えたかどうかはわからない。いずれにしてもマツケローは、わずか三年でイギリスに帰国してしまった）。英文科出身の専任教官は、一九一七（大正六）年の井手義行（教授）の着任まで待たなければならなかったが、英語好きが集まっている英語科とあれば、生徒のなかから英文学に目覚め、その道に進もうと考えるものが出てくるのは

自然の成り行きであろう。第三回生(明治三十五年卒)の大橋栄三(一八七九—一九六六)はその一人であった。

大橋は、京都一中教諭、明治専門学校教授を経て、一九二一(大正十)年、母校に教授として迎えられた。大橋の業績のなかでもっとも有名で、今日もなお英文学徒を裨益し続けているのは、マーク・トウェインの傑作 *The Adventures of Huckleberry Finn* に付された解説と注釈であろう。これは「研究社英文学叢書」の一冊として一九二三年に出版された。この叢書は、市河三喜と岡倉由三郎監修のもと、当代の英文学者を総動員して、英米文学の代表的作品の注解つきテキストを提供しようと試みたもので、二一年に第一巻を刊行し、一九三二(昭和七)年に全百巻をもってひとまず完了した。一出版社の企画ではあるが、日本の英文学研究の歴史において画期的な出来事であった。大橋の「バック・フィン」の注釈については、英米に注釈付きのテキストはおろか、トウェインの専門辞典もまったくなかった時代に、よくこれだけ正確で詳細な注をつけえたものと感心しないわけにいかない。彼はのちに評伝 *Mark Twain* (和文)(研究社、一九三六年)も書いた。注釈の仕事としては、英文学叢書の続編に収められた *Two or Three Graces* (Aldous Huxley), *Jude the Obscure* (Thomas Hardy) のほか、多数が知られている。

注釈といえは、岩崎民平の名を落とすわけにはいかない。岩崎が注釈の仕事を始めた契機についてはすでに述べたので繰り返さないが〔4 東京外国語学校、(4)昭和期の制度〕参照、彼は上記英文学叢書のうち三巻を手がけている。すなわち *Kim* (Kipling) (一九二四年)、『*English Short Stories* (一九二五年)』、『*Plain Tales from the Hills* (Kipling)』(一九三〇年)である。正確で勘所を押さえた注は、岩崎の名を広く世に知らしめることとなった。しかし、すぐれていたのは注釈ばかりではない。これらの本の巻頭に付された解説のなかで、岩崎は数十ページにわたる作家論・作品論を展開し、英文学者としての才能も発揮したのだった。注釈の仕事は、一九六二(昭和三十)年の *How to Scrape Skins* (Mikes) まで、その後も断続的に続けている。岩崎には注釈とともに、翻訳も何点

かある。もつとも有名なものは、おそらく、角川文庫に収められて多くの読者を獲得したルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』（一九五二年）であろう。これはもともと、『不思議国のアリス』（一九二九年）として、研究社の「英文訳註叢書」に収められていたものである。

話が前後するが、明治期の外国語学校は、一人の傑出した英文学者を生みだしている。石田憲次（明治四十四年卒）である。石田（二八九〇—一九七九）は、岩崎が外語受験のため上京したとき、同郷（浅田栄次の故郷でもある山口県徳山）のよしみで世話をして以来、岩崎と終生変わらぬ親交を結んだ。外語を出ると、京都帝国大学文学科大学に進み、一九一六（大正五）年に卒業。同志社の教授を経て、一九二四（大正十三）年に京都大学に迎えられ、上田敏、厨川白村のあとを受け継いで、同大学英文科の発展に多大の貢献をした。

本節の冒頭に述べたとおり、英語科に英文科出身の教授が着任したのは、一九一七（大正六）年の井手義行（教授）をもって最初とする。続いて、翌々年に千葉勉が教授陣に加わっている。ともに東大英文科の出身で、千葉のほうが井手の六年先輩に当たると。千葉と同じ年に校長に就任した長屋順耳、および一九三二（昭和七）年に長屋の跡を継いだ戸澤正保校長もまた、東大英文科を卒業している（長屋、戸澤、千葉、井手はそれぞれ、明治三十年、同三十二年、同四十年、大正二年卒）。学科の運営に大きな力を振るい、中学校の英語教師養成に関心を寄せていた浅田の没後に、帝大出身の文学の専門家が立て続けに採用されたことは、外語の英語科の性格を変えずにおかなかったと思われる。公式の記録がみつからないので憶測でしかないが、チョーサーやミルトンの講読、英文学史の講義などは彼らの着任がもたらしたものではなからうか。龍口直太郎（大正十四年卒）は、千葉を追悼するエッセイに「外語に文学の窓を開いた人」というタイトルを付けている（千葉亨・堀憲義編『千葉勉の仕事と思い出』（私家版、一九六四年、八九ページ）。龍口は戦後長らく早稲田の教授を務め、アメリカ文学を精力的に紹介した。外語にも非常勤講師

として出講している。また、千葉がとりわけ目をかけた生徒の一人といわれる島田謹二（大正十一年卒）の語る師の思い出には、鋭く、かつ示唆に富む指摘が含まれているので、多少長いが原文を引用しておこう。

何となくのどかな大きな感じのする授業であった。……旧制高等学校などの文科系統の教室がもつある伝統を、先生は伝えていたのだろう。……外国語学校というところは、外国語の専門教育をめざすのだから、発音や文法に重きをおくのは当然である。ただそれが、あまりテクニカルになりすぎると、時々こっけいな方向に傾きすぎ、一種の「英語技手」の育成に終始してしまう弊も生まれないわけではない。……そうした方向にだけ指導される生徒たちは、うっかりすると、いかにも人間の小さい、みじめな存在になることだってないとはいえない。……千葉先生の存在は、そういう意味で、外国語学校英語科の大勢の *antidote* だったといえよう。

（前掲書、七七ページ）

島田は、周知のとおり、日本に比較文学・比較文化研究を確立した大功労者である。外語卒業後東北大学英文科に進み、台北大学講師を経て、一九四九年から六一年まで東大教授を務めた。Antidote 千葉の言葉としては、「善良な中学教師をつくることだけが、外語の特色ではない」や、「注釈もいい、しかし注釈ばかりしたってだめだ」も伝えられている（前掲書、九二―九三ページ、一一四ページ）。

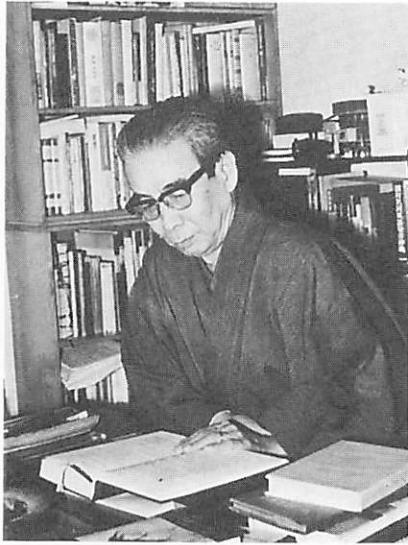
龍口、島田のほか、堀大司（大正十三年卒、一九〇三―一六八）と安藤一郎（昭和三年卒、一九〇七―一七二）も千葉の薫陶を受けて文学を志している。堀は、島田同様東大に進学、戦後東大教授となった。堀の業績は、量において島田に譲るものの、いずれもユニークである。安藤については、このあと「戦後」の節で紹介することにして、ここでは、龍口が安藤らと語らい、東大出身の西川正身らも引き入れて昭和初年に起こした MEL と称するグループの運動のことを記しておく。MEL とは、Modern English Literature の略で、グループは、安藤にいわせると、「現代英文学研究の旗印を掲げ、パンフレットや訳註叢書を出しはじめた。ジョイス、ロレンス、ウルフ等を全面的に取り上

げたので、当時（昭和四年）としては、かなりショックで、ある「物議」をかましたのであった」（前掲書、九二ページ）。若き日の安藤（当時二十二、三歳）の威勢のいいタンカを聞く思いがあるが、西川は、これがアカデミズムに対する反逆精神から出ていて、運動として一定の成果を上げたことを認めながら、六冊出た訳註叢書の半分までが「アンブローズ・ビアス、ジョン・ゴールズワージー、ヒュー・ウォルポールというのですから、MELグループの仕事としては看板に偽りありといわれても仕方がなく……」と、もう少し覚めた見方をしている（西川正身「アメリカ文学覚え書（増補版）」研究社出版、一九七七年、三九一ページ）。

（2）戦 後

一九四四（昭和十九）年に千葉が退職し、井手も四五年には外事専門学校の校長事務取扱を経て、校長に就任したので、戦後における英文学の研究と教育は、四一年、四二年に相次いで着任していた、安藤一郎、梶木隆一の二人に任されることになった。新制の東京外国語大学が設立されて二年後、一九五一（昭和二六）年に、小野協一（八四年まで在職）を迎えて、文学の専門家がふたたび三名となっている。小野もまた、東大英文の出身（昭和二十一年大学院修了）である。

安藤（七〇年まで在職）は、すでにMEL運動に関連してふれる機会があったが、いわゆる文学青年で、在学中に同人誌を発刊し、外語卒業（昭和三年）の二年後、二十三歳の年に、詩集「思想以前」を自费出版して詩壇にデビューしている。生涯詩作を続け、最後の詩集「夢のあいだ」（思潮社、一九六七年）まで、合計八冊の詩集を刊行した。詩の翻訳も多数手がけている。もともと広く知られているのは、カール・サンドバーグの「シカゴ詩集」（岩波文庫版、一九五七年）であろうが、戦後文芸出版社が競って企画した世界文学全集や詩人全集にも安藤の訳詩を数多く見



安藤一郎

出すことができる。また、かねてからジェイムズ・ジョイスに注目して、その諸作品を読んでおり、上述MEL運動の一環として、『The Dead』の訳註（『死せる人々』開拓社、一九三〇年）を出し、一九三二（昭和七）年には岩波文庫版『ユリシーズ』に六名の共訳者の一人として名を連ねたほか、単独で *Dubliners* を全編翻訳している（『ダブリン市井事』弘文堂、一九四〇—四一年。河出書房版をへて、最後は新潮文庫版『ダブリン市民』一九五三年）。戦後は一挙に英語の時代が到来し、安藤のもとには『英語青年』のような専門誌のみならず、一般雑誌や新聞、はては放送局からも、原稿執筆・出演の依頼が舞い込んだのであろう。想像を越える量の仕事をこなしている。

『V. Sackville-Westと英国の伝統』（『英文学研究』第一六巻、一九三六年）で研究生活を開始した梶木は、二十世紀のイギリス小説を専門とし、外語では（七三年まで在職）この領域を中心に講義・講読を行っているが、後年にはメルヴィルを読んだり、米文学概論を講じたこともあった。対外的な活動範囲は、同僚だった小川芳男に劣らず広く、戦後すぐ手がけた児童文学の翻訳、梶木の名をとくに世に広めた高校生向けの英語参考書、検定教科書、辞典類の執筆から、NHKラジオ・テレビの英語講座の担当にまで及んでいる。梶木に対して、小野（在職一九五一—八四年）は同じイギリス文学でも、演劇、とりわけ十七世紀初頭から半ばにかけて活躍した、ベン・ジョンソン、ジョン・ウエブスター、ジョン・フォードらの作品を好んで授業で取り上げるとともに、それらに関する研究論文を発表してきた。シェイクスピア作品では『から騒ぎ』を邦訳している（筑摩書房、一

九六七年)。同時に、二十世紀の文学者オーウェル、コンラッド、ジョイスらにも関心を寄せ、前二者については研究書と翻訳を著している。スペインの内戦にかかわった詩人たちを論じた『スペインの内戦をめぐる』(研究社出版、一九八〇年)が、外語在職中の最後の著書である。

戦後はアメリカ文学が読書界で大流行するとともに、多くの大学で盛んに研究・教授されるようになった。一九五一年から五四年にかけて龍口直太郎に非常勤講師として出講してもらってこの新しい動きに対処していた外語で、アメリカ文学の研究が活性化・本格化したのは、一九五五(昭和三十)年にいたって、大橋健三郎(昭和十六年卒、その後、昭和十八年東帝国大学法文学部文学科卒)が専任教官(助教授)として着任し、フォークナーを取り上げて「アメリカ文学講読」の店開きをして以来のことである。しかし、大橋は六二年には東大文学部へ転出してしまおうで、外語に在職した期間はわずか七年であった。この間に執筆した著書は『危機の文学——アメリカ三十年代の小説』(南雲堂、一九五七年)一点のみであるが、その後、独創性に富む研究書を矢継早に著すとともに、日本アメリカ文学会の創設に力を尽くし、その会長を二期務めた。

大橋が転出した一九六二年に、外語は二人の文学者を迎え入れていく。西田實(七九年まで在職)と河野一郎(九一年まで在職)である。西田は、戦前に東京高師を出たあと、いったん教職に就き、戦後東大大学院を卒業した。外語では、大橋のあとを継いで米文学講読と米文学史を担当した。小説のみならず、演劇もしばしば取り上げている。一方河野(昭和二十六年、二十九年卒)は、英米文学講読を担当するかたわら、「翻訳演習」を開設して、英米語学科の授業に新風を吹き込んだ。この演習では、英文の和訳だけでなく、年度によつて英文エッセイや和文英訳を課題として与え、河野ならではのユニークな訓練を行っている。西田と河野はともに数多くの名訳を世に送って、翻訳の名手の名をほしいままにした。西田が訳したのが、ほとんど二十世紀のアメリカ小説であるのに対して、河野には、

(イギリスに傾いてはいるが)英米双方の小説に加えて、数は少ないものの詩の翻訳(日本語の詩の英訳も含む)もあり、また数冊の翻訳指南書もある。西田が注釈書も手がけたのに対して、河野は翻訳に徹した。西田の翻訳でもっともよく知られ名訳の替れ高いのは、岩波文庫に収められたマーク・トウェインの「ハックリベリー・フィンの冒険(上・下)」「(一九七七年)であろう。一方河野は、筆者への私信の中でこれまでの仕事でいちばん好きな作品として、カポージェイの「遠い聲 遠い部屋」(新潮社、一九五五年)を挙げている。

安藤が退職した翌年の一九七一(昭和四十六)年、志村正雄(助教授)がアメリカ文学の担当者として着任した(九二年まで在職)。日本の読書界では志村は、アメリカ文学の最先端を行くジョン・バース、トマス・ピンチオン、ドナルド・バーセルミらの作品やゴシック小説の精力的な翻訳者・紹介者として知られている。しかし、同時にアメリカ文学研究者として、過去三〇年間にわたり数多くの批評・論文を(ある時は英文で海外に向けて)発表してきた。それらは、新しい文学に限らず、ホーソン、メルヴィル、クレメンス(マーク・トウェイン)、クーパー、ヘンリー・ジェイムズから、フォークナー、ヘミングウェイ、ガートルード・スタインなどにまで及び、個々のテーマは、しばしば時と場所を越えた文学や文化理論との対比のなかで論じられて、ありきたりなことは言うまいとする筆者の信念に貫かれている。外語在職中の志村のもっとも重要な業績は、『英語青年』誌上に八八年から九〇年まで二二回にわたって連載された「アメリカ文学と神秘主義」であろう。これは加筆・修正され、九八年にいたって『神秘主義とアメリカ文学——自然・虚心・共感』のタイトルのもとに単行本化された(研究社出版、一九九八年)。志村の仕事の紹介の最後に、「日本における文学研究の伝統的正道は注釈にあると考えるので、私は注釈の仕事を重ね、主として大学生を視野に置いた注釈本を十冊ほど出している」との志村自身の言葉を引用しておく(志村正雄「教育研究業績書」未公開、一九九五年、二七—二八ページ)。

志村以後に着任した英米文学の教官については、「一 組織と制度の変遷」を参照されたい。本稿「英米文学」は、執筆者をえられず、やむをえず全体の責任者の高橋が締め切り間際になってまとめたため、全体としてきわめて不十分なものとなった。とりわけ、戦後外語を卒業し他大学で活躍している英米文学の専門家には、いっさいふれることができなかった。関係者の寛恕を乞う次第である。